



アメリカ小説の翻訳書に見られる問題点(下)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 陽介 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011148

アメリカ小説の翻訳書に見られる問題点（下）

村上陽介

xiv イディオム

アメリカ小説の翻訳書に見られる誤訳を類型化して初めて気づいたことだが、アメリカ小説の翻訳を試みようとする人なら知っているも当然と思えるようなイディオムを、勝手に意味を推測して訳出している例が驚くほど多い。イディオムをそれと認識する能力は、英語に多く触れることによってのみ養成されるものであろうから、コンテキスト抜きでイディオムを個別に論じてみても始まらないと思われるが、ごく基本的なものを中心に、いくつか取り上げたい。核となっていると考えられる単語のアルファベット順に取り上げる。基本的なイディオムに関する参考文献としては、*NTC's American Idioms Dictionary* が例文も豊富で一番手頃と思われるので、説明に際しては、この辞典を適宜利用することにするが、一般の辞典で確認するための便宜上、核となる単語あるいは要素にアンダーラインを付けておく。まず最初に、名詞が核となるイディオムを検討する。

“come of age” (McCarthy, 27) は「生きる」(41)¹と訳出されているが、これは言うまでもなく、<成人に達する>という意味である。ここでは、<成人する>、<成人となる>ぐらいが適当であろう。いわゆる<成人の日>が、英語では <Coming-of-Age Day> と呼ばれることは、常識的な事柄であろう。

“out of thin air” (Faulkner, *Go Down, Moses*, 200; *Light in August*, 218, 287; *Sanctuary*, 302) は、それぞれ、「稀薄な空気のなかから」(233)、「稀薄な大気の中から」(164)、「稀薄な空気から」(216)、「薄い空気の中から」(316)と訳出されている。翻訳者たちは、“out of

thin air”をイディオムとは思わず、いわゆる〈文学的な表現〉だと受け取ったのであろう。NTC's *American Idioms Dictionary* に “out of nowhere; out of nothing” と説明があるとおり、これは、〈どこからともなく〉という意味のイディオムである。

“Us both be hitting Nettie's schoolbooks pretty hard, cause us know we got to be smart to git away.” (Walker, *The Color Purple*, 10) は、翻訳書では、「二人でネッティーの教科書であの男の頭を力いっぱいたたかとか。逃げ出すんなら上手にしなきゃならないって思うから。」(16)となっているが、ここで使われている “be hitting Nettie's schoolbooks” という表現が、〈hit the books〉というイディオムの応用であることに翻訳者が気づかず、構文を無視して、意味を勝手に推測した結果であろう。この 〈hit the books〉というイディオムは、口語で、〈(熱心に)勉強する〉という意味である。つまり、この引用箇所は、〈あたしら、二人ともネッティーの教科書でずいぶんがんばって勉強してたの。だって、逃げ出すんなら頭がよくなきゃだめってこと、分かってたから。〉といった意味である。

[T]hen the river, the water about them, was full of dogs. [The dogs] swam faster than the mules; they were scrabbling up the bank before the mules touched bottom. (Faulkner, *Go Down, Moses*, 229-230)

翻訳書では、最後の副詞節は、「驟馬が川沿いの低地に達しないうちに」(269)となっているが、〈touch bottom〉はイディオムで、〈(足が)水底にとどく〉という意味である。つまり、この副詞節は〈水底にラバたちの足がつく前に〉とでも訳出すべきところなのである。

次の①～③については、〈have no business doing something〉というイディオムに関する知識の欠如が見られる。

① “[Let me tell you] who you're expecting to drop everything

and carry you back where you had no business ever leaving.”
 (Faulkner, *Sanctuary*, 56) / 「自分で出てくる必要もなかったところ
 へ、何もかも放りだして連れもどしてくれるものとおまえさんが思いこ
 んでいる、その相手の人間が誰かということを[教えてあげるよ。]」
 (62)

② “I reckon she aint got any business trying to go anywhere
 right now[.]” (Faulkner, *Light in August*, 85) / 「今すぐにわざ
 わざどこかへ行かなければならないことはないようだわね[。]」 (64)

③ Mr. Antolini said that anybody that could write like D.B.
 had no business going out to Hollywood. (Salinger, 181) / 「ア
 ントリーニ先生に言わせると、D・Bのような作品の書ける人間がハリ
 ウッドへ行ったらしょうがないって言うんだ。」 (254)

この <have no business doing something> というのは、*NTC's American Idioms Dictionary* の説明を借用すれば、“to be wrong to do something; to be extremely unwise to do something” という意味なのである。つまり、①の発話は、<そもそもそこでじっとしているべきだった場所に、何もかも放りだして自分を連れもどしてくれるだろうとお前さんが思っているのが、どういう人間か教えてあげるよ。> という意味である。また、②の発話は、<今すぐにはどこかへ出かけようと思わないほうがいいと思うね。> といった意味であり、③は<アントリーニ先生は、D・Bみたいに書ける人間なら、ハリウッドへ行くのは間違ってるって言ったんだ。> という意味である。

翻訳書では、“if she got the daylight[s] whammed out of her” (Capote, 108) は、「フローラベルが二度と陽の目を見られないほどやっつけられても」(126) となっているが、<beat the (living) daylight[s] out of someone> というイディオムを翻訳者が知らなかったためであろう。このイディオムで使われている <daylights> は、<意識>、<正気>とい

う意味であり、イディオム全体では、〈誰かを気を失うほど打ちのめす〉という意味をもつ。私自身は用例をもたないが、辞典には、〈beat〉の代わりに〈kick〉、〈knock〉、〈lick〉、〈whale〉などが使われることがあると記載されている。² 引用箇所では用いられている〈wham〉の例は辞典には明記されていないが、〈beat〉の代用で使われていると考えて間違いはなかろう。つまり、引用箇所は、〈フローラベルがこっぴどく殴られても〉といった意味になる。

“That’s how he cant see eye to eye with other folks.” (Faulkner, *As I Lay Dying*, 234) は、翻訳書では、「やつが他人と目を合わせるができないのもそこなのだ。」(205) と訳出されているが、〈see eye to eye with someone〉というのは、〈誰かと意見が一致する〉という意味のイディオムなので、ここは、〈だからやつは他の連中と意見が合わないのさ。〉とでも訳出しておくべきところである。

翻訳書では、“[T]he tone [of the letter] was obsequious to the point of servility . . . when it was not delicate to a fault. . . .” (Styron, *Sophie’s Choice*, 276) の後半の副詞節を「相手の落度をばかしているが」(上、413) と訳出しているが、〈to a fault〉というイディオムを翻訳者が知らなかったためであろう。このイディオムは、本来は長所である事柄について、〈あまりにも〉、〈度が過ぎて〉という意味で使われる。つまり、問題の副詞節は、〈その手紙の調子は、あまりにも相手の立場に気を配りすぎているか、あるいはそうでなければ〉といった意味なのである。

“You have poor old Mrs. Smith wrapped around your little finger.” (Updike, 209) という発話は、翻訳書では「かわいそうな、年を取ったスミス夫人をいたわってやってるんですってね。」(下、58-59) となっている。翻訳者がなぜこのような意味に受け取ったのかは不明だが、〈誰かを手玉にとる〉、〈誰かを意のままに操る〉という意味をもつ 〈wrap someone around one’s (little) finger〉というイディオムを知らなかったことが誤訳の直接の原因となったことは間違いなかろう。³ 引用箇所は、〈かわいそうに、あなた、あの年寄りのスミスさんを思い通りに操れるようにしてるんでしょう。〉とでも訳出すべきところである。

<燃えている>という意味の <on fire> というイディオムは広く知られているはずなのだが、翻訳書では、“... I'm on fire[.]” (Capote, 203) が「ぼく火の上ののっているんだもの」(231)と誤って訳出されている。直後の“the wicked [die] in flames” (203) などという箇所からも分かるように、これは、罪深き者が地獄の炎で身体を焼かれているというイメージと関連する表現であり、<ぼく、体に火がついてるんだ>、あるいは、<ぼく、体が燃えあがってるんだ>とでも訳出しておくべきであろう。

“... I stand [her] to a meal once in a blue moon.” (Updike, 48) という発話は、「ちょっとセンチな夜に[彼女に]飯をおごってやったことがある[。]」(上、66)と訳出されているが、イディオムばかりか、時制まで無視した結果となっている。この“once in a blue moon”はイディオムで、<ごくまれに>という意味である。したがって、引用箇所は、<たまに彼女に食事をおごってやることもある。>という意味である。

Absalom, Absalom! の中で、チャールズ・ボンの息子のチャールズ・エティエンヌ・サン＝ヴァレリー・ボンが、結婚してから1年のあいだ、自分は黒人だと他人に向かって機会のあるたびに言い立てるというエピソードが語られる。⁴ 彼にはわずかばかり黒人の血が流れているが、外見上は何ら一般の白人と変わらないという設定になっており、このエピソードの記述のさなかにも、彼のことを“the white-colored man” (Faulkner, *Absalom, Absalom!*, 167) と描写している箇所が出てくる。ところが、翻訳書では、自分は黒人であるという彼の主張を聞いた白人たちが、「彼が自分の皮膚が黒いから嘘をついているのだ」(195)と信じ込んだこともあった、と書かれているので、翻訳書の読者はとまどうことであろう。原文では、問題の箇所は、“[He] lied in order to save his skin. . . .” (167) となっている。この <to save one's skin> はイディオムで、<危機から脱する>という意味である。つまり、原文からの引用部分は、白人相手に問題を起こしたときに、チャールズ・エティエンヌ・サン＝ヴァレリー・ボンがなんとかその場を切り抜けようとして嘘をついたという、白人たちの解釈を示しているのである。したがって、<無事に逃れようとして嘘をついたのだ>とでも訳出すべきなのである。

同じ翻訳書で、“[keep] a kitchen garden of sorts” (Faulkner, *Absalom, Absalom!*, 99) を「雑多な野菜を菜園につく[る]」(112)と訳出しているが、<of sorts> はイディオムで、この場合は、<お粗末な>といった意味で使われている。全体は、<お粗末な野菜畑の手入れをする>とでも訳出しておけばよいと思われる。

“Dreams are my cup of tea.” (Bowles, 10) という発話は、翻訳書では、「夢の話は、ぼくにとってはお茶を飲むようなものですよ。」(17)となっているが、翻訳者が <one's cup of tea> というありふれたイディオムを知らなかったせいであろう。このイディオムはふつう否定文で使われるのだが、<趣味に合うもの>という意味をもつ。つまり、引用した発話は、<夢の話は僕の性に合ってますよ。>という意味なのである。

翻訳書では、“Let's jump off the train and paint the town red.” (Bellow, *Henderson the Rain King*, 127) という発話の“and”に続く部分を「ニューヨークじゅう残らず真っ赤に塗りつぶしてやりましょうよ」(179)と訳出しているが、ここで使われている <paint the town (red)> という表現は、<底抜けに大騒ぎする>、<盛り場を飲み歩く>といった意味をもつ、よく見かけるイディオムである。したがって、問題の部分は、<はしごして飲み歩きましょうよ>とでも訳出しておけばよいところである。

翻訳書では、“Have you been under the weather for long?” (Bowles, 333) という発話は、「あの暑さのなかに、そんなに長く[いたの]?’’(426)と訳出されているが、この <be under the weather> はイディオムで、今の場合は、<身体の調子が悪い>という意味である。また、“for long” は<長時間>という意味のイディオムであり、<so long> となっていない限りは、勝手に<そんなに長く>と訳出するのは根拠無しということになろう。結局、問題の発話全体は、<身体の調子が悪くなってからもう長いの?>とでも訳出しておけばよいはずである。

“Juana . . . threw caution to the winds, and she dressed Coyotito in the clothes she had prepared for his baptism. . . .” (Steinbeck, 44) のコンマまでの部分を、翻訳書では、「八方に気を配った

フワナは」(48)と訳出しているが、おそらく翻訳者が勝手に意味を推測した結果であろう。ここで使われている <throw something to the wind(s)> というのは、<何かを思い切ってかなぐり捨てる> という意味のイディオムであり、<throw> の目的語には、引用箇所の場合のように、しばしば <caution> が用いられる。実際、*NTC's American Idioms Dictionary* には、<throw caution to the wind> の形で採録されている。この形では、<大胆な行動を取る> という意味になる。引用箇所全体は、<フワナは思い切ってかねてから洗礼用に用意してあった着物をコヨティートに着せた>とでも訳出すればよい。

What else could we do? [Dürrfeld] says in a caustic, cutting voice. . . . [W]hat else could Germany do but employ its technological ingenuity to create a synthetic substitute that would not only be economical, durable, resilient, but—
“Oil-resistant!” There! The Professor has taken the words right out of Dürrfeld’s mouth. (Styron, *Sophie’s Choice*, 469)

翻訳書では、5行目の“Oil-resistant!”をデュルフェルトの発言と受け取ったうえで、“There!”以下を「それです!と教授はデュルフェルトの口から出たばかりの言葉をつかまえる。」(下、249)と訳出している。しかし、<take the words out of someone’s mouth>という表現はイディオムで、ここでは、<誰かの言おうとしていることを先取りして言う>という意味で用いられている。つまり、デュルフェルトが“but”に続けて<oil-resistant>と言おうとしていた矢先に、教授が先取りして“Oil-resistant!”と言ったわけである。また、“There!”というのは、語り手のコメントと考えるべきであろう。したがって、“There!”以下は、<やはりそうだ!教授はデュルフェルトが言おうとしていたことを先取りして言った。>とでも訳出するのが適当であろう。

I kissed her on the eyes, and then we arrived at her hotel on

the Quai Voltaire and were on top of the world, in each other's arms. (Bellow, *Henderson the Rain King*, 15)

翻訳書では、2行目の“on top of the world”を、どういうわけか、「世界を忘れ」(23)と訳出している。これもありふれたイディオムで、この場合は、<有頂天になって>という意味である。「世界を忘れ」でもまったくの見当違いということにはならないだろうが、ここはやはり定石どおり、<有頂天になって>と訳出しておくべきであろう。

次に、形容詞が核となっていると考えられるイディオムを取り上げたい。翻訳書では、“[S]he wouldn't have been up, let alone anywhere near the phone.” (Salinger, 66-67)は「電話の近くにいるかいないかをべつにしても、起きてるはずはまずないんだからな。」(97)となっている。おそらく、<let alone something> というイディオムを知らぬまま、翻訳者が“let alone anywhere near the phone”を<電話のどこか近くにいることはほうっておいて>という意味だと推測したためであろう。この<let alone something> というイディオムは、<何々は言うまでもなく>という意味であり、<I don't even have a dime, let alone a dollar.>のように使われたら、全体で、<1ドルどころか、10セントさえもっていない。>という意味になる。さきほど引用した箇所では、このイディオムを応用した表現が使われているわけであるが、基本形とはやや異なるので分かりにくいことは確かである。このようなときには、<let alone>に続く部分を節に1度書き改めてみればよい。つまり、この場合は、<she wouldn't have been anywhere near the phone>ということは言うまでもなく、という意味になる。したがって、引用箇所全体は、<電話のどこか近くにいるのはもちろんのこと、起きてもいなかっただろう。>とでも訳出するのが妥当であろう。

翻訳書では、“... the building since had fallen on evil days.” (Bowles, 115)を「この建物は、戦争中に破壊されたままになっていた。」(150)と訳出しているが、翻訳者は、“had fallen”と“on evil days”に分けて理解したのであろう。しかし、この場合の<fall on>は<(つら

い時期などを)経験する>という意味の動詞句を形成しているのである。この <fall on> は後に <hard times> のような語句を従えるが、とくに <evil days> が来ることが多く、一般に、<fall on evil days> で一つのイディオムを形成していると考えられている。<不運な目にあう>という意味である。したがって、引用箇所は、<その後、この建物は不運に見舞われてきていた。>とでも訳出すべきである。

The Sheltering Sky の中で、中心人物の2人が、サハラ砂漠の端に到達して、広漠たる眺めと対面しながら語りあう場面がある。そのうちの1人、ポート・モアズビーが以下のように言う。

“I think we’re both afraid of the same thing. And for the same reason. We’ve never managed, either one of us, to get all the way into life. We’re hanging on to the outside for all we’re worth, convinced we’re going to fall off at the next bump. Isn’t that true?” (Bowles, 101)

翻訳書では、3行目の “We’re” から次行の “worth” までを「ぼくらはいつも、自分たちにふさわしいものの外側にどうやらぶらさがっているだけなのだ」(135) と訳出している。小説を論じる際に、翻訳書からある箇所が丸ごと引用され、それに基づいて議論が展開されることがあるが、上に引用した発話もそのまま利用されることのある箇所である。しかし、とりわけ3行目の “We’re” から次行の “worth” までについて言えることだが、訳文は原文からは相当隔たっている。<hang on to something> という表現は、むしろ<何かにつかまる>という意味だし、<for all one is worth> という語句はイディオムで、<全力で>という意味をもつ。つまり、ここは、<ぼくらは懸命にその外側にしがみついているのだ>という意味なのである。

動詞を核とするイディオムがそれと認識されない事例は決して多くはないが、たまに見かけることがあるので、その一部を取り上げてみよう。翻訳書では、“when he had to relieve himself” (Faulkner, *Absalom*,

Absalom!, 160) を「疲労[しているときに]」(186) と訳出してあるが、<relieve oneself> はイディオムで、<排尿する>、あるいは、<排便する>という意味をもつ。したがって、ここは、<用便を足さなければならなかったとき>とでも訳出すべきところである。

翻訳書では、“not hollering and talking big now” (Faulkner, *Light in August*, 352) を「もうどなりもしないし、大声でしゃべりもしないで」(265) と訳出してあるが、翻訳者が <talk big> が<ほらを吹く>というイディオムであることに気づかなかったせいであろう。ここは、<もうわめいたり、ほらを吹いたりするのはやめて>といった意味である。

これは小説ではなく、短編集の翻訳書に見られる例であるが、“before he put her under” (Walker, *You Can't Keep a Good Woman Down*, 68) という副詞節を「彼女を中絶台に横たわらせる前から」(117) と訳出している。この <put someone under> は、今の場合は、<人に麻酔をかけて無意識状態にする>という意味である。したがって、問題の副詞節は、<彼女に全身麻酔をかける前に>と訳出すればよい。

翻訳書では、どういうわけか、“while poor Kay went on whistling in the dark” (McCarthy, 7) が「ケイが待てど暮らせど」(8) と訳出されている。この <whistle in the dark> はイディオムであるが、<暗がりや恐怖心を紛らすために口笛を吹く>という元の意味から簡単に類推できるが、<自信ありげに装う>、<空元気を出す>などの意味で使われる。したがって、引用箇所は、<その間、かわいそうに、ケイは虚勢を張っていた>とでも訳出しておけばよいと思われる。

以上、核となると考えられる単語あるいは要素のアルファベット順に、イディオムにまつわる誤読を検討してきたが、イディオムの中には、当然多義的なものもある。煩雑になるので、当面問題となっている意味以外のものについてはいちいち述べてこなかったが、<on fire>、<be under the weather> などは、コンテクストによってはまったく別の意味になることがあるので注意しなければならない。こういった、イディオムの多義性に足をすくわれたと思われる事例もかなり多い。たとえば、“Cash broke his leg and now the sawdust is running out.” (Faulkner, *As I Lay*

Dying, 207) は、翻訳書では、「キャッシュは足を折って、いまや鋸屑は尽きようとしている。」(182) と訳出されている。ここでは、ダール・バンドレンが、兄のキャッシュが出血しているのを見て、“now the sawdust is running out” と考えているわけであるが、ダールが兄のキャッシュを、そして人間一般を、(葉と) おがくずをつめて作られた人形と認識していることはここで初めて読者に分かる仕組みになっている。したがって、翻訳書のように、「いまや鋸屑は尽きようとしている」という意味だと理解するのは、やや唐突である。したがって、この場合の <run out> は、<尽きる> という意味ではなく、<外に流れ出る> という意味に受け取るほうが適切と言えよう。つまり、全体は、<キャッシュの片脚が折れ、いま、中からおがくずがこぼれ出ている。> とでも訳出しておけばよいと考えられる。

翻訳書では、“With hatred in my heart I said to myself, ‘You wait, you crook. I’ll get around to you.’” (*Bellow, Henderson the Rain King*, 319) の “I said to myself” の部分を「ぼくはつぶやいた」(455) と訳出してある。おそらく、<say to oneself> というイディオムは<ひとりごとを言う> という意味だと考えたうえで、訳文を工夫したものであろう。今では、<ひとりごとを言う> というのは、<talk to oneself> というイディオムのほうを使うのがふつうで、<say to oneself> は<心の中で考える> という意味で使われるのが一般的である。この場合も、<ぼくは考えた> と訳出しておけばよいと思われる。

息子がある若い女性と結婚したいと言うのを聞いて、信じられない気持ちの父親が息子に向かって行った発話、“What’s the matter? Is she in trouble?” (*Bellow, Henderson the Rain King*, 125) の後半部分を、翻訳書では「あの子、困ってるのかい？」(175) と訳出してあるが、この場合の <be in trouble> というイディオムは、<妊娠している> という意味であろう。つまり、父親は、<あの子、妊娠してるのか?> と尋ねたと考えるほうが自然であろう。

ところで、イディオムと認識しながら、別のイディオムと混同してしまった例も見かける。これは小説ではなく、短編集の翻訳書からの例であるが、“[Those letters] made her seem head over heels in love.” (*Walker*,

You Can't Keep a Good Woman Down, 37) を「[そういった手紙のせいで] 頭のとっぺんから爪先まで恋しているように見えた」(64) と訳出している。「頭のとっぺんから爪先まで」なら <from head to toe> というイディオムが使われていたはずである。実際に使われている <head over heels> というイディオムは、ここでは、<完全に> という意味をもつ。したがって、全体は、<[そういった手紙のせいで] 彼女が相手にぞっこん惚れ込んでいるように思えた> といった意味になる。⁵

翻訳書では、“to look up my children” (Walker, *The Color Purple*, 275) が「子供たちのことを尊敬する」(327) となっているが、いうまでもなく、<look up> というイディオムを <look up to> という別のイディオムと混同したのであろう。<あたしの子供たちを訪ねる> とでも訳出すべき箇所である。

翻訳書では、“I'll be damned if you [don't] go to a lot of trouble to have your fun.” (Faulkner, *The Sound and the Fury*, 165) という発話は、「君はどうやら自分のたのしみをするのにずい分の面倒をかけるらしいね。」(168) と訳出されているが、ここでも “go to a lot of trouble” の元となっている <go to the trouble> という語句が別の語句と混同されているようである。この <go to the trouble> という語句は <骨を折る> という意味をもつ。つまり、全体は、<楽しい思いをするためにずい分骨を折って、ご苦労様なこった。> とでも訳出しておけばよいと思われる。もし “go to a lot of trouble” ではなく、<give a lot of trouble> となっていたのであれば、「ずい分の面倒をかける」ということになる。

ついでながら、ここで、いわゆるイディオムとは考えられないが、あるままとまった形でよく使われる語句についても触れておきたい。翻訳書では、“And they do all come to attention, as if to withstand an attack.” (Updike, 289) が、「するとみんなの注意が、攻撃に負けまいと集中する。」(下、176) と訳出されているが、ここでは、<attention> という単語は、「注意」という意味ではなく、<気をつけの姿勢> という意味であり、<come to attention> という語句は、<気をつけの姿勢を取る> という意味である。したがって、全体は、<それで、まるで攻撃に対して抵抗しよう

とするかのように、全員が気をつけの姿勢を取った。>とでも訳出するのが妥当であろう。

次は、*The Sound and the Fury* のクエンティン・コンプソンのセクションで、自分が女の子を誘拐しようとしたと誤解されたことをやっとなり理解して、彼がヒステリックな笑い声をあげるが、それをなんとか我慢して止めた後の一節である。

But my throat wouldn't quit trying to laugh, like retching after your stomach is empty.

"Whoa, now," Anse said. "Get a grip on yourself."

"Yes," I said, tightening my throat. . . . After a while I didn't have to hold my throat so tight. (Faulkner, *The Sound and the Fury*, 140)

翻訳書では、上の一節は以下のように訳出されている。

しかしぼくの喉は笑おうとして何としてもとまらなかつた。それは胃袋からが空になった後でも吐き気がするのに似ていた。

「ほら、やめるんだ」とアンスが言った。「グッと力を入れてみるんだ」

「ええ」とぼくは言って、自分の喉をつかんだ……しばらくするとぼくは喉をそれほど強くつかまなくてもよくなった。(144)

翻訳者は、<grip> が、文字通り、<しっかりつかむこと>という意味だと受け取ったものと思われる。そして、そう受け取ったために、次に出てくる“tightening my throat”を「自分の喉をつかんだ」と訳出したのであろう。さらに、“I didn't have to hold my throat so tight”も、そういった理解の仕方に沿って、「ぼくは喉をそれほど強くつかまなくてもよくなった」と訳出してあるものと考えられる。しかし、ここでは、<grip> は、<しっかりつかむこと>という意味でなく、<制御>という、比喩的な意味で使われているのである。じつは、<get a grip on oneself> は、

<自分を抑える>という意味をもつ、1つのまとまった語句として使われているのである。また、<唇をきゅっと締める>という意味の <tighten one's lips> などの表現を考えてみれば、<tighten one's throat> が、<喉に力を含める>という意味をもつことは簡単に分かるであろう。つまり、翻訳書からの引用の3行目からは、以下のように訳出するのが妥当と思われる。

「ほら、やめろ」とアンスが言った。「しっかりするんだ」

「ええ」とぼくは言って、喉を引き締めた……しばらくすると喉にそれほど力を入れなくてもよくなった。

“[I did not] even [ask] for your sorry hand in marriage.” (Walker, *The Color Purple*, 209) という発話は、翻訳書では、「いままでの結婚生活の中で、あんたに手伝ってくれと頼んだことさえない。」(242) と訳出されているが、<人に結婚の申し込みをする>という意味でよく使われる <ask for someone's hand in marriage> というフレーズを翻訳者がまったく知らなかったためであろう。このフレーズで使われている <hand> は、<結婚の承諾>という意味である。したがって問題の発話全体は、<あんたとのみじめな結婚だって、こっちから頼んだわけじゃないよ。> といった意味である。

翻訳書では、“I could walk across Siberia on my hands.” (Bellow, *Henderson the Rain King*, 319) という発話を「四つんばいで、シベリア横断だってやってみせるぞ。」(455) と訳出してある。この <on> は、翻訳者が理解したとおり、体の体重のかかる部位を示しているのだが、“on my hands” だから、<両手に体重をかけて>という意味のはずで、「四つんばいで」という意味に受け取るのはおかしい。ここでは、<on one's hands> という語群は、<逆立ちして>という意味で使われているのである。つまり、引用箇所全体は、<逆立ちしてシベリアを横断することだってできる。>とでも訳出するのがよいであろう。ちなみに、「四つんばいで」に相当するのは <on one's hands and knees> という表現である。

翻訳書では、“You've no idea.” (Ellison, 512) が「あなたはどんな

観念にもとらわれていないのなもの」(II, 319) となっているが、こういった場合の <idea> という単語は<考え>という意味ではなく、<知識>という意味で使われている。つまり、全体は、<あなたにはとても分からないわ>という意味になる。

これは小説ではなくて、劇の翻訳書に見られる事例であるが、“Now, it’s a shame this had to happen when you just got here.” (Williams, 155) という台詞を、「まったく恥っさらしです、お着きになったとたんこんな騒ぎを起こすなんて。」(81) と訳出してある。<it is a shame (that) — > の形で、<shame> が<残念なこと>という意味でひんばんに使われることを翻訳者が知らなかったせいであろう。この台詞は、本来、<いや、あなたがお着きになったばかりなのに、あんなことになって残念至極です。>とでも訳出すべきところなのである。

次に、形容詞の同様の例を1つだけ挙げてこう。以下の一節は、小説ではなくて、*A Streetcar Named Desire* のスタンリー・コワルスキーの台詞からの引用である。

She moved to the Flamingo! A second-class hotel which has the advantage of not interfering in the private social life of the personalities there! The Flamingo is used to all kinds of goings-on. But even the management of the Flamingo was impressed by Dame Blanche! In fact they were so impressed by Dame Blanche that they requested her to turn in her room-key—for permanently! (Williams, 186-187)

翻訳書では、3番目の文は、「フラミングはいかなるお役にも立ちますってわけだ。」(140) と訳出してある。この文で使われている <used> という形容詞は <be used to — > という形で、<—に慣れている>という意味で使われる。この3番目の文の場合も例外ではなく、全体は、<フラミングは客のありとあらゆる振舞いに慣れっこんになっているんだ。>といった意味である。つまり、スタンリーが言おうとしているのは、このホテルを舞

台に売春をしていた当時のランチの行状は、多少のことなら目をつぶるホテル・フラミンゴの経営者(たち)でも黙認できなくなったほどひどいもので、彼女は結局そのホテルを追出されてしまった、ということなのである。翻訳者は、問題の <used> を動詞の <use> の過去分詞と受け取り、“all kinds of goings-on” のために使われると理解したのかもしれないが、それなら、“all kinds of goings-on” の前の前置詞は “to” ではなくて <for> になっているはずである。

動詞についても、少し例を示しておこう。翻訳書では、“[Y]our first move will be to apply yourself in school.” (Salinger, 189) という発話を「まず君のやるべきことは、学校に入るということだ。」(265) と訳出している。ここで使われている <apply yourself> という表現は、<専念する> という意味でよく使われるものである。したがって、この発話全体は、<君がまず最初に打つべき手は、学校での勉強に身を入れることだ。> とでも訳出すべきところである。翻訳者は、この発話が名門進学校を退学になったばかりの主人公に向かってなされたものなので、“apply yourself in school” を <学校に入学願書を出す> という意味だと勘違いしたのであろうが、それなら、<apply to another school> などとなっていたはずである。⁸

ありふれたイディオムの1つに、<nothing to write home about> というのがある。NTC's *American Idioms Dictionary* に説明のあるとおり、“nothing exciting or interesting” という意味である。このイディオムでは、<家に手紙で知らせる> という意味の <write home about> というフレーズが使われており、イディオム全体では <家に手紙で知らせるべきほどのことではない> という意味になるが、それが転じて、比喩的に、<何も取り立てて言うほどのことではない> という意味になるのである。ところで、翻訳書では、“the friend Henry had been writing home about all fall” (Faulkner, *Absalom, Absalom!*, 214) を「ヘンリーがその秋こんどの休暇に一緒に連れてかえるとくりかえし手紙に書いていた友達」(246) と訳出しているが、先ほどの <write home about> というフレーズを翻訳者が知らなかったためであろう。本来なら、全体は、<秋の間ずっ

とヘンリーが故郷あての手紙に書いていた友人>とでも訳出されるべきところである。

ところで、形は定まっても、単語そのものは不定なので、分類するのがむずかしい表現で、気になるものが1つある。イディオムと呼ぶのは不正確であろうが、その表現の性質上、ここで扱っておく。翻訳書では、“She said [it] a hundred times if she said it once[.]” (Bellow, *Henderson the Rain King*, 17) を「リリーの口から聞くと、たとえ一度でも百回分に聞こえるのだ。」(25) と訳出してある。この表現はたしかに分かりにくいですが、たとえば、<The package weighed ten pounds if it weighed an ounce.> のような形を取って、<The package certainly weighed ten pounds.> という意味で使われる。<もしその包みの重さが1オンスあったとしたら、その重さは10ポンドはあった。>、つまり、<その包みの重さが1オンスあるということが間違いないことなら、そしてそれは間違いないことなのだが、その重さは10ポンドはあった。> というやや変則的な論理によって、<たしかに、その包みの重さは10ポンドはあった> という意味になるのである。先ほどの引用箇所は、同様の理屈によって、<リリーは間違はなくそれを百回は言った。> という意味になるのである。

この項の最初のところで述べたように、イディオムをそれと認識する能力は英語に多く触れることによって自然に養成されるものであろうが、驚くべき数の誤読の実例を目の当りにすると、*NTC's American Idioms Dictionary* を通読することをあえてお勧めしたくなる。イディオムをいったんそれと認識してしまえば、その意味を知ることは別に難しいことではない。この辞典は、イディオムを探知するための勘を養うのに役立つであろう。

xv 言い回し

この項では、会話で頻繁に用いられる言い回しを扱う。こういった言い回しは、実際の会話の経験を豊富にもっていないと分かりにくいものである。そのせいもあってか、こういった表現を誤って訳出している例は枚挙にいとまがないが、ここでは、とりわけ気になる例のみを取り上げることにする。

この種の表現に関しては、*Common American Phrases in Everyday Contexts: A Detailed Guide to Real-Life Conversation and Small Talk* が便利なので、適宜参照する。また、この辞典に採録されていないくて、*A Dictionary of Contemporary Idioms* に採録されている場合、あるいは、また、*A Dictionary of Contemporary Idioms* の説明のほうが分かりやすい場合は、基本的にはイギリス英語を対象にした辞典ではあるが、この辞典を参照することもある。これらの2つの辞典に載っていないくて、*NTC's American Idioms Dictionary* のほうに載っているケースもあるが、そういったときには、こちらを参照する場合もある。一般の辞典で確認するさいの便宜上、中心となる単語にアンダーラインを付すが、その中心となる単語のアルファベット順に検討することにする。まず、名詞を核とする表現を扱う。

As he opened his bag he said to Johnny. "Thanks for that check you sent me as a consultant. It was excessive. I didn't do that much."

"Like hell you didn't," Johnny said. (Puzo, 370)

翻訳書では、最終行のジョニーの発話を「ああ、確かにな」(下、218)と訳出しているが、これでは意味が逆になってしまっている。*A Dictionary of Contemporary Idioms* の説明にあるように、この発話に見られるような形で使われた <like hell> は、"[a]n expression of strong disagreement" である。したがって、この発話は、<とんでもないよ>とでも訳出しておけばよいのである。

"I'm a virgin," she says in a bleak small voice. After a long silence I reply, "No offense, understand. But I think you're a very sick virgin." (Styron, *Sophie's Choice*, 214-215)

翻訳書では、"No offense, understand." の部分は、「別におこりはしな

いよ。」(上、323)となっている。訳文から判断すると、翻訳者は、“understand.”を<I understand.>の省略と思ったのであろう。しかし、これは命令法で、<分かってほしい>という意味である。そして、<no offense>については、*Collins Cobuild English Dictionary, New Edition*の説明、“Some people say ‘no offen[s]e’ to reassure you that they do not want to upset you, although what they are saying may seem rude.”を参照するとよいが、この言い回しは、<悪気があると言うんじゃないよ>といった意味をもつのである。したがって、問題の箇所は、<気を悪くしないでくれよ、いいね>とでも訳出すべきところである。

翻訳書では、“A penny for your thoughts[.]” (Melville, *The Confidence-Man: His Masquerade*, 113) という発話を「はかない思いなどやめましょうや」(130)と訳出しているが、まったくの見当違いである。実際は、この発話全体が1つの言い回しであり、<何を考えているんだい>という意味をもつ。

次に形容詞を核とする言い回しを2つ検討しよう。

Holding [the sample] close to his face, he ran his fingers over the surface and squinted at the texture. “That’s more like it,” he said. “That’s the way it oughta be.” (Ellison, 201)

翻訳書では、“That’s more like it[.]”を「これなら本物に近い。」(I、283)と訳出している。翻訳者は、“it”が何か具体的なものを指していると受け取ったのであろう。じつは、この発話全体が1つの決まった言い回しであり、次に来る“‘That’s the way it oughta be.’”から判断すれば、今の場合は、<これでよし>という意味で使われている。そのまま、<これでよし。>と訳出しておけばよいと思われる。次の用例では少し意味が異なる。

It was as if Lion were a woman—or perhaps Boon was the woman. That was more like it—the big, grave, sleepy-seeming dog which, as Sam Fathers said, cared about no man and no

thing; and the violent, insensitive, hard-faced man with his touch of remote Indian blood and the mind almost of a child. (Faulkner, *Go Down, Moses*, 211)

翻訳書では、2行目の“*That was more like it[.]*”を「そのほうがいっそう似つかわしかった」(246)と訳出しているが、何が何に「いっそう似つかわしかった」のかあいまいである。ここでは、この言い回しは、<そのほうが良かったです>という意味であり、問題の箇所は、<そう考えるほうがもっと当たっていた>と訳出しておくのが妥当であろう。今の場合は、“*That was more like it[.]*”は、厳密に言えば発話で使われているわけではないが、自分の語りについての語り手のコメントを成しており、ほぼ同様の扱いをしてもよい箇所であろう。

翻訳書では、“*Dad, for what it was worth I did the whole tour.*” (Webb, 38) という発話を「お父さん、旅のあいだじゅう、ぼくは価値のあることをしたんだよ。」(83)と訳出している。翻訳者は、“the whole tour”を副詞句と受け取ったのであろうが、これは“did”の目的語である。前のほうの“for what it was worth”は言い回しであるが、この言い回しは、*A Dictionary of Contemporary Idioms*の説明にあるように、“[a]n expression used when the speaker is not sure of the importance of a statement, opinion, etc.”として使われる。したがって、この発話全体は、<価値があったかどうか分からないけど、とにかくぐると旅行して回ったよ。>とでも訳出しておけばよいはずである。

正読の障害となる言い回しには、動詞を核とするものが一番多い。

Although I'm certain I kept my composure, I was really vastly surprised at this revelation: Sophie was not Jewish! I could not really have cared less one way or another, but I was still surprised. . . . (Styron, *Sophie's Choice*, 76)

翻訳書では、“I could not really have cared less one way or

another[.]”の部分で、「どちらであっても実際にソフィーへの関心が減るはずはなかった」(上、120)と訳出している。翻訳者は <I couldn't care less.> というありふれた言い回しを知らなかったもようである。この言い回し自体やや分かりにくいところがあるが、<非常に気になるので、気になる度合いを減らすことはできない> という意味ではなく、<全然気にかけていないので、今より気にかける度合いをこれ以上減らすことはできない>、つまり、<気にかける度合いをこれ以上減らすことはできないほど、気にかけていない> という意味なのである。 *Common American Phrases in Everyday Contexts* に “It doesn't matter to me.” と説明されているとおりである。この言い回しを知っておれば、先ほどの引用箇所を、<どちらにせよ、ぼくがソフィーへの関心を減らせるはずはなかった> といった趣旨で訳出すべきではなく、<どちらにせよ、ぼくにはどうでもよいことだった> といった訳文にすべきであることが分かる。語り手が言おうとしているのは、<ソフィーがユダヤ系であろうとなかろうと、僕にはどうでもよいことだった> ということなのである。ちなみに、 *Common American Phrases in Everyday Contexts* にも説明があるとおり、理屈に合わないことだが、<I could care less.> が <I couldn't care less.> と同じ意味をもつこともある。

Light in August の中で、殴られて意識が混濁したジョー・クリスマス の耳に、“*i said leave it go chase yourself it aint but five or six bucks apiece*” (Faulkner, *Light in August*, 221) と言っている声が聞こえてくる場面がある。ここで “it” とあるのは、マックスがジョーから取り上げようとしているジョーの金である。翻訳書では、「もう一度言うけど、それはそこにおいておくんだよ 勝手にしやがれ たかが一人あたり五ドルか六ドルだ」(167) と訳出している。翻訳者は、“*i said leave it*” と言ったのが、マックスがジョーから金を取り上げるのを止めさせようとしているメイムという女で、“*go chase yourself it aint but five or six bucks apiece*” と言ったのはマックスだと理解したものと思われるが、そう理解した根拠の1つが、“*go chase yourself*” が「勝手にしやがれ」という意味だと受け取ったことにあるように思われる。この <go chase

yourself> は、*Common American Phrases in Everyday Contexts* にあるとおり、“Go away and stop bothering me[.]” という意味である。したがって、先ほどの引用箇所全体がメイムの発話であると理解するのが自然であろう。つまり、<触るなって言ったら 向こうへ行きなよ 一人当たり、たかが五、六ドルだろ>とでも訳出するほうが適切と思われる。

翻訳書では、“He didn’t mean to insult you, for cryin’ out loud.” (Salinger, 24) という発話を「あいつ、でかい声を出して言ったからって、おまえを侮辱するつもりじゃなかったんだぜ。」(39) と訳出しているが、翻訳者は、“for cryin’ out loud” が決まり文句であることを知らなかったのであろう。*Common American Phrases in Everyday Contexts* にあるとおり、<for crying out loud> は、“an exclamation of shock, anger, or surprise” である。したがって、先ほどの発話は、<ばかだな。あいつ、おまえを侮辱するつもりじゃなかったんだぜ。>とでも訳出すべきところなのである。

“So you think,” Tothero says steadily, “that coaches don’t do anything.”

“They’re worthless,” Ruth says.

“Hey come on,” Rabbit says.

The waiter comes back with their chopsticks and two menus. (Updike, 59)

翻訳書では、“Hey come on [.]” の部分を、「おい。ボーイさん」(上、84) と訳出している。確かに、この発話の直後に、ウェイターがラビットたちの箸とメニューを2つもって戻ってくる旨の記述があるが、それはラビットが呼んだからではなく、たまたまこのタイミングで戻ってきただけのことである。ここで使われている <come on> は言い回しで、この場合は、反語的な、<いいかげんにしろよ> という意味である。ルースがラビットのかつてのバスケットのコーチであるタザロウに向かって、<コーチなんて役たはずよ> と言ったのをラビットがたしなめたのである。

翻訳書では、ある客に対するドラッグストアの店主の発話、“What can I do for you?” (Faulkner, *As I Lay Dying*, 199) を「何かご用でしょうか？」(176) と訳出しているが、用事があるからこそドラッグストアへやってきたはずの客に「何かご用でしょうか？」と店主が尋ねるとするのは不自然である。<What can I do for you?> というのは、*A Dictionary of Contemporary Idioms* にも解説してあるとおり、<Can I help you?> と同義で、店員などが客に向かって使う、1つの決まった言い回しである。今の場合は、<何にいたしましょう?>とでも訳出しておくのが適切であろう。

“You’re extremely promising. You’ve never played [golf] and yet you haven’t once missed the ball completely.”

This does it; [Rabbit] aims and in the murderous strength of his desire to knock it out in spite of the root he misses the ball completely. (Updike, 130)

3行目の“This does it[.]”は、<もう我慢ならない>という意味であるが、翻訳書では、「こいつはうまくやってやるぞ。」(上、190)と訳出している。これが、<That does it!> という言い回しの応用形であることに翻訳者が気がつかなかったせいであろう。この言い回しは、*A Dictionary of Contemporary Idioms* にあるように、“I cannot bear any more!” という意味をもつ。引用箇所では、ゴルフの相手の、彼を小馬鹿にしたような発言を聞いて、ラビットがかっとなってクラブを振ったようすが描かれているのである。

翻訳書では、“[S]he moves her arm protectively into a position which clearly means: ‘Nothing doing.’” (Styron, *Sophie’s Choice*, 211) のコロンに続く部分を「何もしちゃだめ」(上、318)と訳出している。この場合、訳文が原文と非常に隔たっているというわけではないが、翻訳者が<Nothing doing.> という言い回しを知らなかったという印象は否めない。この言い回しは、今のように拒絶を示す場合には、<だめだ>という

意味をもつ。訳文が示唆するような、<Don't do anything.> という意味ではなく、個別の、具体的な事柄に対する拒絶の意志を表わすために使われる。ここでは、そのまま、<だめよ>と訳出しておくのが妥当であろう。

“I thought maybe I could sleep a couple hours somewhere in the Sunshine [Athletic Association]. Otherwise I might as well go home. I've had it.” (Updike, 42)

翻訳書では、最後の“I've had it.”を「家はあるわけですから」(上、58)と訳出しているが、原文とは無関係の訳文になっている。ここで用いられている <have had it> は、*NTC's American Idioms Dictionary* にあるとおり、“to have reached the end of one's endurance or tolerance” という意味の言い回しである。理由があって家を出たラビットが、そろそろ家に帰る気になりかかっている、“I've had it.”と言ったわけだから、短いがそれなりに重要な発話である。ここは、<もううんざりです>とでも訳出しておくのがよいであろう。

What do I know about pregnancy, she said. I never experienced it myself. For all I know, women may be able to rub out all the signs. (Walker, *The Color Purple*, 190)

パンクチュエーションが変則的になっているので、引用部分だけ読むと分かりにくいのが、分かりやすくするためにふつうの形に書き直すと以下のようになる。

“What do I know about pregnancy?” she said. “I never experienced it myself. For all I know, women may be able to rub out all the signs.”

翻訳書では最後の文は、「女はお腹についた出産の印を消すことができるか

もしれないということは知ってますよ。」(218)と訳出している。翻訳者は <for all I know> という言い回しを知らなかったのであろう。これは、*A Dictionary of Contemporary Idioms* にあるように、“[a]s far as I know” という意味をもつ。つまり、最後の文は、<よくは知らないけど、女の人って、こすって跡を消してしまえるんじゃないの。> という意味である。ここでは、発話者がかなり皮肉っぽく言っているのは明らかなので、<よくは知らないけど>よりも、<案外>とするほうがよいかもかもしれない。

“I be seeing you again sometime—And you know something?”

“What’s that?”

“I thought you was trying to deny me at first, but now I be pretty glad to see you . . .” (Ellison, 172)

1行目のダッシュの後の部分では、<You know something?> という言い回しが使われているが、これは、*A Dictionary of Contemporary Idioms* にあるように、“[an expression u]sed to introduce something that the speaker thinks important” である。翻訳書では「お前さんにもわかってもらえたらうな？」(I, 242)と訳出しているが、見当違いである。<聞いてもらいたいことがあるんだが> という意味なのである。ここでは、<実はな——>とでも訳出しておくのが適切かもしれない。

翻訳書では、“He felt better now, easier in his mind; say what you will, Ellen had never let him down.” (Capote, 93) の “say what you will” の部分を「どんな無理難題をふっかけても」(110)と訳出している。時制のずれを無視した結果になっているのは、<say what you will> という言い回しを翻訳者が知らなかったせいであろう。この言い回しは、*A Dictionary of Contemporary Idioms* に採録されている <say what you like> という言い回しと同義で、後者の説明としてこの辞典に書かれているとおり、“[e]ven though you may not agree with what is being said” という意味をもつ。この言い回しは、<君がなんと言おうと>などと訳出されるのがふつうであるが、引用箇所の場合は、厳密には発

話の中で使われているわけではないので、ニュアンスは多少異なるにしても、
 <なんとと言っても>と訳出するなどの工夫が必要であろう。

翻訳書では、“Take it from me. You are a better man.” (Bellow, *Henderson the Rain King*, 69) を「お前さんの勝ちだよ、人間として、そっちが上だ」(99)と訳出してある。力比べをして勝った後の発話として、翻訳書のみを読んでおれば違和感を覚えることはないが、原文からは相当隔たっている。引用箇所最初の文では、<(You can) take it from me.>という言い回しが使われているのだが、この言い回しは、*A Dictionary of Contemporary Idioms* に説明があるように、<You can believe this when I say this[.]> という意味である。したがって、ここでは、<間違いないですよ>とでも訳出しておけばよい。なお、“You are a better man.” という2番目の文は、<お前さんのほうが強いよ>という意味である。

イディオムの場合と同じく、言い回しについても当面問題となる意味しか検討してこなかったが、当然ながら多義的な言い回しも多い。次に、言い回しであることには気づいたが、別の意味に解釈してしまった例をいくつか検討しよう。

Mrs. Eccles turns her head with an inviting twist. “Harry—?”
 “Angstrom.”
 “What do you do, Mr. Angstrom?”
 “Well, I’m kind of out of work.”
 “Angstrom. Of course. Aren’t you the one who disappeared?”
 (Updike, 118)

最後の、エクルズ夫人の発話の中で使われている <of course> が言い回しであることは言うまでもなかろう。⁷ 翻訳書では、最終行は、「アングストロームっていうと、むろん、例の姿をくらましたかたでしょう？」(上、171)となっているが、<of course> の処理に問題がある。この場合の <of course> は、当然なことを思い出したときなどに使われるもので、日

本語の<そうそう>などに相当する。したがって、最終行は、<アングスト
ロームさんでしたね。なるほどね。あなたなのね、姿をくらましたのは？>
とでも訳出するのが妥当であろう。

以下は、小説ではなくて短編からの一節である。

“This case is closed. I can't find against you, Snopes, but I can give you advice. Leave this country and don't come back to it.”

His father spoke for the first time, his voice cold and harsh, level, without emphasis: “I aim to. I don't figure to stay in a country among people who . . . ” he said something unprintable and vile, addressed to one one.

“That'll do,” the Justice said. “Take your wagon and get out of this country before dark. Case dismissed.” (Faulkner, “Barn Burning,” 5)

翻訳書では、“That'll do[.]”という判事の発話は、「よかろう」(230)と訳出されている。たしかに、<This car will do.> なら<この車で充分だ。>という意味であり、平易に言えば<この車でいい。>ということになるろう。訳文の「よかろう」を<(出ていくと言うのならそれで)いい>という意味に解釈すれば、それはそれでつじつまが合っているようにも思える。しかし、ここで使われている <That will do.> は、<This car will do.> と同じレベルの表現ではない。つまり、<This car will do.> の主語がいくらかでも変わりうるのに対して、引用箇所使われている <That will do.> は常にこの形で使われるものである。A *Dictionary of Contemporary Idioms* には、“No more is needed or wanted; enough has already been done: used to express a wide range of feelings from politeness to anger.” と説明してあるが、今の場合は、アブナー・スノープスが “something unprintable and vile” を口にしたので、判事が “That'll do[.]” と言って彼の発言を制止したわけである。結局、ここは、<それ以

上は言うな>と訳出するのが適切ということになろう。次の引用では、姪のクエンティンに対するジェイソン・コンプソンの腹立たしさを示す発言が最初に見られるが、保安官が、これとまったく同じ <That will do.> を使ってそれを制止している。

“Dont know?” Jason said. “When I spent two damn days chasing her through alleys, trying to keep her away from him, after I told her what I’d do to her if I ever caught her with him, and you say I dont know that little b——”

“Now, then,” the sheriff said. “That’ll do. That’s enough of that.” (Faulkner, *The Sound and the Fury*, 303)

この場合も、翻訳書では、“That’ll do.”を「それでいいですよ。」(310)と訳出しているが、何がどのように「いい」のか分かりにくい。保安官は、ジェイソンが、クエンティンに暴行を加えるぞと言って脅したことを口走ったうえに、彼女を指して <that little bitch> と言いかけたので、彼の発言をもうこれ以上聞きたくないと思って“That’ll do.”と言って制止したのである。<もう止めろ>とでも訳出しておけばよいと思われる。

ところで、慣用句辞典には記載されていないが、決まった言い回しと考えてよいと思われる表現を誤解した例も多い。少しだけ例を示しておこう。

[Phoebe] always listens when you tell her something. And the funny part is she knows, half the time, what the hell you’re talking about.” (Salinger, 167-168)

翻訳書では、2番目の文は「そして、おかしなことに、二度に一度は自分が知ってることをまた聞かされたりするんだけど、それでも耳をすまして聞いてんだからなあ。」(235)と訳出している。この文の背後に、<I know what you’re talking about.> という表現が透けて見えるが、これが、相手が言っていることが理解できるときに使われる表現であることは言うまで

もなかろう。ところで、“half the time”を「二度に一度は」と訳出しているわけだが、翻訳者は知らなかったのであろうが、これは前項で扱ったイディオムに属するもので、ここでは、〈ほとんどいつも〉という意味で使われている。結局、問題の2番目の文は、「そして、おもしろいのは、あいつはたいていの場合、こちらがいったい何を言っているかちゃんと分かるんだ。〉とでも訳出すべきなのである。

“You really can dance,” I said. “I have a kid sister that’s only in the goddam fourth grade. You’re about as good as she is, and she can dance better than anybody living or dead.”

“Watch your language, if you don’t mind[.]” [Bernice] said.
(Salinger, 72)

翻訳書では“Watch your language[.]”を「へんなこと言わないでよ」(104)と訳出している。「へんなこと」と言えば、発話の内容を指すと考えるのがふつうであろうが、バーニスが問題にしたのは、主人公のホールデン・コールフィールドが“goddam”という単語を使ったことである。〈Watch your language.〉という表現は〈言葉遣いに気をつけなさい。〉という意味でよく使われるが、ここでは、〈汚い言葉使わないでよ〉とでも訳出するのが妥当であろう。

翻訳書では、“Look, I still have thirty dollars, why don’t you let me give it to you now?” (Updike, 94) の“why don’t you”以下を「どうして君は受け取らないんだい?」(上、135)と訳出している。もちろん、〈Why don’t you ——?〉は相手を詰問するときにも使われるが、今問題にしている箇所では、相手は30ドルを「受け取らない」という意思表示はまったくしていないわけだから、突然「どうして君は受け取らないんだい?」と尋ねるとするのは、不自然である。今の場合の〈Why don’t you ——?〉は提案を示す決まった表現と理解するのが当然であろう。つまり、“why don’t you”以下は、〈今受け取ってくれよ〉と訳出するのが妥当である。同種の表現に〈Why don’t we ——?〉があるが、これは、提案

者が自分も含めて言う場合に使われる。“Why don't we go into my study?” (Puzo, 231) という発話は、翻訳書では、「なぜ私の書斎に行かないんだね？」(下、8) と訳出しているが、この場合も、相手は「書斎に行かない」という意向は示していないわけだから、この発話は質問ではなくて提案であると理解するのが当たり前である。<書斎のほうに行きませんか?>と訳出しておけばよい。

最後に、返答する際に使われる <too> のやや特殊な意味に触れておきたい。翻訳書では、ジョイスという名の3歳の女の子の “Mommy did too! Mommy did too!” (Updike, 118) という発話を「ママだって寝たんだもの！ ママだって寝たんだもん！」(上、171) と訳出している。これは、彼女の父親のジャック・エクルズが、妻のルーシーに向かって、「ルーシー、ジョイスがぼくといっしょに寝ようとしているんだ！」(上、170) と言ったことに対してなされた発話と受け取ったためであろう。しかし実際にはそうではない。分かりやすくするために、このジョイスの発話に関係する部分のみを原文から抜き出してみよう。

Eccles' thin voice . . . cries down the stairs. “Lucy! Joyce is getting into bed with me!” [His voice whines on,] “She says you told her it's all right[.]”

“I told her no such thing!” [Mrs. Eccles] calls upward[.]

A child [upstairs] is crying, “Mommy did too! Mommy did too!” (Updike, 117-118)

このように簡略化しても、“Mommy did too! Mommy did too!” という発話が直前の母親の発話に対してなされたものであるとは思わない人もいることであろうが、このような場合の <too> は、相手の否定の言葉に対する強い肯定を示すために使われているのである。Longman Dictionary of Contemporary English, Third Edition には、

“You are not smart enough to use a computer.”

“I am too!”

というやりとりの例が示されているが、“I am too!” というのは、<I am certainly smart enough to use a computer!> ということなのである。つまり、今問題にしている“Mommy did too! Mommy did too!” という発話は、<She sure did! She sure did!> という意味で、本来なら、<だってママ言ったもん！ほんとにママ言ったもん！>とでも訳出すべきものなのである。

この項で扱った言い回し、あるいはそれに類する表現は、辞典類で覚えるというよりも、音声による英語でのコミュニケーションの経験を積み重ねることによって自然に身に付けるべきものであろう。しかし、アメリカ小説の翻訳書に見られる、あまりにも多い誤訳例を見ると、とりあえずは文字を頼りにしながらでも、こういった表現についての知識を増やすことの必要性を感じる。その際には、*A Dictionary of Contemporary Idioms* の通読が一番簡便な方法であらう。

xvi 方向性

“toward sunset” (Bellow, *Henderson the Rain King*, 25) が「明け方になって」(37)、“grandmother” (Ellison, 230) が「おじいさん」(I, 323)、そして、“Northampton” (Roth, 12) が「サザンプトン」(21) と訳出されたりするケースについてはすでに触れたが(上、35-36)、<善悪>、<強弱>、<賛否>、<真贋>といった表現が示しているように、対立概念の組み合わせを手がかりとして私たちが物を考えることが多い以上、このような誤りはときとして避けがたいものとなる。この種の誤読のパターンも、方向性を誤ったものと捉えることができようが、本項では、単語のレベルを超えて方向性を誤ったものを取り上げる。

翻訳書で、“I lay on my stomach, my head resting upon the back of my hand thinking, where is [the perfume] coming from.” (Ellison, 503) の“where”より前の部分を「僕は腹這いになり、片手の

手の甲を後頭部にあてて、考えてみた」(II、307)と訳出している。ここでは、ベッドの上で物を考えているときの姿勢のほうなのであるが、「腹這いになり、片手の手の甲を後頭部にあてて」物を考えるというのは、不自然である。いうまでもなく、“my head”と“my hand”が逆転したうえに、<the back of my hand resting upon the back of my head>のように、“the back of”がだぶってしまったのである。本来なら、<僕は、腹這いになって、片方の手の甲に頭をのせて考えた>とでも訳出すべきところであった。同様に、翻訳書では、“I tried to get my foot off the top of his head, . . .” (Bellow, *Henderson the Rain King*, 69)を「ぼくは、頭から彼の足を取りのけようとした……」(98)と訳出している。この場合でも、“foot”と“head”が逆転しているのだが、“The prince . . . took my foot . . . and put it on his head.” (69)を訳出した「プリンスは……ぼくの[片方の]足をかかえて頭にのせた。」(98)という箇所が直前に出てくるだけに、翻訳書の読者はとまどってしまうであろう。いうまでもなく、<ぼくは、彼の頭の上から足をどけようとした……>とでも訳出すべきところである。

以上のような姿勢、動作の描写の場合は、読者が少しとまどうにしても、あまり解釈上の障害にはならないかもしれない。しかし、“I am not blind to her faults[.]” (Bellow, *Henderson the Rain King*, 157)を<She is not blind to my faults.>と読み間違えて、「妻は、ぼくの欠点を知らぬわけじゃない」(218)と翻訳書で訳出してあたりすると、読者はまったく別の解釈、理解をしてしまうことになる。当然、<ぼくは、妻のいろんな欠点に気がついていないわけじゃありません>とでも訳出すべきであろう。また、翻訳書では、“my justification for wanting to kill him” (Ellison, 223)を「相手が僕を殺そうとしたという正当化への理由」(I、314)と訳出しているが、なんらかの逆転が起きている。おそらく、<my justification for his wanting to kill me>と書かれてあると錯覚したものと思われるが、これでは、「相手が僕を殺そうとしたという正当化への理由」という訳文同様、言葉の並び方が変であり、原文をもう1度読み直す気になっても不思議ではない。結局、先程の引用箇所は、<僕が相手を殺し

たいと思ったことを正当化する理由>とも訳出するのが妥当であろう。

前の段落の2つ目の例は、誰が誰に対して働きかけているのかという点に関して混乱が起きているものであるが、このような例も結構多い。次の例は、ユダヤ人が経営する店を出るときに、1人のアラブ人がドアの内側にべっと唾を吐いたのを見てキット・モアズビーが、わざとやったのだろうかと店主に尋ね、それに対して、店主が答えるところである。

“Did he spit on purpose?” [Kit] asked him.

He laughed. “Yes. No. Who knows? I have been spat upon so many thousand times that I do not see it when it happens.”

(Bowles, 220-221)

翻訳書では、店主の発話の最後の文を「私にしても、これまで何千回となく唾を吐いたことがある。だから、どんなときに唾をしたくなるのか、見当が付きませんよ。」(286)と訳出してある。これは、キットの質問の意味を翻訳者が理解しなかったせいもあって起きた誤訳だと想定されるが、キットが店主に尋ねたのは、アラブ人が彼を侮辱する意味で唾を吐いたと思うかどうか、ということである。そのアラブ人が「唾をしたくな」ったから吐いたか、「唾をしたくな」かったのに吐いたか、ということが問題になっているのではない。ともあれ、最後の文の“I have been spat upon”の部分を「私にしても、これまで……唾を吐いたことがある」と訳出したのでは、動作の方向性が逆になってしまう。もちろん、これは、<唾を吐きかけられたことがある>という意味である。最後の文の全体は、<何千回も唾を吐きかけられたことがあるので、そんなことをされても私はもう気がつきませんよ。>という意味なのである。

これまで検討してきたのは、単語の並び方に関して不注意であったために方向性を正確につかみ損ねた事例であるが、なかには、単語の並び方にくら注意を払っても、失敗するケースがある。その1つのパターンが、仮定法のif節の内容の方向を逆に受け取ってしまうものである。翻訳書では、“... I couldn't be prouder if you were my own son.” (Webb, 10)

という発話を「……あなたがわたしの子供だったら、これ以上誇らしいことはないだろうと思ったの」(21)と訳出してある。訳文だけ見れば一応つじつまが合っているような気がするが、実際には、if 節は、<たとえ——でも>という意味の譲歩を意味している。つまり、全体は、<たとえあなたがわたしの息子だったとしても、これ以上誇らしく思うことはできないわ。>という意味なのである。したがって、<あなたのことを、まるで自分の息子みたいに誇らしく思っているのよ。>とでも訳出すべきなのである。次の例も同様であるが、原文からの引用の最後の“my native land”は“Ain Krorfa”のことである。

“Ain Krorfa is never sad. It is peaceful and full of joy. If one offered me twenty million francs and a palace, I would not leave my native land.” (Bowles, 131-132)

翻訳書では、最後の文を「もしも二千万フランの金とお邸やしきが手にはいたら、わたしは断じて故郷の町の外へは出ませんね。」(171)と訳出してある。この最後の文だけを独立させて考えた場合には、原文をほぼ正確に日本語に移し変えているという印象を受けるかもしれない。しかし、この訳文だと、「もしも二千万フランの金とお邸やしきが手にはい」らなければ、「故郷の町の外へ」出る、と発話者が言おうとしているということになるわけで、先行する“Ain Krorfa is never sad. It is peaceful and full of joy.”という、自分の「故郷の町」についての発話者の見解を示す部分と矛盾することになる。つまり、最後の文の if 節は、<もし誰かが私に二千万フランの金と宮殿を一つやろうと言ったとしても>という意味に取るべきなのである。この文全体は、<二千万フランの金、それに宮殿を一つやると言われても、私は自分の生まれ育った土地を離れることは決してしませんね。>とでも訳出すべきものである。

もう一つのパターンは、最上級の表現に譲歩の意味が含まれていることを見逃して、方向性を逆に受け取ってしまうものである。翻訳書では、“And there are some duties the best of men can't assume.” (Puzo, 405)

という発話を「そして人生には、最善の人間には無視することのできないいくつかの任務があるのだ。」（下、275）と訳出している。最上級の表現に含まれた譲歩の意味に気づかず、「最善の人間」なら“assume”できない、と受け取ったため、つじつまを合わせるために、やや不自然であることを承知のうえで、“assume”を「無視する」と訳出したのであろう。しかし、<assume duties> ということであれば、<任務を引き受ける>と理解するのが当然である。つまり、全体は、<最も有能な男でも引き受けることのできない任務というものがあるのだ。>といった意味である。

また別のパターンとして、<in one's shirt (sleeves)> の類の表現の方向性を勘違いするものがある。

Boon put on his shoes without lacing them; in his long soiled underwear, his hair still tousled from sleep, he and Lion went out. (Faulkner, *Go Down, Moses*, 212).

これは、ブーン・ホガンベックが小屋で自分と一緒に寝ていた、例のライオンという名の犬を外へ連れ出せと命じられたあとの彼の動作の描写なのだが、翻訳書では方向性を逆に理解して、“in his long soiled underwear”を「長い汚れた下着を着こみ」（247）と訳出している。「長い汚れた下着を着こみ」というと、それまではいていなかった下着をあらためてはいた、ということになるが、実際にはブーンは汚れたすててこをはいて寝ていたのであり、ここでは、ズボンをはくこともせず、そのままの姿で小屋の外へ出たことが表現されているのである。したがって、“in his long soiled underwear”は、<汚れたすててこ姿のまま>とでも訳出しておくべきなのである。この種の表現にとまどわないためには、先程示した <in one's shirt (sleeves)> という表現が、<シャツを着て>という意味ではなく、<(上着を脱いで)シャツ姿で>という意味であることをまず理解するのが基本である。⁸

さきほど最上級の比較表現にふれたが、<as — as> の形の比較表現の方向性が勘違いされることもある。翻訳書で、“You got about as

much business around books as a plumber!” (Styron, *Sophie's Choice*, 126) という発話を「配管工事屋みたいに本のありかはよく知ってるくせして！」(上、193) と訳出してある。これは、ある大学図書館の館員のソフィー・ザヴィストフスカに対する態度に腹を立てたネイサン・ランドーが当の館員に向かって行なった発話である。それにしても、「配管工事屋」が「本のありかはよく知ってる」ことを前提とする発話というのは奇妙である。翻訳者は、<as — as> の形の比較表現が、いわばマイナスの方向で使われることがあることを知らなかったのであろう。たとえば、“That guy Morrow was about as sensitive as a goddam toilet seat.” (Salinger, 55) は、<あのモローって奴は、トイレの便座とほぼ同じぐらい敏感だった。>、つまり、<あのモローって奴は、トイレの便座と同じくらいと言ってもいいほど何も感じない奴だった。> という意味なのである。日本語を母語とする人なら、“sensitive” の代わりに <insensitive> を使って、<That guy Morrow was about as insensitive as a goddam toilet seat.> と表現しようとするところであろう。こういった <as — as> の形の比較表現の方向性をきちんと理解すれば、先程のネイサンの発話が、<お前なんか、配管工と同じで、本を扱う資格なんか全然ないぜ！> といった意味であることが分かる。

上の段落で扱った比較表現の“sensitive”の方向性を念頭に置きながら、もう1つ別のパターンについて考えてみよう。次は、ラビットがウエスト・ヴァージニア州の田舎で車を走らせている場面である。

[T]hough his instincts cry out against it, when a broad road leads off to the left, though it's unmarked, he takes it. It is unlikely that the road would be marked, from its thickness on the map. (Updike, 34)

翻訳書では、後の方の文を「地図にこんな[に]太く書いてあるんだから、わざわざ道標なんて立てるはずもないだろう。」(上、46) と訳出してある。

「地図に……太く書いてある」ということは重要な道路のはずなので、「道

標なんて立てるはずもない」というのは、理屈に合わない。しかし、原文を見ても、ほぼ訳文の通りに書かれているように思える。ここで問題になるのは、“thickness”という単語の方向性である。この場合の“thickness”は、<太いこと>ではなく、<太さ>という意味である。したがって、後の方の文は、<地図での太さから判断して、その道を示す標識が立てられていなくても当たり前のように思える。>とでも訳出すべきである。理解しなければならないことは、<太さ>の度合いが少ないために、引用箇所“thickness”は、逆方向の意味である<細さ>を問題にしているのだということである。日本語で、<0.1ミリの薄さの>と<0.1ミリの厚さしかない>という表現が、同じ物を形容するのに使われることがあることを考えれば、言語の性質として、これがとりたてて奇異な現象ではないことが分かる。

最後に、小説ではなくエッセイからの例を1つ検討しておこう。翻訳書では、“No man ever followed his genius till it misled him.” (Thoreau, 144) を「自分の道を踏みはずすところまで、内なる精神の声についていった者は、かつてひとりもない。」(下、85)と訳出している。この訳文だと、「内なる精神の声についてい」けば、やがて「自分の道を踏みはずすところまで」到達する、という論理になるが、それでは、直前の“the faintest but constant suggestions of [one’s] genius, which are certainly true” (144) という部分と矛盾することになる。ここで、よく知られたことわざについて考えてみたい。“It’s an ill wind that blows nobody any good.” ということわざは、一見すると、<a wind that blows nobody any good> を想定しているようであるが、実際はそうではない。*English Proverbs Explained* にあるように、このことわざが本来言おうとしているのは、どの方向に進む帆船にも役に立たない風などというものはないのだから、<a wind that blows nobody any good> は存在せず、したがって、<an ill wind> というものも存在しないということなのである。結局、このことわざは、<どんな悪い物事でも、誰かの利益になる。>という比喩的な意味で使われるのである。同様に、“It’s a long lane that has no turning.” ということわざは、本来、<どんな道でも

いつかは曲がる>という意味をもつが、比喩的には、*English Proverbs Explained*にあるように、“Bad times don't go on for ever. Sooner or later things will improve.” という意味をもつ。つまり、<悪い状態はいつまでも続くものではない。>という意味で使われるのである。これらのことわざの方向性をよく把握したうえで先程の “No man ever followed his genius till it misled him.” をもう一度眺めてみると、<内なる靈(の指図)に従ったために誤った方向に進んでしまった者はまだだれもいない。> という意味であることが分かる。

xvii パンクチュエーション

パンクチュエーションの記号のなかでは、ダッシュが正読を妨げている事例が目立つが、コンマに足をすくわれているケースもある。少しだけ例示すれば、翻訳書では、ある伝令兵の “*Sutpen, the colonel wants you in his tent.*” (Faulkner, *Absalom, Absalom!*, 279) という発話を「サトペン大佐が、テントでお待ちだ」(323) と訳出している。翻訳者は、おそらく原文でのコンマの使われ方に充分注意を払わず、<*Sutpen the colonel wants you in his tent.*> あるいは、<*Sutpen, the colonel, wants you in his tent.*> と書かれていると受け取ったのであろう。しかし、これらは変則的な言い方であり、「サトペン大佐が、テントでお待ちだ。」なら、<*Colonel Sutpen wants you in his tent.*> となっていたはずである。この発話は、実際には、<サトペン、大佐がテントでお待ちだ。>とでも訳出すべきものである。ただ、ここでは、“*Sutpen*” と呼びかけられているのはヘンリー・サトペンで、“*the colonel*” というのは彼の父親のトマス・サトペン大佐であるということも、混乱が起きた原因であろう。ともあれ、数ページ後に、ヘンリーが父親とテントで出会う場面が出てくるが、そこでは、自分呼びつけた “*the colonel*” が自分の父親であることにヘンリーが最初は気づかなかった、と書かれており、翻訳書に見られるこの発話の解釈が、コンテキストにもそぐわないことが分かる。次の例でも、コンマに対する注意が充分でなかったと言える。

“My works showed what a despot could do, with the resources of a kingdom at his command.” (Twain, 82)

翻訳書では、これを「専制君主が自分の意のままになる国家資源をどのように扱えるものか、それはこのわたしの諸事業からもはっきりうかがえるのだった。」(109)と訳出してあるが、翻訳者がコンマを無視して <do with something> というイディオムが使われていると考えたためと思われる。原文の“with”以下は、いわゆる付帯状況を示しているわけで、全体は、<わたしの諸事業を見れば、王国の資源を自由に使えるのであれば、専制君主が何をなしとげることができるかが分かった。>といった意味である。

ダッシュにはさまざまな機能があるが、もっとも基本的なものは、<This answer—if we can call it an answer—is completely meaningless.> という文中に見られるように、文の途中で脱線的な事柄が挿入されていることを明示する機能、あるいは、文の途中で挿入されている脱線的な事柄を明示する機能である。この文の場合は、<if we can call it an answer> が挿入されているわけだから、ダッシュとともにそれを取り除けば、<This answer is completely meaningless.> という元の文に還元されるわけである。本来完結している文に、脱線的な事柄が1対のダッシュとともに付け加えられているわけだから、それをダッシュとともに取り除いたとしても、文の基本構造にはなんら変化が起きないことは言うまでもない。

When Hulga stumped into the kitchen in the morning (she could walk without making the awful noise but she made it—Mrs. Hope-well was certain—because it was ugly-sounding), she glanced at them and did not speak. (O’Connor, “Good Country People,” 275)

上述のダッシュの機能をよく理解したうえでのことかどうか定かではないが、翻訳書では、括弧の中を「彼女はそんな恐ろしい音をたてずに歩けるのだが、

わざとやっている——とホープウェル夫人は確信していた——その音は不快な響きがあるからだ」(115)と訳出している。しかし、この訳文だと、「その音[に]不快な響きがあるから」こそ「ホープウェル夫人は確信していた」と読めてしまう。原則にしたがって、原文のダッシュによって挟まれている部分を取り除くと、<she made it because it was ugly-sounding> となるわけで、訳文でも、<不快な響きがあるから彼女がその音を立てた>ということが中心になるべきである。つまり、括弧の中は、<彼女はそんなひどい音を立てずに歩けるのだが、ホープウェル夫人は、嫌な音を響かせようとして彼女がわざとやったのだと確信した>とでも訳出するほうが原文に即していると言えよう。

次の *As I Lay Dying* からの引用は、バンドレン家の隣人であるコーラ・タルの章からのものであるが、彼女は、ダール・バンドレンが、母親のアディーの死を目前にして、臨時の金稼ぎのために家を離れたくないと思っていたのに、父親のアンズと弟のジュエルが彼に無理矢理出かけさせたのだ、と思い込んでいる。

Nobody that knows Anse could have expected different, but to think of that boy, that Jewel, selling all those years of self-denial and down-right partiality—they couldn't fool me: Mr Tull says Mrs Bundren liked Jewel the least of all, but I knew better. I knew she was partial to him, to the same quality in him that let her put up with Anse Bundren when Mr Tull said she ought to poisoned him—for three dollars, denying his dying mother the goodbye kiss. (Faulkner, *As I Lay Dying*, 22)

翻訳書では、先程述べたダッシュの基本的機能が無視されている。

アンズのほうは、知っている人は誰だって、いかにもアンズのやりそうなことだと思うけど、でもあの子が、あのジュエルが、長い年月自分を

犠牲にしてただもうあの子を可愛がった母親の愛情を裏切るなんて——全く人を馬鹿にしているわ。バンドレンのおかみさんはジュエルをちっとも愛してなどいなかったと、うちの人は言うけど、それはあさはかな考えだわ。あの女はあの子をひいきにしていたんだし、それというのもあの子にはおかみさんがずっとがまんしてきたアンス・バンドレンと同じ性質があるからなのよ。うちの人は、たかが三ドルのために、死にかけている母親に別れのキスをさせないなんて、おかみさんはあんなおやじ毒殺してやればいいんだ、と言っているけど。(19-20)

原文からの引用箇所を明確にするためにダッシュの部分が消去すると、次のようになる

Nobody that knows Anse could have expected different, but to think of that boy, that Jewel, selling all those years of self-denial and down-right partiality for three dollars, denying his dying mother the goodbye kiss.

つまり、これが引用箇所の根幹となる部分であり、大体以下のような意味になろう。

アンスを知っている人なら、いかにもアンスらしいやり方だと思っただろうけど、あの子が、あのジュエルが、何年もの間自分の欲求を抑えて露骨に自分だけを可愛がってくれたのに、死にぎわの母親に別れのキスをしようとせず、三ドルもうけるほうをとるなんて、考えられないわ。

そして、ダッシュではさまれた部分を訳出すれば、以下のようなようになろう。

あたしはだまされなかったわ。バンドレンのおかみさんはジュエルが一番好きでなかったと、うちの人は言うけど、あたしにはちゃんと分かってたわ。あたしは、アディーがあの子をひいきにしていたこと、そして、

おかみさんはある性質をもっていたのだけど、あの子もそれと同じ性質をもっていて、それをおかみさんがとりわけ好いていたことを知ってたわ。その性質のおかげで、おかみさんはアンス・バンドレンのことを我慢できたのよ。うちの人は、おかみさんはあんな奴は毒殺してしまうべきだったって言ったのにね。

全体を訳出するのなら、根幹となる部分とダッシュで挟まれた部分をうまく合体させればよいのである。

xviii 構 文

この項では、単語と単語の結びつき方に関する誤解のうち、これまで取り上げなかったものをできるだけパターン化して考えてみたい。本シリーズは、誤読をパターン化して認識し、そのことによって少しでも正読に近づくことを目的としているわけで、単に誤読の事例を指摘するのが目的ではない。それにしても、不注意のために起きたもので、パターン化するのも無意味と思われるような誤読の事例があまりにも多すぎる。翻訳書では、“I’ll be all right until you get back.” (Bowles, 195) という発話を「君が戻ってくるまでには、きっとよくなっているよ。」(254) と訳出してあるが、<君が戻ってくるまではもつよ。>とすべきだろう。また、“‘Dont say it’s just me that sounds like your old man,’ Shreve said.” (Faulkner, *Absalom, Absalom!*, 210) の被伝達部分は、「おやおや、なんだかぼくが君のおやじみたいじゃないか。」(242) と訳出してあるが、<僕だけが君のおやじみたいじゃべり方をするなんて言わないでくれよな。>とでもすべきであろう。この2つの事例などは、なぜこういった訳文になっているのか見当がつくが、次の2つの事例についてはどうであろうか。翻訳書では、“[T]he backs of her black suède shoes had worn spots, where she had rubbed them against each other.” (McCarthy, 9) を「黒いスエードの靴の内側の擦り切れたところを、両足をこすりあわせるようにして隠している。」(11) と訳出してある。これは、<彼女の黒いスエードの靴の

後ろ側に擦り減ったところがあったが、彼女がそこをこすりあわせたからだ。>、あるいは、<彼女の黒いスエードの靴の後ろ側の部分に、彼女がこすりあわせたために擦り減ったところがあった。>ぐらいに訳出しておくべきところであろう。翻訳書の訳文の「隠している」という部分が、原文のどの部分と対応するのか見当がつかない。

Bust her out, say Harpo. Git some dynamite off the gang that's building that big bridge down the road, blow the whole prison to kingdom come. (Walker, *The Color Purple*, 95)

この引用の2番目の文は、「ダイナマイトであの刑務所を吹っ飛ばし、あの大きな橋も壊して、彼女を救い出すんだ。」(111)と訳出されているが、原文は、<道を下ったところであの大きな橋を造っている連中からダイナマイトをちょっとパクって、刑務所を全部ぶっ壊してやれ。>という意味であろう。この訳文の場合、原文のどこをどう読めば「あの大きな橋も壊して」という読みが生じるのか、見当もつかない。残念なのは、最後の2つのような事例が決して極端なものではないことである。ただ、こういったケースを個々に扱ってみてもあまり生産的ではないので、先程述べたように、パターン化できるものを分類しながら取り上げたい。

関係代名詞は構文を複雑化するので、要注意であることは言うまでもない。たとえば、翻訳書では、“as she would have tried to conceal a soiled garment that she could not prevent her body soiling” (Faulkner, *As I Lay Dying*, 98)を「身体の汚れは止むを得ないとしても、せめて汚れた衣装は見せまいとするかのよう[に]」(84)と訳出している。後半の“a soiled garment that she could not prevent her body soiling”は、<名詞+関係代名詞節>の構造になっており、“that”は動名詞の“soiling”の目的語である。つまり、ここは、<自分の体が汚すのを彼女が防ぐことができなかった、汚れた衣類>という意味である。引用箇所全体は、<自分の体のせいで汚れてしまうのを防ぐことができなかった、汚れた外衣を隠そうとしたかのよう[に]>とでも訳出するのが妥当であろう。また、

翻訳書では、“those whose fathers and whose grandfathers told it to them remembered it nevertheless” (Steinbeck, 87) は、「父親たちや祖父たちは、子供らが忘れないにもかかわらず繰り返して語って聞かせた」(95) となっているが、関係代名詞節の処理がずさんである。〈父親や祖父から聞いた人たちもやはりそれを覚えていた〉とでも訳出すべきところである。

動詞型で処理のミスが目立つのは、広い意味で使役を表わす動詞群が〈SVO to do something〉という型で使われたときである。翻訳書では、“I wanted her to tell more about it.” (Bellow, *Henderson the Rain King*, 283) は「この点は、彼女にもっと話したかった。」(401) と訳出されている。当然、〈それについては、彼女にもっと話してもらいたかった。〉となるべきところである。同様に、“But you could tell she wanted me to change the damn subject.” (Salinger, 131) は「しかし、彼女が本当は話題を変えたがってるのがはっきりわかるんだな。」(184) と訳出されているが、〈だけど、彼女が僕に話題を変えて欲しいと思っていたことが分かった。〉とでもすべきところである。この2つの例の場合のように、この動詞型の目的語を無視してしまう傾向が一般に見られる。この動詞型でよく使われる動詞の数は非常に多いので、この動詞型は誰でも見慣れているはずなのだが、案外、1つの型として充分認識されていないのかもしれない。

前置詞句が掛かるものを見誤った例も多い。翻訳書では、“He had pictured a distinct and perfectly rational and feasible improvement upon constitutional monarchy. . . .” (Twain, 400) を「彼は輪郭がはっきりし、完全に理づめで実行可能な未来図を描いていたけれども、いかんせん、それを立憲君主政体の上に置いていた……」(491) と訳出しているが、“upon constitutional monarchy” は“had pictured” に掛かるのではない。これは直前の名詞句に掛かる形容詞句で、〈an improvement upon something〉というコロケーションで使われているのである。つまり、全体は、〈彼は明瞭で、まったく合理的かつ実現可能な、立憲君主政体についての改善策を描写してみせた〉という意味なのである。

翻訳書では、“I would trust you with my whole fortune[.]” (Puzo, 279) という発話を「わしはわしの全財産にかけてあなたを信用しましょう。」(下、79) と訳出している。翻訳者は、<誰かに何かを託す> という意味の <trust someone with something> という表現を知らなかったものと思える。全体は、「あなたになら、わしは全財産を託してもいいですよ。」といった意味である。

翻訳書では、“[The welcome appeared] to dash the dead weight of his heavy-hearted expression with a smile hypochondriacally scornful.” (Melville, *The Confidence-Man: His Masquerade*, 73) は、「[その歓迎の挨拶は、]重い心の重石を、陰鬱病者の無然たる冷笑とともに、どすんと叩きつけさせる[ように見えた]」(86) と訳出されているが、「重い心の重石」を何に「どすんと叩きつけさせ」たのか、分からない。実は、引用箇所では、<dash> という動詞は、<AにBを加味する> という意味の <dash A with B> という型で使われているのである。したがって、全体は、<その歓迎の挨拶は、うっとうしく重苦しい彼の憂うつな表情に、心気症の患者のそれを思わせる、相手を軽蔑した冷笑を浮かべさせたように見えた> とでも訳出すべきであろう。

形式上は問題とならないが、内容的に掛かり方を間違えやすいものとして、順番を示す <first> などがある。

“You would not tell anybody I said [such perilous words]?”

“I? I would be drawn asunder by wild horses first.”

(Twain, 299)

翻訳書では、2番目の発話は、「わたしが？ そんなことすればまずイの一番にこのわたしが荒っばい馬に引っぱられて八つ裂きにされちまいますよ」(374) と訳出されている。この発話の“first”は、自分と他人との間の順番を示して、「イの一番にこのわたしが」という意味をもつのではなく、2つの異なる行動、この場合は、最初の発話者が危険な言葉を口にしたということを他人に告げる行動と、(恐らくは2頭の)荒馬に引っ張られて体を

真っぶたつに裂かれるという行動の間の順番を示しているのである。そして、2番目の発話者は、自分が決して相手を裏切ったりしないということを、1つのたとえを使って表現しているのである。つまり、2番目の発話は、〈わたしが？ そんなことをするくらいなら、荒馬に引っ張られて体を真っぶたつに裂かれるほうを選びますよ〉という意味であり、〈わたしが？ 荒馬に引っ張られて体を真っぶたつに裂かれてもそんなことはしませんよ〉とも訳出すればよいのである。今の事例と同じように、何と何の間の順番が問題になっているのかという点について勘違いした事例が、劇の翻訳書に見られる。ランチ・デュボアに農園の売却に関する書類を見せるように迫っていたスタンリー・コワルスキーが、ランチの手から紙束を引たくるが、ランチは、それはラブレターなのですぐに返せと要求する。それに続く“I'll have a look at them first!” (Williams, 139) というスタンリーの台詞を、翻訳書では、「まずこいつを見たいんだ！」(50) と訳出している。たしかに、直前に別の書類への言及もあるし、スタンリーが、ランチがラブレターだと主張している紙束と、別の書類のどちらを先に見るかという順番を問題にしているように思えないこともない。しかし、ここでは、問題の紙束をそのまま返すか、それとも、その紙束の内容を確認してからにするかの順番が問題になっていると考えるほうが妥当であろう。なぜなら、ランチは、スタンリーに、プライベートなものなので中身は見ないでくれと要求しているのであって、その紙束の点検を後回しにしてくれと要求しているのではないからである。したがって、先程の台詞は、〈その前に見せてもらうぜ！〉と訳出すべきだということになる。⁹

文の構造を2様に理解できるときには、まずそのことを認識したうえで、コンテキストに充分注意を払って解釈しなければならない。伝説的な大熊、オールド・ベンと遭遇したいと切望しながら、なかなかその夢がかなわず落胆しているアイザック・マッキヤスリンに、サム・ファーザーズが、“You aint looked right yet.” (Faulkner, *Go Down, Moses*, 197) と話しかける場面がある。翻訳書では、この発話を「おめえはまだ一人前には見えなかっただな」(229) と訳出している。翻訳者は、この発話の構造を、いわゆる第2形式のそれと理解したのであろう。つまり、〈right〉を主格補語

と受け取ったものと思われる。たしかに、そういった理解は可能であるが、同時に、<right> を副詞と受け取って、第1形式の文であると理解することも可能である。つまり、<おまえはまだ正しいやりかたで探さなかった> という意味にもなりうるのである。実際、数行後に、サムは、“It’s the gun[.]” (197) と言って、アイザックがオールド・ベンと遭遇できなかったのは、アイザックが猟銃を携行していたからだという彼の意見を述べる。次の日、アイザックは猟銃をもたずに出かけ、やがて身につけていた時計と磁石もはずして探した結果、念願かなってオールド・ベンと対面するのである。したがって、コンテキストから言って、先ほどのサムの発話は、<まだおまえの探しかたが間違ってるんだ> とでも訳出すべきであろう。このエピソードは重要であるだけに、短い発話であっても、その理解いかんで全体の解釈に微妙な影響を与えるので、おろそかにしてはならない箇所である。

多重構造をもつ文の形を誤解した例をもう1つ示そう。クエンティン・コンプソンとシュリーヴ・マッキヤノンが、南北戦争中のチャールズ・ボンとヘンリー・サトペンのやりとりを再構成しようとしている場面で、ボンがトマス・サトペンについて行なつたとされる、想像上の発話の訳出に関するものである。

And he sent me no word? He did not ask you to send me to him? No word to me, no word at all? That was all he had to do, now, today; four years ago or at any time during the four years. That was all. (Faulkner, *Absalom, Absalom!*, 285)

翻訳書では、4番目の文以下は、次のように訳出されている。

今日にしる、四年前にしる、この四年のあいだのいつにしたって、彼がしたことはそれだけ、ぼくに一言もものをいわない、ということだけだった。(330)

翻訳者は、“*That was all he had to do[.]*”の部分の構造を理解するにあたって、“*all*”の直後に省略されている関係代名詞の <*that*> を“*had*”の目的語だと受け取ったのであろう。たしかに、そのように構造を理解することは可能である。しかし、同時に、関係代名詞の <*that*> を“*do*”の目的語だと受け取ることも可能であって、どちらの受け取り方のほうがよいかは、コンテキストによって決まる。上の引用箇所直後は以下のようになっている。

He would not have needed to ask it, require it, of me. I would have offered it. I would have said, I will never see [Judith] again before he could have asked it of me. He did not have to do this, Henry. He didn't need to tell you I am a nigger to stop me. He could have stopped me without that, Henry.
(285)

トマス・サトペンがボンに対して、自分がボンの父親であるということを認めるような言動をすれば、ボンはそれで満足したであろうというのが、8章を通じてのクエンティンとシュリーヴの解釈なのだが、そういったコンテキストを考えながらこの2つの引用箇所をつき合わせると、“*That was all he had to do.*”の部分と、“*He did not have to do this[.]*”の部分は、結局同じことを逆方向から述べていることが分かる。つまり、“*That was all he had to do.*”は、<彼がしなければならなかったのは、[ぼくに伝言するか、彼のもとに行くように伝えるよう、君に頼むかすること、]それだけだった>という意味なのである。したがって、最初の引用箇所の4番目の文以下は、

それだけすれば充分だったのだ。今日にしろ、四年前にしろ、この四年のあいだのいつにしたってそうだった。それで充分だったのだ。

とでも訳出すべきであろう。

英語の単語のうちで一番難しいのは <*and*> だと言えようが、それは

<A and B> の形において、<and> の前後で並列になるもののバリエーションが無限にあるからである。翻訳書では、“By dint of prodding and pushing her, they got her to bend down and open the combination lock[.]” (Bowles, 311) を「三人は押したり戻したりして彼女をひざまずかせると組合せ鍵を開いた。」(400) と訳出している。翻訳者は、原文の“open”を <opened> と読み誤って、“got”と並列になっているのであろうが、この“open”は原形で、“bend”と並列になっているのである。したがって、全体は、<三人は、突いたり押ししたりして彼女をひざまずかせ、ダイヤル錠を開かせた。>とでも訳出すべきであろう。翻訳書では、“While you finish the trick Van started and you wouldn’t let him finish?” (Faulkner, *Sanctuary*, 73) という発話を「おまえさんが、ヴァンがおっぱじめたいはずらを、自分でうまくやろうとして、あの男にやらせないって言うのにかい？」(79) と訳出しているが、翻訳者は、“you finish the trick Van started”と“you wouldn’t let him finish”が並列になっていると理解したのであろう。しかし、それだと後の方の“finish”が自動詞扱いになり、不自然な感じがする。実際には、“Van started”と“you wouldn’t let him finish”が並列になっていて、“the trick”の後に省略されている関係代名詞が、“started”と“finish”の共通の目的語になっているのである。つまり、この発話は、<いっぽう、ヴァンが始めて、おまえさんがあの男にやりとげさせはしないわるさを、おまえさんがやりとげるのかい？>という意味なのである。<それで、おまえさんのほうは、最初にわるさを始めたヴァンには最後までやらせないで、自分でやっぴまおうってのかい？>とでも訳出すべきであろう。

並列とは言っても、<and> の前後にくる動詞が示す動作が1つのセットを成していると考えられる場合がある。ことわざの“You can’t eat your cake and have it.”においては、“eat your cake”と“have it”が単に並んでいて、<自分のケーキを食べることもできないし、それをもつこともできない。>という意味になるのではない。この場合は、“eat your cake and have it”が1つのセットとなる動作を示していて、全体では、<自分のケーキを食べて、なおかつそれをもっていることはできない。>、

つまり、<ケーキは食べればなくなる。>という意味になるのである。このことわざが、比喩的に、<世の中はよいことづくめにはいかぬ。>という意味で使われるのもそれで納得がいく。翻訳書で、“[Y]e could say more than that, and speak no lie[.]” (Twain, 329) という発話を「おぬしはもっと大きく出て、ウソなどつくものじゃないに。」(409) と訳出しているが、この“and”が先ほどのことわざにおけると同様の使い方をされているものであることに翻訳者が気づかなかったせいであろう。この場合は、“say more than that”という動作と“speak no lie”という動作を同時に行なえるということなので、全体は、<それ以上のことを言って、なおかつ嘘をつかずにおれる>という意味になる。これは、“It’s the income of an earl!” (329) という発話に対する返答なので、<それ以上だと言っても、嘘にゃならないぜ。>とでも訳出すればよいと思われる。

単なる並列ではないものに関する誤訳をもう1つだけ示しておこう。“Well, I had gone and spoiled it again[.]” (Twain, 372) を「さて、立ち去ったはいいが、またもやぶちこわしになってしまった。」(461) と訳出しているが、この場合は、“gone”と“spoiled it again”が単純に並べられているのではなく、<go> ともう1つの動詞がセットになって、<愚かにも——する>という意味をもつ、1つのまとまった形を形成しているのである。そして、“again”はそのまとまった形全体に掛かっている。つまり、全体は、<ところで、わたしはまたへまをやってぶちこわしてしまいました。>とでも訳出するのが妥当なのである。

等位接続詞なので、<and> の前後で並列になるものは、動詞なら動詞、節なら節、といったように、同じ機能、同じ次元の単語あるいは語句であるのが基本である。翻訳書では、“[H]e wears a knitted cap with a green pompom well down over his ears and level with his eyebrows. . . .” (Updike, 5) を「[その少年は]耳のところまでたれるポンポンのついた毛糸編みの緑の帽子を眉毛のあたりまで深くかぶって[いる]. . . .」(7) と訳出しているが、並列構造を無視した結果となっている。なぜなら、この訳文のように理解するのであれば、“and”は不必要なはずだからである。並列構造が分かりにくいときには、<and> の直後に来ているものを見て、それ

と同じ品詞の語句、あるいは同じ次元の語句をさかのぼって探すのが定石である。この場合は、“level with his eyebrows”という副詞句が来ているわけだから、とりあえず別の副詞句を探すと、“well down over his ears”が目に入るであろう。実際、この“well down over his ears”と“level with his eyebrows”が並列になっているのである。したがって、全体は、少し語句を付け加えて、<その少年は、緑のポンポンのついたニットの帽子を、横は耳がすっぽり隠れるように、そして前は眉毛の高さに合わせるようにして、かぶっている>とでも訳出すればよいと思われる。問題の少年は、バスケットをしているところであり、ポンポンが耳のところまでたれていたのでは、邪魔になってしかたがないはずである。

ところで、総括を示す語句と内訳を示す語句が同格関係となって使われるケースについてはすでに触れたが(中、68-69)、<and>の観点から再考しておきたい。すでに指摘したように、

[H]e has an instinctive taste for the small appliances of civilization, the little grinders and slicers and holders. (Updike, 219)

という文は、翻訳書では以下のように訳出されている。

彼には文化小器具とか小さな粉砕機とか薄切り器とかホルダー類に本能的な趣味がある。(下、74)

この訳文だと、あたかも原文で、「文化小器具」、「小さな粉砕機」、「薄切り器」、そして「ホルダー類」を表わす4つの語句が並列になっているかのような印象を受ける。しかし、原文では、後ろの3つの項目がそれぞれ“and”で並列になっているように見えるのに対して、“the small appliances of civilization”の次には<and>が使われておらず、後ろの3つの項目からは切り離されている。しかも、定冠詞に注目しながら、<and>の基本的な機能を念頭に置いて後ろの3つの項目をあらためて見直

すと、単に並列になっているのではなくて、“the (little grinders and slicers and holders)” が1つのまとまりをなしていることが分かる。¹⁰つまり、<and> に注目することにより、“the small appliances of civilization” と “the little grinders and slicers and holders” が <A, B> の形で並置されていることが確認できるのである。そして、この2つのかたまりの意味上のカテゴリーを比較すると、前者が総括を示し、後者が内訳を示すことが理解できることになる。

ここでは、具体例に触れることはしないが、<A or B> の形で使われる等位接続詞の <or> についても、また、<both A and B>, <A as well as B> などの特定の相関語句についても、<and> の基本的な性質として述べてきた事柄が当てはまることを、ついでに確認しておきたい。

比較構文のうちで、後半部分が省略されたものは、誤解を招きやすいようである。翻訳書では、“And then you're not as good any more.” (Salinger, 126) を「そうになったらもう、うまくもなんともなくなっちゃうからな。」(177) と訳出してあるが、これでは、あたかも “as” が使われていないかのようなようである。省略された部分を復元すると、<And then you're not as good as before any more.> となるはずで、先ほどの文は、<そうになったらもう、それほどうまいということでもなくなってしまう。> とでも訳出すべきところであろう。

先行する部分と呼応して使われる、完全な節をなしていない断片の処理が不適切な事例を最後に取り上げたい。翻訳書では、“Then I wiped my face. Needlessly, for owing to the fever it was entirely dry.” (Bellow, *Henderson the Rain King*, 226) を「そして、顔を拭いた。言うまでもないことだが、熱のために、顔はじつはからからだったのだ。」(316) と訳出してある。“Needlessly” を勝手に <Needless to say> と同義だと考えた結果であろうが、この “Needlessly” は先行する文の意味を限定しており、「顔を拭いた」のが不必要なことであったということなのである。つまり、引用箇所は、<そして、顔を拭いた。その必要もなかったのだが。と言うのは、熱のために顔はすっかり乾いていたからだ。> とでも訳出しておけばよかったところである。

I told them I'd look them up in Seattle sometime, if I ever got there, but I doubt if I ever will. Look them up, I mean. (Salinger, 75)

翻訳書では、上の一節は、次のように訳出されている。

僕は、いつかシアトルへ行ったら訪ねて行くと言ってやったよ。もしも行ったらだけど、行くかどうかはあやしいもんだ。行ったら、訪ねて行くことに嘘はないんだけどさ。(109)

翻訳者は、最後の“I mean”を<本気で言う>という意味だと誤解したのであろう。じつは、“Look them up, I mean.”は、“I doubt if I ever will”の部分が多義的なので、その意味を特定するためになされた発話なのである。つまり、“I doubt if I ever will”は、<I doubt if I ever will get there>と理解される可能性があるので、そうではなくて、<I doubt if I ever will look them up>のつもりで言ったのだ、ということをはっきりさせるための表現なのである。したがって、“but”以下は、<ただ、ほんとにそうするかどうかあやしいもんさ。つまり、訪ねていくかどうかということだけど。>とでも訳出するのが妥当と言える。

翻訳書では、“Young female starlets were forbidden to attend the Friday night parties. Or rather discouraged.” (Puzo, 183) が「若い女性スターは、金曜日のパーティ[ー]には参加できなかった。それで少々がっかりしていた[。]」(上、279)と訳出されているが、この場合も、“Or rather discouraged.”と先行する部分との関係が理解されていない。最後の“discouraged”は“forbidden”と並んでおり、“Or rather discouraged.”を完全な形にすれば、<Or rather they were discouraged to attend them.>ということになる。つまり、全体は、<売り出し中の若手の女優たちは、金曜日の夜のパーティーに参加することを禁じられていた。いや、むしろ、参加をなるべく控えるように、と言われていたのだ。>とでも訳出すべきところである。(厳密に言えば、<Or rather they were

discouraged to attend them.> というのは変則で、本来なら、<Or rather they were discouraged from attending them.> となるべきなので、原文の “Or rather discouraged.” は、<Or rather discouraged from attending them.> と書かれていてしかるべきものである。）

“Dont I address Judge Benbow?” he said, offering his hand.
“I’m Senator Snopes, Cla’ence Snopes.”

“Oh,” Horace said, “yes.[”] [”]Thanks,” he said, “but I’m afraid you anticipate a little. Hope, rather.” (Faulkner, *Sanctuary*, 169)

翻訳書では、3行目の “but” 以下を「でもどうやらあなたは少し先走りしてらっしゃるようですね。ぼくが判事になるのはむしろ希望といったものなんですよ」(176) と訳出している。この訳文だと、ホーレス・ベンボウ自身、自分が判事になることを希望していると述べているように受け取れるが、引用箇所最後の文の “Hope” は直前の文の “anticipate” と並んでおり、省略されている主語は <you> である。ホーレスは、いったん <anticipate> という動詞を使ったが、それだと、ホーレス自身も自分が判事になるという事を<当然のことと考える>というニュアンスがつかまとうので、<hope> という動詞に置き換えて、そのニュアンスを和らげたものと考えられる。したがって、“Hope, rather.” は、<というより、希望的観測をなさっていると言うべきですかね>とでも訳出すべきであろう。

次の事例はやや性格が異なるが、先行する部分との関係を充分考慮しなかった点では同じである。*The Color Purple* の翻訳書で、自分の父親だと信じこんでいた男との間にできた最初の子供を、その男に殺されてしまったものと思っていたセリーが、2番目の子供について、「やれるもんなら、この子も殺したらいい。」(9) と考える箇所が出てくる。作品全体からして、主人公がそんなことを考えるとはとても思えない。少し前から引用すると、原文は以下のようになっている。

He took [the baby] while I was sleeping. Kilt it out there in the woods. Kill this one too, if he can. (Walker, *The Color Purple*, 3)

翻訳者は、“Kill this one too, if he can.”を命令法の文だと思ったのであろうが、直説法の文である。これは、<He will kill this one, too, if he can.>の省略されたものであり、<殺せるものなら、この子も殺すだろう。>とでも訳出すべきところである。

小説では、発話が別の発話によってさえぎられる場面がしばしば出てくる。そういった場合も、語句が断片的になることがある。

“[Jack Crawford] talked to his main authority, from the University of—”

“Alan Bloom.” (Harris, 145)

翻訳書では、“the University of—”を「なんとか大学の……」(207)と訳出しているが、発話者のクラリス・スターリングが問題となっている大学の名を知らなかったわけではない。そのことは、“Dr. Alan Bloom of the University of Chicago” (120)がインタビューを受けている場面を彼女がテレビで見るいきさつを述べた記述から明らかである。彼女には、この対話の場面で大学名を隠そうとする動機はなかったこともコンテキストから明らかである。作者が意図したことは、クラリスは、相手のレクター博士が知らないと思っていたので、<his main authority, from the University of Chicago> といって説明しようとしたが、レクター博士は彼女から説明を聞くまでもなく知っていたということ、クラリス(そして読者)に分らせることであった。こういった中断が起きている場合、英語と日本語では語順が違うことが多いので、中断が起きるまでの部分をそのまま日本語に訳出してはうまく行かないことが頻繁に起きる。可能な場合には発話を完成させ、それを日本語に訳出したうえで、その訳文の頭のほうの適当な部分を残すのが便法である。つまり、“the University of—”は、<シカゴ——>とで

も訳出するのが妥当である。

xix 状 況

これまで検討してきた誤訳の多くは、そのときどきの状況の把握が不充分であったために起きたとも言える。いわゆるコンテキストを取り違えたわけである。しかし、個別のコンテキストそのものを取り上げて議論してみても始まらないので、この項では、小説全体にかかわるといってよいような状況設定に的を絞ることにする。

The Sound and the Fury のジェイソン・コンプソンのセクションの一節、“So we carried the cradle down and Dilsey started to set it up in her old room.” (Faulkner, *The Sound and the Fury*, 198) を翻訳書では、「このような次第でおれたち二人がかりで揺り籠をはこび下ろしディルシーはそれを自分の古い部屋にすえつけようとした。」(200-201) と訳出している。揺り籠を運び下ろしたのは、キャディーの娘のクエンティンのためなのだが、原文の“her old room”というのは、実際には、キャディーが昔使っていた部屋のことである。それは、“the same room whar I put [Quentin’s] maw to bed ev’y night of her life since she was big enough to sleep by herself” (198) という、すぐ後に置かれたディルシー・ギブソンの発話から明らかである。しかし、単に“her”という代名詞が指す人間を取り違えただけのことであれば、言い換えの項で取り上げられるべき事例であろう。むしろ問題は、ディルシーが、少なくとも一時期、コンプソン家に住み込んで働いていたことがあり、彼女がその部屋を使わなくなった後も、そのままにしてあったと翻訳者が受け取ったらしい点である。ディルシーが住み込んでいたことがなかったと言い切る根拠はないのだが、第4セクションの冒頭で彼女が“the cabin” (265) から姿を現わすときの迫力のある描写を念頭におけば、彼女がかつて奴隷小屋であった建物でずっと住み続けてきていたと考えるほうが妥当であろう。小屋の戸口のところの地面について、“It had a patina, as though from the soles of bare feet in generations. . . .” (266) といった描写があることなどを参照す

るとよい。実際、第1セクションでも何度もディルシーの小屋についての言及が見られる。この小説では、ある意味でコンプソン家とギブソン家が並置されていると言えるのだが、同時に、コンプソン家の母屋とギブソン家の小屋が並置されているとも言える。そして、お互いに相手を照射し合うことによって、この小説に奥行きを与えているのである。

Sanctuary の翻訳書に、「彼は氷のとけかけた二杯目のグラスを前にしたまま、両手をテーブルについて座り、煙草をいじくっていた。」(242)という、ポパイについて描写した箇所が出てくる。原文は、“He sat with his hands on the table, finicking with a cigarette, the second glass with its melting ice before him.” (Faulkner, *Sanctuary*, 229) となっている。「両手をテーブルについて」いたのではなく、<両手をテーブルに載せて>いたわけだが、そんなことよりも、「二杯目のグラス」という表現が気になる。「二杯目のグラス」と言えば、1杯目の酒をすでに飲んだものとふつうは考えられるからである。ポパイが酒を飲まないことは、“Wont drink none hisself[.]” (44) という、ポパイについてのトーミーの発話、あるいは、子供の頃に彼を診察した医者 of、“Alcohol would kill him like strychnine[.]” (300) という発話から分かると言える。この2人の発話の内容を疑う根拠は存在しないからである。問題の“the second glass”というのは、相手のテンプル・ドレイクのグラスに対しての表現であって、<もう一方のグラス>とでも訳出すべきであろう。

The Sound and the Fury の翻訳書の中で、「ベンジーがまだ『晩御飯』と泣いているのを聞く」(133) という箇所が第2セクションに出てくる。この訳文に相当する箇所は、原文では“hearing Bengy still crying Supper” (Faulkner, *The Sound and the Fury*, 129) となっている。このあたりは、ケンティン・コンプソンのやや錯乱した意識を反映したものになっているので分かりにくいところなのだが、“Supper”を“crying”の目的語と理解するのは、あまりにもコンテキストを無視していると言わざるをえない。なぜなら、ベンジャミン・コンプソンが<supper>という単語を口から発することはできないはずだからである。直前の“twilight” (129) の場合でも前置詞(と冠詞)が省略されていることから判断して、ここ

は、“crying”で一度切れ、“Supper”の前に <at> が省略されていて、“she would have to come down” (129) とつながっていると判断するのが妥当であろう。

最後の例は、小説ではなくて、短編集の翻訳書からの一節であるが、治安判事が田舎の店を借りて開いていた裁判が終わり、訴えられていたアブナー・スノープスが、その店から出ていくときの様子が描写されている。

父が廻れ右をし、そのしゃちほこばった黒いコートのあとについて行く。やせた後ろ姿だ。少ししゃちほこばった歩き方で、南軍憲兵隊長の部下のマスケット銃の銃丸が三十年まえ、盗んだ馬に乗っている彼の踵を打ったその場所を出て行く。(230)

「踵を打った」というのは変で、<踵を撃った>となるべきであろうが、そんなことはともかく、絶対にありえないことではないにしても、アブナーがこの小さな店の中で「盗んだ馬に乗って」て、「南軍憲兵隊長の部下のマスケット銃の銃丸」で撃たれたことがある、というのには信じがたい。原文は、以下のようになっている。

His father turned, and he followed the stiff black coat, the wiry figure walking a little stiffly from where a Confederate provost's man's musket ball had taken him in the heel on a stolen horse thirty years ago[.] (Faulkner, “Barn Burning,” 5)

2行目の“from where”は変則的な表現ではあるが、原因を示していると考えればよい。つまり、この一節は以下のように訳出すればよいと思われる。

父が廻れ右をし、少年はそのしゃちほこばった黒いコートのあとについて行った。やせてはいるが筋骨たくましい後ろ姿だ。三十年前に、盗んだ馬に乗っていて、南軍憲兵隊長の部下のマスケット銃の弾丸に片方の踵を撃たれたために、少ししゃちほこばった歩き方だった。

今の場合、作品内のコンテキストと作品外のコンテキストが絡み合っているとも言えるが、いずれにせよ、翻訳書の訳文は、状況を無視したものとなっている。

xx その他

この項では、これまで扱わなかった事柄を便宜上、いくつかひとまとめにして扱いたい。まず、擬声語・擬態語を取り上げることにしよう。日本語と違って、英語には擬声語・擬態語があまり多く見られないと一般に受け取られているせいか、擬声語・擬態語的要素を含む英語の動詞の処理がなおざりにされる傾向がある。たとえば、“slamming the wooden door” (Bowles, 190) は、翻訳書では、「木の扉^{とびら}を閉め[ながら]」(248)となっているが、<木のドアをバタンと閉め[ながら]>とでもすべきであろう。また、“sloshing whiskey into the [paper] cup” (Styron, *Sophie's Choice*, 549) は、翻訳書では、「ウイスキーを紙コップにつきながら」(下、371)と訳出されているが、<ウイスキーを紙コップにジャバジャバッと注ぎながら>とでもしたほうがよいであろう。同様に、“as an auto whizzes by” (Capote, 4) は、翻訳書では、「走りすぎて行く車に向かって」(6)となっているが、<車がヒューという音を立てて通りすぎると>としたほうがよいと思われる。これは短篇の翻訳書からの例であるが、“He jerked his head toward the road.” (Faulkner, “Barn Burning,” 22) を「父は首を道路のほうに傾けた。」(248)と訳出しているが、<父は頭を道路のほうにぐいと向けた。>としたほうがよいだろう。また、“[H]e noiselessly slid into view.” (Melville, “Bartleby,” 30) は「彼は音もたてずに姿を現わした。」(58)と訳出されているが、<彼は音も立てずにすーっと姿を現わした>とでもしたほうがよいと思われる。劇のト書きで人物の動作が示されている場合、とりわけ慎重に扱うべきであろう。たとえば、*A Streetcar Named Desire* の第2場のト書き、“Blanche throws off her robe and slips into a flowered print dress.” (Williams, 135) は、翻訳書では、「ブランチはローブを脱ぎ、花模様のプリントのドレスを着る。」(44)と訳

出されているが、それだと、<Blanche takes off her robe and put on a flowered print dress.> の訳文に相当することになり、原文で意図されているしぐさの細部が伝わってこない。ここはやはり、<ブランチはローブをさっと脱ぎ、花柄のプリント地のドレスをすばやく着る。> などとしておくべきであろう。

次に、スピーチレベルの問題、とりわけ口語、俗語の処理について取り上げたい。翻訳書では、“Then I’ll blow[.]” (Faulkner, *Light in August*, 236) を「それから、逃げよう」(178) と訳出している。ここでは、<blow> という単語は俗語として使われているのであるが、英語辞典を参照すれば、<leave> や <depart> といった語義が示されている。しかし、モノリンガルな辞典での語義説明は、対象が俗語であっても、いわば<普通語>とでも呼ぶべきもので行わざるを得ないという制約があることを充分認識する必要がある。つまり、この場合、<blow> と <leave> や <depart> は等価ではないのである。また、英和辞典を参照しても、<立ち去る>、<そそくさと逃げる>などの語義説明が示されているだけのことが多い。バイリンガルな辞典であれば、対象となる英語の俗語に対して、等価の(あるいは、等価に近い)日本語の俗語を充てることもできるはずであるが、実際にはほとんどそういったことは行われていない。したがって、英和辞典に示されている日本語の表現をそのまま使うと、スピーチレベル上のずれが生じてしまうので、工夫が必要である。先ほどの“Then I’ll blow[.]”なら、<それからずらかろう>と訳出すればより適切であろう。同様に、翻訳書では、“Did you croak him?” (Faulkner, *Light in August*, 215) は「おめえ、殺したのか？」(162) となっているが、<おめえ、ばらしちまったのか?>とでも訳出しておくほうがよいと思われる。

時制についてはあらためて議論する必要はないと思われるが、実際問題としては、翻訳書で、“... for it had happened that a fisherman in despair had given his pearls to the church.” (Steinbeck, 22) を「^キ自棄を起した漁夫がその真珠を教会に寄進してしまうからである。」(26) と訳出してあったり、“He had not connected Eric with the episode of the passports[.]” (Bowles, 270) を「彼はエリックを旅券の一件と結びつけて

は考えなかった。」(350)と訳出してあったりするように、完了時制の扱いが一般的にずさんである。言うまでもなく、最初の文は、<やけを起こした一人の真珠採りの男が自分の真珠を教会に寄付してしまったことがあったからである>とでもすべきであろうし、2番目の文は、<彼はエリックを旅券の一件と結びつけて考えたことはなかった。>とでもすべきであろう。

時制に関して無頓着であることが、仮定法の扱いにも影響する。翻訳書では、「[T]hey would not have tried to steal it if it had been valueless.” (Steinbeck, 71)を「もし値うちのない物なら、奴らはこれを奪ろうとはしないだろう」(78)と訳出してあるが、原文は仮定法過去完了で書かれているのであるから、<もし、値打ちのないものだったら、奴らはこれを盗もうとはしなかっただろう>とでも訳出すべきである。

翻訳者が言い回しを知らなかったために、やりとりの内容を誤解して訳出した例についてはすでに触れたが(下、96-109)、それ以外の原因によって対話の訳出が適切になされていないことも多い。1つだけ例を示しておこう。まず、*Light in August* の翻訳書からの一節を読んでもらいたい。自分の家族の歴史についてジョー・クリスマスに長々と語ったあと、ジョアナ・バーデンが、今度はクリスマスに彼の両親について尋ねる場面である。

「あなたの両親がどんな人だったか、あなたは少しも知らないの？」
もしほんとうに彼の顔が女の目に見えたとしたら、その顔がむっつりと考えこんでいることがわかっただろう。「片方に黒んぼの血が混じっていたということだけさ。前に言ったとおりだ」

女はまだ彼を見ていた。女の声でそれがわかった。その声は静かで、なんの感情もなく、いくらか関心はあったが、強い好奇心はなかった。

「どうしてそれがわかっているの？」

彼はしばらく答えなかった。それから彼は言った。「そんなことおれにはわからない」(192)

翻訳書の読者は、クリスマスの「そんなことおれにはわからない」という発話を読んで、<片方の親に黒人の血が混じっていたことをどうして知ってい

るのかと聞かれても、どうしてかは分からない>という意味だと理解するであろう。原文では、2人のやりとりだけを抜き出すと、次のようになっている。

“You dont have any idea who your parents were?”

“Except that one of them was part nigger. Like I told you before.”

“How do you know that?”

“I dont know it.” (Faulkner, *Light in August*, 254)

クリスマスの最後の発話である“ I dont know it.”の“it”は直前のバーデンの発話の中の“that”を言い換えたものであり、さらに、その“that”は“that one of them was part nigger”を受けたものなので、<片方の親に黒人の血が混じていたかどうか、知っているわけではない>という意味なのである。つまり、“know”に力点が置かれているのである。したがって、バーデンの問いを<どうしてそれを知っているの?>と訳出し、クリスマスの返事を<はっきり知っているわけじゃない>とでも訳出しないと、原意が伝わらない。このやりとりは、きわめて重要なものであり、翻訳書のように訳出すると、読者を大きく混乱させることになる。

最後に、誤解されることの多い、<frighten>と<grin>という2つの動詞を検討しておく。翻訳書では、“[T]here's no use frightening the kid.” (Bellow, *Henderson the Rain King*, 330)を「子供をびっくりさせても仕方がない」(470)と訳出してある。同様に、“wanting a little to frighten her” (Capote, 175)は「少し彼女を驚かせてやろうという気持ちから」(201)と訳出され、“you're not the first person who was ever . . . frightened . . . by human behavior” (Salinger, 189)は「人間の行為に……^{きょうがく}驚愕し……たのは、君が最初ではない(266)と訳出されている。このように、一般に、<frighten>という動詞を<驚かす>と言う意味に受け取る傾向があるのである。しかし、*Longman Dictionary of American English*にあるように、<frighten>というのには“to fill with fear”が基本的な意味なのである。したがって、上の引用箇所は、それぞ

れ、〈あの子を恐がらせても何にもならない〉、〈少し彼女をびくっとさせてやりたいと思って〉、〈人間の行為にこれまで……恐怖心を抱い……たのは、君が最初ではない〉とでも訳出すべきである。

翻訳書では、“Randolph cleared his throat, and grinned[.]” (Capote, 81) は「ランドルフは咳せきばらいをして、にやりと笑った。」(95) となっているし、“Starling grinned at him in spite of herself.” (Harris, 195) は「スターリングは彼を見て思わずにやっとなら笑った。」(275) となっている。その他、同様の例は数多い。実際、〈grin〉という動詞は、ほとんどの場合に、〈にやりとする〉という意味に受け取られているようであるが、名詞の 〈grin〉 は、*Longman Dictionary of American English* にあるように、“a smile, esp. a very wide smile” という意味が基本であり、動詞の場合にも、〈にやりと笑う〉というニュアンスを伴うわけではない。むしろ、〈にっこりする〉と意味だと受け取っておけばよい。*Longman Lexicon of Contemporary English* の名詞の 〈grin〉 の項には、“a smile which shows the teeth; a smile which seems almost to be laughing, esp a wide smile . . .” と説明されているように、〈grin〉 は〈歯を見せてにっこりする〉ことだと考えられることもある。したがって、上の引用箇所の “grinned” は、それぞれ、〈にっこりした〉、〈にこっと笑った〉とでも訳出しておくといよい。

xxi 複合的なもの

これまで検討してきた誤読の事例の中にも、2つ以上の原因が重なって生じたものもかなりあったが、この項では、とくに複合的な原因によって生じた誤読を取り上げる。

〔数詞+言い換え〕 まず翻訳書からの一節を見よう。

……戸が突然引き開けられ、二人の男が二人乗りボートをかつぎながらあらわれた。彼らはそれを水に下ろし、一瞬後に[ジェラルド・]ブランドが二本のスカルを持ちながら出て来た。……ある三月のはじめ、

両親はジェラルドに二人乗りボートを買ってや[ったのだ]。……彼が乗りこんで漕ぎ出して行った。……二人用ボートは、オールが合間をおいてチカチカと日を受けてかがやき、まるで船体そのものがまばたきながら進んでいるみたいで、今や一点になった。(95-96)

翻訳書のこの部分を読むと、ジェラルド・ブランドが「二人乗りボート」に1人で乗り込んで漕ぎ出していったとしか受け取れないが、絶対にありえないとは言えないにせよ、奇妙な状況である。次に原文を確認してみよう。

. . . the door rolled back and two men emerged, carrying a shell. They set it in the water and a moment later [Gerald] Bland came out, with the sculls. . . . [E]arly one March they bought Gerald a one pair shell. . . . He got in and pulled away. . . . The shell was a speck now, the oars catching the sun in spaced glints, as if the hull were winking itself along him along.¹¹ (Faulkner, *The Sound and the Fury*, 90-92)

4行目の“a one pair shell”は、1-2行目の“a shell,” 5行目の“[t]he shell”と同じ物であるが、翻訳者はこれを「二人乗りボート」と理解したのだろう。しかし、これは、<1対のオールを使って、1人で漕ぐボート>という意味にとるべきだと思われる。¹² また、訳文では、3行目の“the sculls”は「スカル」となっているが、外来語で<スカル>といえば、<1人で左右のオールを漕ぐ、細くて軽い競技用ボート>を意味するのがふつうである。この“the sculls”は2行下で“the oars”と言い換えられており、こちらは「オール」と訳出しているのだから、定石どおり統一して、“the sculls”も<オール>としておくほうが分かりやすい。便宜上、“one pair”を数詞扱いにしておけば、今の事例では、数詞と言い換えの双方がからんで、分かりにくい訳文になっている。以下のようにすれば、かなり読みやすくなるはずである。

……戸がゴロゴロッと開き、二人の男が、一人乗り競技用ボートを運びながら現れた。彼らはそれを水に下ろし、ほんの少したってからブランドがオールを持って出て来た。……ある三月の初めに、彼らはジェラルドに一对のオールで漕ぐボートを買ってやったのだ。……彼は乗り込んで漕いで行った。……ボートは今や小さな点になっていたが、オールが日差しを受けて合間をおいてチカチカと光り、彼と一緒に、まるで船体そのものが、まばたきながら進んでいるみたいだった。

〔識別+論理性〕 単語の識別をときとして誤ってしまうのは、誰しも避けがたいことであろう。しかし、論理的に変であれば、再度原文を点検して当然である。¹³ 翻訳書で、「じつにさまざまな要素が、物思いにふけ[っている。]」(382)という箇所が出てくる。「要素」が擬人化されてでもない限り、理解できない文である。原文は、“So many factors are mediating.” (Bellows, *Henderson the Rain King*, 271) となっている。翻訳者は、“mediating”を <meditating> と見誤ったのであろうが、原文は<非常に多くの要素が介在している。>とでも訳出すべきところである。また、翻訳書で「幸福は、もしいまだにそんなものがありうるとしたら、いたるところに存在した。」(71)と書かれているが、妙な文である。原文は“The happiness, if there still was any, existed elsewhere. . . .” (Bowles, 52) という、しごく当たり前の文である。この場合、翻訳者が、“elsewhere”を <everywhere> と見誤ったとは考えにくい。おそらく、翻訳者は、“elsewhere”という単語を一応正しく識別したのであろうが、作業のどこかで連想に邪魔されて <everywhere> の意味に解釈してしまったのであろう。このようなケースが多いことはすでに述べておいたとおりである。(上、35)ともあれ、引用箇所は、<もし幸福というものがまだ存在しているとしても、それは別の場所に存在していたのだ。>とでも訳出すべきであろう。

〔識別+状況〕 翻訳書に次のような発話の一節が出てくる。

「彼女もそこでは子どものようだった……日向ひなたに裸ですわっているの

が好きで、ひき蛙^{がえる}とか蜜蜂^{みつばち}とか[シマリス]のようなちっぽけな動物の絵を描いたり、天文学の雑誌を読んだり、星座表を作ったり、髪を洗ったり、].....いろんなことをしていたな。」(164)

問題の女性がやっていたとされる事柄のうち、「天文学の雑誌」を読んでいたというのが、なんだか変である。この動作だけが浮き上がっているように思える。この女性は例のドロレスなのだが、小説の他の部分の記述を読んでも、彼女が、「天文学の雑誌」を読むような人物とはとても思えない。原文では、“astrology magazines” (Capote, 143) となっている。つまり、<占星術の雑誌>、平たく言えば<星占いの雑誌>のことなのである。翻訳者は、“astrology”を<astronomy>と混同したのであろうが、全体のコンテキストを考慮すれば、簡単に誤読に気づいて当然のケースである。

[多義性+言い換え+イディオム] *As I Lay Dying* の翻訳書からの次の一節は、キャッシュ・バンドレンのセクションからのものであるが、このセクションは、彼が弟のダールの<狂気>についての見解をあれこれ述べている、重要なセクションである。引用の最初に「だが奇々怪々なのはデューイー・デルだった。」とあるのは、いよいよダールを病院に送ろうということになったとき、妹のデューイー・デルが、敵意をあらわにしてダールにとびかかったことについての述懐である。キャッシュは、デューイー・デルがダールに個人的に敵意を抱いていたことを知らず、ましてその理由などまったく知らなかったのである。

だが奇々怪々なのはデューイー・デルだった。これにはおれもびっくりした。みんながやつを変人だと言っていることはずっと前から知っていたが、それだからこそそれをあいつだけのことだという気がしないのだ。やつもまた狂気の外側にいることは、みんなと変わりがないのだ。時々やつが気が狂ったみたいになるのは、人がぬかるみに足を踏みこんだとき、泥水がかかって気が狂ったみたいになる、それと同じなのだ。
(208-209)

この訳文では、論理がどことなくすっきりしない。とくに、「人がぬかるみに足を踏みこんだとき、泥水がかかって気が狂ったみたいになる」というのは、あまり一般性がないであろう。原文は以下のようである。

But the curiousest thing was Dewey Dell. It surprised me. I see all the while how folks could say he was queer, but that was the very reason couldn't nobody hold it personal. It was like he was outside of it too, same as you, and getting mad at it would be kind of like getting mad at a mud-puddle that splashed you when you stepped in it. (Faulkner, *As I Lay Dying*, 237)

3行目の“couldn't nobody hold it personal”というのは、<誰もそれがとくに自分に向けられたものとは思えない>という意味である。翻訳者は、“personal”の意味を<本人自身の>と理解したようだが、この場合は、<攻撃的にある個人に向けられた>という意味である。また、4行目の“getting mad at it”の“it”は同じ行の“he was outside of it”の“it,” 3行目の“couldn't nobody hold it personal”の“it”と同じで、<ダールが狂っていること>を指す。(ちなみに、“getting mad at it”の潜在的な動作主は、ダールではなく、<you>である。)さらに、4-5行目で2回使われている<get mad at something>という表現はイディオムで、<何かに対して腹を立てる>という意味である。したがって、引用箇所は、以下のようにでも訳出すべきであろう。

だが一番奇妙なのはデューイー・デルだった。おれも驚いてしまった。みんながあいつが狂っていると言うのも無理はないことはずっと前からおれには分かっていたんだが、だからこそあいつの狂気が、とくに自分に向けられたものだとは誰にも思えないのだ。あいつもおれたち同様、自分の狂気の外側にいるみたいだった。だから、それに対して腹を立てるということは、ぬかるみに足を踏み込んで泥水がパシャッとはねか

かったとき、そのぬかるみに対して腹を立てるようなものなのだ。

〔多義性+方向性〕“Song of Myself”に出てくる次の詩行についてはすでに検討したが（上、50-51）、本来はここで取り上げるべきものだったので、念のために簡単に再論しておきたい。

Which of the young men does she like the best?

Ah the homeliest of them is beautiful to her. (Whitman, 38)

これは、ある女性が、水浴している28人の若者を窓のブラインドの陰からのぞいているという状況が説明された後に続く詩行である。翻訳書では、2行目を、「おやおや一番素朴な若者がこのご婦人はお気に入り。」(119)と訳出している。しかし、この場合の“beautiful”は外見のことを述べていると理解すべきであろうし、そうであれば、“the homeliest”も外見のことを述べていると理解するのが自然である。この <homely> という単語が外見について使われると、<不器量な>という意味になるのだが、<彼らのなかでもっとも不器量な若者が彼女にとって美しい。>というのは変である。それで、翻訳者たちは、つじつまを合わせるために工夫して、上に引用したような訳文にしたのであろう。すでに方向性の項で述べたことだが（下、112）、最上級の表現には譲歩の意味が含まれる場合があることをここで思い出すべきなのである。この詩行も、<Ah even the homeliest of them is beautiful to her.> と同義なのである。したがって、<あー、彼らのなかで一番見劣りする者ですら、彼女にとっては美しい若者なのだ。>とでも訳出すればよいと思われる。

〔単数・複数+外来語の原語〕 <ヒップ>の原語の <hip> が<尻>という意味をもたないこと、むしろ<腰>という意味であることについては、すでに述べたとおりである。（中、38-41）翻訳書では、“The woman held the child on her hip.” (Faulkner, *Sanctuary*, 87) は「女は赤んぼをおんぶしていた。」(92)と訳出されている。かりに翻訳者が“hip”が<尻>という意味で使われていると誤解していたとしても、ここで“hip”

が単数であることに注目すれば、「おんぶしていた」のではないはずだ、と思って当然である。実際は、問題の女性は、体重を自分の片方の腰で支えるようにして赤ん坊を抱いていたのである。<女は赤んぼを腰で支えるようにして抱いていた。>、あるいは、<女は赤んぼを脇にかかえるようにして抱いていた。>とでも訳出すべきところであろうか。もう1つ同様の例を示しておこう。

Finally he eased himself down onto his side [on the bottom of the pool] and balanced the heavy piece of concrete on his hip. (Webb, 31)

翻訳書では、この一節は以下のように訳出されている。

そして意を決したように、プールの底にひじをつくると、からだが浮かびあがらないように、お尻のうえにコンクリー[ト]・ブロックを乗せたものだ。(66)

翻訳者は、“on his hip”を<彼の尻の上に>という意味だと思い込んでいたために、“he eased himself down onto his side”を<そっと横向きに寝そべった>のように訳出するとつじつまが合わなくなると判断して、<プールの底に両肘をついて腹這いになった>かのように訳出したものであろう。原文で“hip”と単数になっているのは、プールの底に接している方の<hip>の上に物を乗せることができないからであることは言うまでもない。全体は次のようにでも訳出すべきであった。

とうとう彼は、プールの底にそっと横向きに寝そべり、その重いコンクリート・ブロックを腰の上にバランスを取って乗せた。

〔加算名詞・不可算名詞+言い換え+構文〕 翻訳書では、“such and such a head of hair which looked like honey when it whitens or

sugars in the jar” (Bellow, *Seize the Day*, 25) の “which” 以下を「白髪になり始めると蜂蜜のように見えたり、壺^{つぼ}に入っている砂糖のように見えたりする、そんな頭髪」(38) と訳出している。翻訳者は、“honey” と “sugars” が並んでいると理解したのであろう。しかし、それなら、訳文どおり “it” が “a head” の言い換えだと考えると、“when it whitens” の位置が不自然である。しかも、この場合の「砂糖」に相当する <sugar> という単語は不可算名詞のほずであり、原文で “sugars” となっているのは変である。つまり、“whitens or sugars” が <A or B> の形で並列になっていると考えるべきなのである。また、“it” は “honey” を言い換えたものである。したがって、全体は、<びんの中で白くなった、つまり糖化した蜂蜜のように見えるような、そんな頭髪> とでも訳出すべきものである。

〔加算名詞・不可算名詞＋言い換え〕次は、*The Great Gatsby* の最初のページからの引用である。

In consequence, I'm inclined to reserve all judgments, a habit that has opened up many curious natures to me and also made me the victim of not a few veteran bores. The abnormal mind is quick to detect and attach itself to this quality when it appears in a normal person, and so it came about that in college I was unjustly accused of being a politician, because I was privy to the secret griefs of wild, unknown men. Most of the confidences were unsought—frequently I have feigned sleep, preoccupation, or a hostile levity when I realized by some unmistakable sign that an intimate revelation was quivering on the horizon; for the intimate revelations of young men, or at least the terms in which they express them, are usually plagiaristic and marred by obvious suppressions. (Fitzgerald, 1)

この部分は、翻訳書では以下のようにになっている。

このためぼくは、物事を断定的に割り切ってしまう傾向を持つようになったけれど、この習慣のおかげで、いろいろと珍しい性格にお目にかかりもし、同時にまた、厄介至極なくだらぬ連中のお相手をさせられる破目にもたちいたった。異常な精神の持ち主というものは、ぼくのような性格が尋常な人間に現われると、すぐそれと見抜いて、これに対し強い愛着を示すものである。それで、大学のころ、得体のしれぬ無法者も、そのひそかな嘆きをぼくには打ち明けたものなのだが、それを理由に、ぼくは、なかなかの策士だと、不当な非難を浴びることにもなった。しかし、そうした人々の信頼は、たいてい、ぼくのほうから求めたのではないのだ——あるまごうかたない徴候によって、ぼくに対する親愛の情がちらちらほの見えているなと思ったときには、ぼくはよく、眠っているふりをしたり、考えごとをしているふうを装ったり、わざとそわそわして見せたりするのである。いま、ほの見える、と言ったが、それはつまり、若い人の親愛の情、というか、すくなくともそれを表現する言葉は、たいていの場合、他人の言に仮託する形をとったり、歴然たる抑圧によってゆがめられたりするものだからだ。(5-6)

原文からの引用の8行目の“confidences”が、翻訳書に訳出されているように「信頼」という意味であるとすれば、不可算名詞のはずで、複数形になっているのはおかしい。この“confidences”は、<打ち明け話>という意味の加算名詞の <confidence> の複数形なのである。言うまでもなく、7行目の“I was privy to the secret griefs of wild, unknown men”というのは、“confidences”と内容的に重なる表現である。ところで、この“griefs”は、翻訳書では、「嘆き」と訳出されている。この場合は断定はしにくいだが、翻訳者は <grief> がやはり加算名詞として使われていることをきちんと認識しなかったのではないだろうか。ともあれ、加算名詞として、<(さまざまな)嘆きの種>、あるいは、<(さまざまな)悩みの種>と定石どおりに訳出しておくことに不都合はないはずである。この小説で、やがてジェイ・ギャツビーが語り手に対して、にわかには信じがたいような<打ち明け話>をするのは周知の通りだが、現在問題にしている箇所、語り手

は、そういった事態の展開が不自然と思われぬよう、先手を打っているのである。その意味で、この箇所は、小説全体の枠組みやトーンを定める重要なイントロダクションであり、とりわけ丁寧に読まれてしかるべきである。ところで、10行目の“an intimate revelation”は、8行目で使われているこの <confidence> という単語を言い換えたものである。この“an intimate revelation”および11行目の“the intimate revelations”は、翻訳書では、「親愛の情」と訳出しているが、見当違いと言わざるをえない。少し後で、“privileged glimpses into the human heart” (2) という表現が出てくるが、これも、“confidences”あるいは“intimate revelations”と重なる語句なのである。加算名詞と不可算名詞の区別および言い換えに十分に注意して上の引用箇所を訳出すれば以下のようにでもなろう。

その結果、ぼくには、あらゆる判断を差し控える傾向がある。この習性のおかげで、いろいろと珍しい性格の持ち主と知り合いになったし、同時にまた、かなりの数の退屈きわまりない連中の相手をさせられる破目にもなった。異常な精神の持ち主というものは、そういった習性が正常な人間に現われると、すぐそれと見抜いて、これに対し愛着を覚えるのであるが、それでぼくは、大学在学中に、策略家だとして不当な非難を浴びた。それというのも、乱暴で、皆があまりなじみのない男たちのひそかな嘆きの種をぼくはこっそり知っていたからである。ほとんどの場合、ぼくのほうから打ち明け話を求めたのではなかった——ある紛れもない徴候によって、相手が今にも打ち明け話をしようとしていることが分かったとき、ぼくはしばしば眠っているふりをしたり、何かに没頭しているふうを装ったり、冷淡で不まじめな態度を取ったのである。というのも、若い男たちの打ち明け話は、というか、少なくともそれを表現する言葉は、ふつうは他人の言葉を盗用したものであり、また、明らかにあれこれ隠蔽しているために、その美しさが損なわれているからだ。

〔加算名詞・不可算名詞＋イディオム＋その他〕 *Light in August* で、リーナ・グローブをビアード夫人の下宿屋から別の場所へ移すつもりだ、と

バイロン・バンチが言うのを聞いて、彼がリーナを自分の家へ連れてきたがっているのだと勘違いしたゲイル・ハイタワーが、次のように言って断る場面がある。

“It wont do, Byron. If there were another woman here, living in the house. It’s a shame too, with all the room here, the quiet.” (Faulkner, *Light in August*, 300)

翻訳書では、この発話は以下のように訳出されている。

「それはよくないぞ、バイロン。この家にまた女がきて、しかも住みこむとしたら、それはいけない。部屋をひとりじめにできて、静かだが、やはりよくない。」(225)

この訳文にはいくつか問題がある。まず、“a shame”は<恥ずかしいこと>という意味ではなく、<残念なこと>という意味である。<残念なこと>という意味の <a shame> が、<it’s a shame that —— > の形でひんぱんに使われることはすでに触れたが(下、93)、ここでは、<that>以下が省略された形になっているのである。ついで、“room”を加算名詞に受け取っていることである。もし、“room”が「部屋」という意味の加算名詞なら“all the room”という形で使われることはない。さらに、“If there were another woman here, living in the house.”という文が仮定法であることの意味をきちんと認識していないことが問題である。この発話は本来、次のような趣旨で訳出されるべきものなのである。

<それはよくないぞ、バイロン。この家にもう一人別の女性が住んでいるのならともかく。スペースはあるし、静かだし、残念なんだが。>

〔物の名前+外来語の原語〕 翻訳書では、“Again he took his defeat with great good humor.” (Puzo, 309)を「そして彼は、この敗北をも

巧みなユーモアで受け止めた。」(下、124)と訳出しているが、この場合の“humor”は「ユーモア」という意味ではなく、<気分>、<機嫌>といった意味である。そして、“good humor”は<上機嫌>という意味の分離複合語と考えるのが一般的である。したがって、この文は、<彼はこの敗北に際しても、たいそう上機嫌であった。>とも訳出すべきところである。

〔物の名前+言い換え〕 まず、原文と翻訳書からの引用を比較してもらいたい。

“Where is [the suburban phone book]?”

“Under the dresser where the leg came off.”

“For God’s sake,” I said.

“Call information better. You’ll go yanking around there, you’ll mess up my drawers.” (Roth, 4)

「[電話帳の郊外の部は]どこにあるんです？」

「足のとれたテーブルの下だよ」

「やれ、やれ」

「局できいたほうがいいよ。そこいらつつまわされちゃ、引出しもごちゃごちゃになっちゃう」(6-7)

翻訳書では、原文からの引用の2行目の“the dresser”を「テーブル」と訳出しているが、ここで使われている <dresser> という単語は、*Merriam-Webster’s Collegiate Dictionary* で “a chest of drawers or bureau with a mirror” と定義されていることから分かるように、日本で一般に<ミラーチェスト>と呼ばれている物を指す。すでに <bureau> が<(ロー)チェスト>に相当する点には触れておいたが(中、80、注20)、<dresser> は <bureau> の上に鏡が付いた物ととりあえず思っておけばよい。¹⁴ ただし、今の場合は、*Longman Dictionary of American English* の <bedroom> の項の図解にあるような、4本の短い脚がついているものと考えられる。その脚が1本取れたので、応急処置として電話帳をはさんで

あるのであろう。(「テーブル」なら、1冊の電話帳で代用できるような長さの脚であるはずはないであろう。)また、翻訳書では5行目の“my drawers”を「引出し」と訳出してあるが、原文では“my drawers”は“the dresser”を言い換えたものであり、原則にしたがって、ここでも<ミラーチェスト>としておくのがよいであろう。ちなみに、“yanking”というのは、「つつきまわ[す]」という意味ではなく、<ぐいと引っ張る>という意味である。したがって、全体は、以下のようにでも訳出すべきであろう。

「どこにあるんです？」

「ミラーチェストの、脚のとれたところだよ」

「やれ、やれ」とぼくは言った。

「局で聞くほうがいいよ。電話帳をぐいと引っ張り出されちゃ、ミラーチェストが変になっちゃうよ」

〔外来語の原語+言い換え〕 次のものは、小説ではなく、短編集からの引用である。

If she thought this through, for example, she would have to think of what becomes of poor whites when (if) they become rich . . . and what becomes of blacks when they become middle class; she was already contemptuous of the black middle class. In fact, for its boringly slavish imitation of the white middle class, which she considered mediocre in its tiniest manifestations, she hated it. And yet, technically, she was now a part of this class.

If she began questioning these things, she would have to question her own place in society and how she was going to be a success at whatever she did . . . but at the same time avoid becoming bourgeois. She enjoyed so many bourgeois pleasures, and yet she loathed the thought of settling for them.

Just as jazz was her favorite music because it held the middle class in abeyance, *Steppenwolf* was the novel that, since college, had most enduringly reflected her mind. (Walker, *You Can't Keep a Good Woman Down*, 144-145)

2 番目の段落は、翻訳書では、以下のようになっている。

これらのことに疑問を持ち始めたら、社会の中で彼女が占める位置と、彼女が仕事……で成功をおさめながら、しかもブルジョアになることだけは避けることについて、慎重に考えなければならなくなる。彼女はブルジョアの快楽を大いに楽しんでいて、その中にはまり込むのは嫌だった。ちょうどジャズが彼女の好みの音楽であるように、というのもジャズは中流階級を閉め出しているからだったが、『ステッペンウォルフ』は大学時代以来、彼女に最も深い影響を与えた小説だった。(242)

すでに、<bourgeois> という形容詞が、通常は<ブルジョアの>という意味ではなく、<中流の>、<中産階級の>といった意味で使われることについて触れたが(中、49)、翻訳者はそのことを知らず、したがって、原文からの引用の2番目の段落の4行目の“bourgeois”が1番目の段落の3-4行目の“middle class”の言い換えであることにも気づかなかったようである。(ちなみに、この“middle class”は形容詞なので、ハイフンを使って、<middle-class> とするのが一般的である。)同様に、翻訳者は、問題の“bourgeois”が、やはり2番目の段落の6-7行目の“the middle class”と言わば縁語関係にあることにも気づかなかったものと思われる。そのために、引用した訳文は、焦点がぼやけてしまっている。外来語の原語の語義、言い換えに注意して、次のようにでも訳出すれば、もっと分かりやすくなるであろう。

もしこういった事柄を問題にし始めたら、社会の中で彼女が占める身分を問題にし、また、彼女が何をやるにせよそれで成功をおさめなが

ら……しかも同時に中産階級になることを避けるにはどうしたらいいのか、という点を問題にしなければならなくなる。彼女は中産階級のな楽しみを数々味わっていたが、それでもそういったものをただ甘んじて受け入れるのはひどく嫌だった。ちょうどジャズが中産階級の人間を遠ざけるがために彼女が一番好む音楽であったように、『荒野の狼』¹⁵が、学生時代以来、彼女の気持ちを最も長期にわたって反映した小説だった。

The Sound and the Fury の翻訳書には、泣き喚いていたベンジャミン・コンプソンが、姉のキャディーが昔履いていたものと思われるスリッパを手渡されると、すぐに静かになったようすが何度か出てくる。最初の場面では、「[ディルシー]がわたしにスリッパをくれたので、わたしは静かになった」(65)となっている。原文でも、“[Dilsey] gave me the slipper, and I hushed.” (Faulkner, *The Sound and the Fury*, 60) となっていて、とくに問題はなさそうである。しかし、<slipper(s)> という単語が、外来語の<スリッパ>が指すものとは別のものを指すことに注意しなければならない。<スリッパ>には、<靴のかかとを踏むのはやめなさい。>と言ったりするときの<かかと>に相当する部分が無いが、<slipper(s)>にはある。¹⁶ *Word by Word Picture Dictionary* の図解 (あるいは、それと同じと言ってよい *Longman Dictionary of Contemporary English*, Third Edition の <shoes> の図解) を参照するとよいが、<slipper(s)> は基本的には屋内で履くもので、<上靴>、あるいは、<部屋履き>とでも呼ぶべきものである。ところで、*Brewer's Dictionary of Phrase and Fable* の <Cinderella> の項に、“[T]he prince falls in love with [Cinderella], and she is found again by means of a glass slipper which she drops, and which will fit no foot but her own.” とあることから分かるように、シンデレラは <a pair of glass slippers> を履いて舞踏会に出かけたことになっている。また、*Word by Word Picture Dictionary* の <Ballet Dancer> のページを見ると、<toeshoes> に似た、バレエ用の <slippers> の図解がある。これらのことから、<slipper(s)> と言ってもさまざまなものがあることが分かるが、基本的には<靴>とら

えるべきものであることに変わりはない。じつは、*The Sound and the Fury* でも問題の<スリッパ>を<靴>ととらえている箇所が出てくる。

“Run git dat shoe,” Dilsey said [to Luster.] . . . Luster returned, carrying a white satin slipper. (Faulkner, *The Sound and the Fury*, 316)

翻訳書では、“dat shoe”を「あの靴」(323)、“a white satin slipper”を「白絹子のスリッパ」(323)と訳出しているが、読者の中には、ディルシーがなんらかの事情で言い間違えたのか、あるいは、ラスターが命じられた物とは別の物を持ってきたのだと勘違いする人がいるかもしれない。ここでは、単なる言い換えが起きているのであるが、翻訳者が、ディルシーが<dat shoe>と言った意味をきちんと理解しておれば、問題は解消したはずである。つまり、先ほどの引用のものの“*She gave me the slipper, and I hushed.*”を<彼女が上靴をくれたので、ぼくは黙った>と訳出し、以後<slipper>の訳語はすべて<上靴>に、あるいは、状況によっては<靴>に、統一すればよいのである。

〔外来語の原語+イディオム〕“*He hated Stradlater’s guts. . . .*” (Salinger, 19) は、翻訳書では、「奴はストラドレーターの腹のすわったところが苦手だね」(32)と訳出されている。たしかに、<gut>は、外来語の<ガッツ>の意味をもつが、ここでは、<gut>は<hate someone’s guts>というイディオムの中で使われている。生きのよい口語体で書かれていることで定評のある小説の翻訳者がこのことを知らなかったというのは不思議であるが、このイディオムは、<人を腹の底から嫌う>という意味をもつ。引用箇所は、<奴はストラドレーターが大嫌いだった>とでも訳出しておけばよいと思われる。

翻訳書では、“*And the guy was taking his words at their sentimental face value. He was not getting the message.*” (Puzo, 63) を「この男は面子めんつにこだわって感情的なことばかり口走り、せっかくの伝言メッセージを聞き入れようともしない。」(上、90)と訳出しているが、翻訳者が、“message”

が<メッセージ>という意味で使われていると思ひ込んだために、訳文は全体的に原文から大きく隔たってしまう。ここでは、<message> という単語は、<真意をくみとる>という意味の <get the message> というイディオムの中で使われているのである。引用箇所は、<そして、この男は、彼の言っている言葉を感情的な、額面通りの意味に受け取っていた。彼の真意を理解してはいなかったのである。>とでも訳出すべきであろう。

〔外来語の原語+方向性〕 *Henderson the Rain King* では、アフリカのある部族のリーダーであるダーフー王が、語り手の目の前でライオンとたわむれて見せるのだが、翻訳書では、ダーフー王はその時「スリッパのまま」(313)の状態であったとされている。次に原文からその前後の一節を引用する。

[Dahfu] tried to indicate that I should not worry, but was so taken up with his lioness, showing me how happy relations were between them, that in moving from me his step resembled the bounds he had made in the arena yesterday throwing the skulls. Yes, as he had done yesterday he danced and jumped, in his gold-embroidered white slippers, with powerful legs. (Bellow, *Henderson the Rain King*, 223)

5行目で“as he had done yesterday”とあるのは、前日ダーフー王が1人の若い女性を相手に、2つの頭蓋骨を交互に投げては受け取る競技をしたときのことを指すが、翻訳書の論理では、この競技のときにも彼がスリッパを履いていたことになる。ちなみに、この競技では頭蓋骨を受け損じたときには、罰として命を奪われることになっていたとされている。さらに、この小説のクライマックスの部分で、ダーフー王はライオンを生け捕りにすべく、不安定な檻の上に立つが、原文では、彼はそのとき“in his slippers”(307)の状態であったとされており、翻訳書では、ここでも「スリッパをはいたまま」(437)だったということになっている。しかし、ダーフー王がスリッパを履いてこれらのことをやったというのは納得がいかない。すでに述

べたように、<slipper(s)> は<スリッパ>ではなくて、<上靴>などを指す。(下、155) ダーフー王の履いていた靴がどのようなものか特定はできないが、<軽い短靴>とでもしておくのがよいと思われる。すでに述べたように、翻訳書では、“in his . . . slippers” (223)、“in his slippers” (307) をそれぞれ「スリッパのまま」(313)、「スリッパをはいたまま」(437) と訳出しているが、実際にはダーフー王はそのときの活動にきわめて適した物を履いていたわけであり、最初のほうは<軽い短靴を履いて>、後のほうは<例の靴を履いて>とでも訳出すべきところである。これらの場面では、ダーフー王の勇敢さ、身のこなしの優美さが強調されているのであるが、「スリッパのまま」、「スリッパをはいたまま」としたのでは方向性が逆になってしまい、翻訳書の読者は、彼が無鉄砲で軽率なところのある人物だという誤った印象をもちかねない。ダーフー王は、語り手が人生の師とも仰ぐ人物であり、もし彼が無鉄砲で軽率なところのある人物だとすれば、語り手の人物評価そのものが誤っていることにもなり、読者は混乱するであろう。

〔職業、役割、続柄、制度などの名称+構文〕

All through the marriage rehearsals [Lucy] had flirted with Sonny Corleone in a teasing, joking way she thought was permitted because he was the best man and her wedding partner. (Puzo, 21)

翻訳書では、この部分は以下のようにになっている。

結婚式のリハーサルの時に、ソニー・コルレオーネとふざけ半分になっちゃった[ルーシー]は、彼こそ自分にうってつけのパートナーにちがいないと確信をもっていた。(上、25)

「自分にうってつけのパートナー」となっているのは、“the best man” が複合語であって、<花婿付添い人>という意味であることを翻訳者が知らなかったためであろう。ソニーが<花婿付添い人>であったために、花嫁付

添い役のルーシーにとって彼が“her wedding partner”だったわけである。また、翻訳者は、原文の“she thought was permitted”の部分の構造をとらえきれなかったようである。これは本来は“that she thought was permitted”となるべきところであるが、いずれにせよ、“she thought”は挿入節である。役割名、構文に留意して原文の引用箇所を分かりやすく訳出するなら、つぎのようにでもなろう。

何度か行なわれた結婚式のリハーサルのあいだじゅう、[ルーシー]は、からかうような、冗談めかした態度でソニー・コルレオーネとずっといちゃついたのであった。彼が花婿付添い人で、結婚式では自分のパートナー役をつとめるのだから、それぐらいは構わないだろう彼女は考えたのだ。

〔固有名詞＋言い換え〕 翻訳書では、“my beloved Old Dominion” (Styron, *Sophie's Choice*, 612) は「わが愛する古き南部王国」(下、471)と訳出されているが、“[the] Old Dominion”は固有名詞で、ヴァージニア州の異名として広く知られているもので、勝手に「古き南部王国」などと訳出すべきではなかろう。問題の“[the] Old Dominion”は、数行前の“my native state” (612)を言い換えたものである。翻訳者もそのことには気づいたのかも知れないが、それなら一歩進んで <the Old Dominion> がヴァージニア州の異名であることを確認したうえで、“my beloved Old Dominion”は<わが愛するヴァージニア州>とでも訳出しておくほうがよかったと言えよう。先行する“my native state”は「自分の生まれ故郷ヴァージニア州」(下、471)と訳出してあるのだから、そのように処理することが原則にかなっていることになる。

固有名詞の代用語が使われたときに、それと気づかないケースもある。翻訳書では、“Your last husband went to President Roosevelt's prep school—whatchumajigger.” (Bellow, *Henderson the Rain King*, 27) の“whatchumajigger”を「おちょぼ口で、ご専門はなあに、なんてやらかす学校さ」(40)と訳出されている。察するに、<what is your major>

のなまったものと翻訳者は理解したのであろう。この単語は辞典の見出し語としては見当たらないが、*Webster's Third New International Dictionary of the English Language* に項目として挙げられている <whatyoumayjigger> の変形と考えられる。*American Slang* に記載があるとおり、<whatchamacallit> が <what-you-may-call-it> の異綴りであることを参考にすれば、“whatchumajigger” が <whatyoumayjigger> の変形であると断定してもよいであろう。この <whatyoumayjigger> は、<thingumbob>, <what-do-you-call-it> という意味なので、結局、“whatchumajigger” は<あの何とか学校>とでも訳出すべきであると考えられる。

〔固有名詞＋その他〕 固有名詞の“the Dismal Swamp” (Styron, *Sophie's Choice*, 200) をあたかも普通名詞であるかのように「陰気な沼沢地帯」(上、300) と訳出してある例についてはすでに触れた。(中、56) この湿地帯が <the Great Dismal Swamp> と呼ばれることがある点、日本ではふつう<ディズマル湿地(帯)>と呼ばれる点についても同じ場所で触れておいた。奴隷制時代には、逃亡奴隷たちがしばしばこのこのディズマル湿地(帯)に身を隠したが、ハリエット・ビーチャー・ストウの小説、*Dred: A Tale of the Great Dismal Swamp* はそういった歴史的事実を素材にした作品である。ところで、*Sophie's Choice* の語り手であるスティンゴは、自分と奴隷制との因縁を常に意識しながら生きていたのだが、その彼が、ナチの収容所からかろうじて救出されたソフィーと一緒にヴァージニア州のサウサンプトン郡の農場に住もうとすることには、さまざまなアイロニーが込められている。サウサンプトン郡といえば、スティンゴが高校時代から強い興味を抱いていたというナット・ターナーが反乱を起こしたところであり、また彼は奴隷制下の黒人たちの生活とナチの収容所に囚われていた人たちの生活との間にさまざまな共通点を見いだしていたからである。問題の農場とディズマル湿地(帯)との位置関係は次の箇所では明瞭になる。

There had been an ingredient of escapism in my trying so doggedly to lay out the attractions of this garden of terrestrial

happiness hard by the Dismal Swamp, where no blowflies buzzed, no pumps broke down, no crops failed, no underpaid darkies ever sulked in the cotton patch, no pig shit stank[.] (Styron, *Sophie's Choice*, 598)

翻訳書では、この箇所は以下のように訳出されている。

この魅力あるしあわせな地上の楽園を陰惨な沼沢地からほど遠い位置に置き、ギンバエもブンブン飛ばなければポンプもこわれず、作物の失敗もなければブタの糞もおわないし、低賃金の黒人労働者が綿畑でふてくされた顔をしたこともないような場所に^{がん}頑として仕立てあげようとするぼくの姿勢には、現実逃避主義的な要素がある。(下、449)

この訳文からは、翻訳者がどのように構文を理解したのか明確に判断することができないが、“the attractions of this garden of terrestrial happiness hard by the Dismal Swamp” という部分を「この魅力あるしあわせな地上の楽園を陰惨な沼沢地からほど遠い位置に置き」と訳出してあることがとりわけ気になる。またもや“the Dismal Swamp”を「陰惨な沼沢地」と普通名詞のように訳出してあることも気になるが、それだけにはとどまらない。ここで使われている <hard by something> は、形容詞句なら<何かのすぐ近くの>、副詞句なら<何かのすぐ近くに>という意味で使われる表現である。つまり、この部分は、<ディズマル湿地(帯)のすぐ近くにある、このしあわせな地上の楽園のもつさまざまな魅力>とでも訳出すべきなのである。上の引用箇所全体は、以下のようにでも訳出するのが妥当であろう。

クロバエがブンブン飛んだりせず、ポンプも壊れず、作物が不作になることもなく、低賃金の黒人たちが綿畑でふてくされた顔をするのも決してなければブタの糞が臭うこともない、ディズマル湿地(帯)のすぐ近くにある、このしあわせな地上の楽園のもつさまざまな魅力について根

気強く説明しようとするばかりの姿勢には、現実逃避主義的な要素があった。

翻訳書では、“the Dismal Swamp” (200, 598) の処理が不適切であるうえに、問題の農場との位置関係が不正確に訳出されているため、作者のプロット上、テーマ上の計算が翻訳書の読者に伝わりにくくなっている。¹⁷

〔言い換え＋イディオム〕 翻訳書では、“I do not like it here.” (Faulkner, “Red Leaves,” 316) という発話を「おれはこの世で厄介ごととはごめんだ」(115) と訳出してあるが、翻訳者は、“it” が直前に置かれた、別の発話に出てくる “a trouble” (316) を指すものと誤解したのであろう。ここで使われている “like it” という表現は、一般のイディオム辞典には項目としては載っていないが、*Longman Dictionary of Contemporary English*, Third Edition ではイディオム扱いされており、“It was a great place for a vacation. You’d like it there.” という用例が示されている。この用例からもうかがえるように、これは、〈ある場所が気に入る〉という意味で使われる表現なのである。つまり、先程の引用した発話は、〈おれはここにいるのは嫌だ〉とでも訳出すべきところなのである。この発話をした人物が、少し前のところで、“I don’t think I want to be here[.]” (315) と2回繰り返し、さらに続けて、“I do not want to be here.” (315) と言っているが、問題の発話はこれらの先行する発話の内容を、別の形で表現したものであり、これも一種の言い換え現象と考えることができる。

〔方向性＋構文〕 次の事例では、〈as —— as〉の比較構文に手こずって、“logical” を「非論理的」とあえて訳出しているようである。原文と翻訳書からの引用を比較して見よう。

Apparently here it was as logical for an ailing person to go away from civilization and medical care as to go in the direction of it[.] (Bowles, 179)

あきらかに病気の間がその方角へ旅して行くということは、文明と医療とから遠ざかることであり、非論理的なことであった。(233)

訳文はすっきりとはしているが、原文とは相当隔たっている。方向性と構文に注意して訳出すれば、以下のようになろう。

あきらかに、この土地では、病気の間が文明と医療から遠ざかるのは、そういったものに向かって行くのと同じく論理にかなったことであった。(233)

〔パンクチュエーション+構文〕次の発話の訳出の事例は、小説ではなく、短編集の翻訳書からのものである。

“The women wanted to learn before they ‘got too old’ and they simply talked—and in some cases shamed—younger women into teaching them.” (Walker, *You Can't Keep a Good Woman Down*, 144)

「女の人たちは“年取り過ぎないうちに”学びたかったのね。それで若い女たちに勉強を教えてくれと頼み——恥かしがった人たちもいたわ——込んだというわけ。」(241)

ダッシュについてはすでに述べたが(下、117-120)、今の場合は、ダッシュに挟まれている部分が等位接続詞の“and”によって導かれているために、根幹となる部分とのつながりが通常よりも強い。実際、構文上つながっているのである。つまり、“shamed”は“talked”と並列になっているわけで、どちらの動詞も、<SVO into doing something>の動詞型で使われているのである。この動詞型で使われる動詞は、すでに述べた<SVO to do something>という動詞型で使われるものと同じように(下、122)、広い意味での使役を示す。¹⁸ パンクチュエーションと動詞型に留意して原文

からの引用箇所を訳出すれば以下のようになる。

「女たちは“年を取り過ぎないうちに”学びたかったのね。それで自分より若い女たちを率直に説得して、そして、ときには教えないのは恥ずかしいことだと思わせたりして、勉強を教えてもらったの。」(241)

これも短編集の翻訳書に見られる事例であるが、ダッシュの基本的な用法および <and> による並列構造についての理解が不足している。以下の原文と翻訳書からの引用を比較してもらいたい。

On the basis of their sexual passion they built the friendship that sustained them through the outings with their collective children, through his loss of a job (temporarily), through her writer's block (she worked as a free-lance journalist), through her bouts of frustration and boredom when she perceived that, in conversation, he could only *be* scientific, only *be* abstract, and she was, because of her intrepid, garrulous women friends—whom she continued frequently, and often in desperation, to see—used to so much more. (Walker, *You Can't Keep a Good Woman Down*, 79)

性的な情熱をベースにして、二人は、両方の子供たちを合わせての遠足の時も、彼の一時的失業時も、原稿に追われる時も（彼女はフリーのジャーナリスト）、ひとしきりの欲求不満や退屈のとき——そういうときに彼と話をしても、彼は科学的、かつ抽象的でしかあり得ないのだった。そこで彼女は、大胆でおしゃべりな女友だちに会うのだった。彼女たちとは、以前はもっとよく会っていたけれども、いまでもひんぱんに、とくに、気が滅入るときには会っていた——にも耐えられる友情を築き上げた。(136)

原文の “she was, because of her intrepid, garrulous women friends —whom she continued frequently, and often in desperation, to see —used to so much more” の部分のパンクチュエーションに関する理解が不十分であることがすぐに見て取れが、そもそもこの部分で、ダッシュが1対で使われていることさえ理解されていないと言えよう。「彼女たちとは、以前はもっとよく会っていた」という訳文は、翻訳者が、“used to so much more” という、後の方のダッシュに続く部分が、そのダッシュの前の部分と直接つながっていると考えないかぎり、生まれてこないはずだからである。すでに述べたことだが(下、117)、ダッシュに挟まれた部分をダッシュごと取り去っても構文に影響はないはずなので、全体を簡略化するために、とりあえずその部分を消去してみると、

she was, because of her intrepid, garrulous women friends
used to so much more

となる。この部分のみを取り出して考えると、“friends” の後にコンマが必要なことが分かる。コンマを補うと、

she was, because of her intrepid, garrulous women friends,
used to so much more

となる。原文では、“friends” の直後にダッシュがきているために、“because of her intrepid, garrulous women friends” の前後に本来置かれるべき1対のコンマのうち、後の方のコンマが省略されているのである。この部分だけを訳出すれば、

何人かの大胆でおしゃべりな女友だちのせいで、彼女はそれよりもはるかに多くのものに慣れていた

とでもなろう。また、原文からの引用の7行目の “she” の前には、接続詞

の <that> が省略されており、7行目の“and”は2つの名詞節を並列的につなぐという機能を果たしている。したがって、全体を試訳すれば以下のようなだろう。

性的な情熱を基盤にして、二人は友情を築き上げた。その友情のおかげで、双方の子供たちを合わせての何度かの遠出のときも、(一時的に)彼が失業していたときも、(自由契約のジャーナリストとして働いていた)彼女がスランプで原稿を書けなかったときも、彼と話をしても彼が科学的、かつ抽象的でしかあり得ず、自分のほうは、何人かの大胆でおしゃべりな女友だちのせいで——彼女たちとは、やけっぱちな気分でのことがしばしばであったが、頻繁に会い続けていた——それよりもはるかに多くのものに慣れていることをさとって、彼女が何度かひとしきり欲求不満や退屈を覚えたときにも、二人はなんとか耐え抜くことができた。

この試訳は、原文の構造を私がどのように理解しているかを明示するために、なるべく元の文の構造を保ちながら英語を日本語に移しかえたもので、翻訳するのであれば、さらに工夫を加えることが必要となろう。

xxii 補 遺

(i 数詞)

数詞の項で、“a few years’ edge” (Styron, *Sophie’s Choice*, 135) を「二、三[歳年齢が上であること]」(上、208)と訳出するとつじつまが合わなくなる例を示して、<a few> が<2、3(の)>という意味だと考えてはならないことを説明しておいたが(上、29-30)、次の例も検討しておきたい。*Absalom, Absalom!* の翻訳書では、ジェイソン・コンプソンが、「ヘンリーの友人、ニュー・オールリンズのチャールズ・ボンは、ヘンリーよりも二、三歳年齢が多かった」(64)と息子のクエンティンに語ったことになっている。ボンとヘンリーがミシシッピ大学で初めて出会ったのが

1859年のことであったことは、小説の中のさまざまなデータから確認できるが、そのときのボンの年齢については、シュリーヴ・マッキヤノンの “[Bon] went away to school at the age of twenty-eight.” (Faulkner, *Absalom, Absalom!*, 246) という発話にあるとおり、28歳であったと考えてよかろう。末尾に添えられた “CHRONOLOGY” によって算出すれば、当時ボンは 27歳か28歳だったことになり、シュリーヴの発話の内容と矛盾しない。その時のヘンリーの年齢は、小説そのものには明示されていないが、“CHRONOLOGY” によって算出すれば、19歳(あるいは20歳)であったと考えられる。ともあれ、“CHRONOLOGY” によらずとも、トマス・サトベンが北ミシシッピに現れてからヘンリーが生まれるまでには少なくとも6年近くが経過していることは2章の途中まで読めば明らかになるわけで、サトベンがハイチに置き去りにした彼の長子のボンとヘンリーの年齢差が「二、三歳」であるはずは絶対はない。そして、ジェysonもそのことは充分認識していたはずで、彼が大きく計算間違いをした可能性はないと言える。翻訳書で「二、三歳年齢が多かった」とあるのは、原文の “some few years older” (58) を誤って訳出したもので、本来なら<数歳年上であった>とでもすべきものである。¹⁹

くどいようだが、同じく *Absalom, Absalom!* の翻訳書に見られる類似の例をもう1つ検討しておこう。原文で、シュリーヴがクエンティンに向かって、“... because you were watching the boy, the Jim Bond, the hulking slack-mouthed saddle-colored boy a few years older and bigger than you were. . . .” (173) という箇所があるが、翻訳書では、この箇所は、「君たちは、大きなしまりのない口をした、君たちよりも二つ、三つ年上で、図体の大きい、鞍のような色をしたジム・ボンドという名の少年に気をとられていたからだ」(202) と訳出されている。ジム・ボンドとクエンティンの年齢差も、小説本体からははっきりとは分らないが、末尾に添えられた “CHRONOLOGY” と “GENEALOGY” によれば、ジム・ボンドは1882年生まれであり、クエンティンは1891生まれなので、9歳ほど年が違ふ。したがって、“a few years older” を「二つ、三つ年上」と訳出するのが不適切であることは言うまでもない。これは、<数歳年

上>と訳出しておくべきであったろう。

ある犬について、原文で “It stood . . . better than thirty inches at the shoulders. . . .” (Faulkner, *Go Down, Moses*, 209) とあるのを、「そいつは立ちはだかっている……肩巾は三十インチを優に越え(ていた)」(243) と翻訳書で誤って訳出されている事例についてはすでに触れた。(上、31)²⁰ 同じ翻訳書に、「千八百ポンドはかかる三歳駒の牝驢馬」(95) という箇所が出てくる。犬の肩幅が「三十インチを優に越え(ていた)」というのと同様、ラバの重さが「千八百ポンド」あるというのは、通常では考えにくい。実際、*The Encyclopedia Americana* で <mule> の項を見ると、“Mules range . . . in weight from about 600 to 1,500 pounds (270-680 kg).” と記述されている。原文では、“a three-year-old, eleven-hundred-pound mare mule” (81) となっており、このラバの重さは、<千百ポンド>と訳出すべきであった。

(iii 識別)

原稿の段階では正しく読み取られているのに、ある文字が別の似通っている文字に化けたために結果として<誤訳>となっていると考えられるものを一部すでに示しておいたが(上、60、注7)、次の事例を追加しておきたい。

	誤	正
backs (Faulkner, <i>Absalom</i> , 164)	肩(191)	脊
baked yam (Walker, <i>Purple</i> , 169)	焼き麦(194)	焼き芋
cheek (Faulkner, <i>Sanctuary</i> , 241)	顔(254)	頬
mantel (Faulkner, <i>Sanctuary</i> , 74)	戸柵(80)	焔柵
redundancy (Faulkner, <i>Absalom</i> , 103)	冗談(117)	冗語
shotguns (Faulkner, <i>Moses</i> , 186)	猟師(216)	猟銃
tribal (Bellow, <i>Henderson</i> , 45)	種痘のしるしたる(66)	種族のしるしたる
watch (Webb, 16)	胸時計(33)	腕時計

ついでに、ワープロの変換ミスに類する事例も2つだけ示しておこう。

	誤	正
dandelions (Melville, <i>Confidence-Man</i> , 94)	「獅子の葉」(た んぼぼ)(108)	「獅子の齒」(た んぼぼ)
salutes (Bellow, <i>Henderson</i> , 171)	礼法(240)	礼砲
(iv 多義性)		

多義性について述べた箇所、<approach> という名詞の<似ているもの>という語義について触れたが(上、42-43)、次の用例も参照していただきたい。

The nearest approach to town life afforded by Branson County is found in the little village of Troy, the county seat, a hamlet with a population of four or five hundred. (Chesnutt, 85)

この用例の場合、“the little village of Troy”で “[t]he nearest approach to town life”が見られるということだから、“approach”が<近づく道>といった意味でないことは明らかであろう。

ここで多義性に関わる事例をいくつか追加しておくことにする。大型英和辞典にも載っていないせいか、<lover>のありふれた語義を取り違えるケースが目立つ。この<lover>という単語は、*Webster's New World Dictionary of American English*が “a person with regard to his or her degree of sexual skill, responsiveness, etc.”と定義している意味でよく使われる。一般には、“a great lover” (Puzo, 160)とか “a lousy lover” (Rovin, 141)のように、形容詞がつくことが多い。つまり、翻訳書では「あなたわすてきなコイビト」(下、463)と訳出されているが、“your such a beautiful Lover” (Styron, *Sophie's Choice*, 606)は<あなたわとてもあれがジョーズ>ぐらいにしておくべきところである。(この箇所は、英語があまり達者でなかったソフィーの手紙の一節なので、変則的な記述になっている。)同様に、翻訳書では「あなたたちって、みんなたいした恋人気どりだわ」(上、108)と訳出されている “You all think you're such lovers.” (Updike, 76)という発話は、<あんたたちみんな、

すごいテクニックの持ち主のつもりなんだから>とでもすべきところである。

代名詞の <you> は、単数、複数の双方に用いられるので、本来多義的な単語であり、常に警戒する必要がある。次は、ホールデン・コールフィールドに向かってなされた発話と、それに対する彼の返答である。

“What did Dr. Thurmer say to you, boy? I understand you had quite a little chat.”

“Yes, we did. We really did. I was in his office for around two hours, I guess.” (Salinger, 8)

翻訳書では、1行目の後の方の“you”を「君」(16)と訳出しているが、ホールデンが“Yes, we did.”と返答していることから考えても、この“you”はサーマー博士とホールデンの両方を指しているはずであり、<二人>と訳出すべきであろう。次も同じ翻訳書からの事例であり、ホールデンとサリー・ヘイズとの対話に関するものであるが、こんど場合は、翻訳者は、総称的に使われた <you> を、話し相手を指す代名詞と勘違いしている。

“Will you do it with me? Please!”

“You can’t just *do* something like that,” old Sally said. She sounded sore as hell.

“Why not? Why the hell not?”

“Stop screaming at me, please,” she said. Which was crap, because I wasn’t even screaming at her.

“Why can’tcha? Why not?”

“Because you can’t, that’s all. In the first place, we’re both practically *children*.” (Salinger, 132)

翻訳書では、2行目のサリーの発話を「そんなこと、あんたにできっこないわよ」(185)と訳出しているが、ここでの“you”は明らかに総称的に使

われている。だからこそ、7行目でホールデンは <Why can't I?> ではなく、“Why can'tcha?”と受けているのである。同じことが8行目の“Because you can't, that's all.”における“you”についても言える。翻訳書では、この発話は「あなたにはできないからできないっていうのよ。」(186)と訳出しているが、“Because you can't, that's all.”というサリーの返答は、直前の“Why can'tcha?”というホールデンの発話における総称的な概念を前提とした返答である。したがって、<だって、無理だから無理なのよ。>とでも訳出すべきであろう。

形容詞については、1例だけ補足しておきたい。翻訳書で、“It was that blank blank blank McKinley Smith!” (Faulkner, *The Mansion*, 345) という発話を「あの間ぬけな、おお間ぬけなマッキンレー・スミスの野郎だ！」(345)と訳出している。翻訳者は、“blank”を<空っぽの>といった意味だと類推したうえで、「間ぬけな」と訳出したのであろう。しかし、ここでは、<blank> は卑語・タブー語などの代用語として使われており、<くそいまいましい>といった意味をもつ。もとは、<damned> などの伏せ字として使われたダッシュを <blank> と読むことに由来するもので、上の例では、言わば口頭での伏せ字のような役割をしている。つまり、<goddamn> などの形容詞の代わりに使われたものだから、<くそいまいましい>などの意味をもつわけである。問題の発話は、<あのくそったれめのマッキンレー・スミスの野郎だ！>とでも訳出すべきものである。あるいは、<あの××××のマッキンレー・スミスの野郎だ！>のように伏せ字を使ってもよいかもしれない。ちなみに、この <blank> の仲間とも言える単語群には、<blankety>, <blankety-blank>, <blankity-blank> などがある。

動詞についても多少補足しておきたい。

As we approached a mirror Dr. Bledsoe stopped and composed his angry face like a sculptor, making it a bland mask, leaving only the sparkle of his eyes to betray the emotion that I had seen only a moment before. (Ellison, 100)

翻訳書では、“betray”を「裏切る」(I、145)と訳出しているが、ここでは、<betray> という動詞は、<(うっかり)示す>という意味で使われている。この場合などは、“the emotion”を「裏切る」というのは不自然だから、多義性に気づきやすいと言えよう。翻訳書では、“The dim light erases the blue veins left from carrying Becky.” (Updike, 255)を「薄明かりのせいで、ベッキーを抱いてできた青い静脈は消えている。」(下、126)と訳出している。ここで使われている <carry> という動詞は、<身ごもっている>という意味であるが、こちらはやや分かりにくいかもしれない。翻訳書では、“Joel, left in charge, started when Jesus beckoned to him secretly.” (Capote, 156)の“started”を「近寄って行った」(180)と訳出しているが、この場合の <start> は、<ぎくっとする>という意味であろう。また、翻訳書では、テンプル・ドレイクが茂みの中で用を足した直後にリー・グッドウィンの姿を見かけ、必死でルビー・ラマーのところまで駆け戻って、²¹「あの人あたしを見張ってたのよ！……ずっと見張ってたんだわ！」(94)と言って訴える場面がある。原文は、“He was watching me! . . . He was watching me all the time!” (Faulkner, *Sanctuary*, 89)となっている。ここは、<あの人のぞいてたのよ！ずっとあたしをのぞいてたんだわ！>とでも訳出すべきであろう。たしかに、英和辞典で <watch> の項を見ても<のぞく>という語義は見当たらないが、たとえば、*Longman Dictionary of Contemporary English*, Third Edition で<のぞき魔>にあたる <voyeur> の項を見ると、“someone who gets sexual pleasure from secretly watching other people’s sexual activities”/“someone who enjoys watching other people’s private behavior or suffering”という2つの語義説明が載っており、今のような状況下では <watch> を<のぞく>と訳出するのが適切であると思われる。

ところで、*The Sound and the Fury* の翻訳書で、ジェイソン・コンプトソンが、姉のキャディーに向かって、「おれがしてやると言ったことは一つ残らずしてやったじゃないか？あの子に一分だけ逢うと言ったじゃない

か? どうだい、そのとおりチャンと逢えたじゃないか?」(208) と言う場面がでてくる。「あの子」というのは、キャディーの娘のクエンティンのことである。この発話を読んで、多くの読者は狐につままれた気がするであろう。なぜなら、翻訳書では、ジェイソンが、キャディーをクエンティンに会わせる約束をしたことにはなっていないからである。翻訳書では、「あの子を一分だけでもわたしに見られるようにしてくれたら、五十ドルあげるわ」(206) と言って頼み込むキャディーの親心につけこんだジェイソンが、結局、100ドルと引き換えに頼みを聞き入れたことになっている。読者が狐につままれた気がするであろうと言うのには別の理由もある。この場面まで読み進んできた読者は、キャディーがクエンティンに会わせてもらえなかったことを間違いなく知っているはずだからである。じつは、このエピソードは、<see> という動詞の多義性に依拠しているのである。原文では、キャディーは、“[If] you’ll fix it so I can see her a minute I’ll give you fifty dollars.” (Faulkner, *The Sound and the Fury*, 203) と言って頼んだことになっている。つまり、キャディーは、<ちょっとの間だけでもあの子に会えるようにしてくれたら、五十ドル出すわ> と言ったわけである。それに対してジェイソンは、相手の言葉じりをとらえ、<1分きっかりだよ> という意味で “Just a minute[.]” (203) と言って、確認する。ジェイソンは、キャディーがどういう意味で <see> と言ったか百も承知のうえで、わざと<見る> という意味だとねじ曲げて受け取り、やがてクエンティンを連れて貸馬車に乗って待ち合わせ場所を通りかかり、キャディーがクエンティンをほんのわずかの間<見る> ことができるようにしたというわけである。そういった仕打ちに対して彼を責めるキャディーに向かって、彼は、“Didn’t I do everything I said? I said see her a minute, didn’t I? Well, didn’t you?” (206) と切り返したのである。つまり、この段落の最初で翻訳書から引用した箇所は、<してやると言ったことはおれは全部したじゃないか。あの子を一分間見ると言っただろ? どうだい、姉さん、ちゃんと見ただろ? > とでも訳出すべきであった。ただ、原文を忠実に日本語に移し変えたとしても、<see> という動詞の多義性がからんでいることが分からない限り、翻訳書の読者にはこのエピソードをきちんと理解することは無

理であろう。私にもこの多義性の処理の仕方について名案があるわけではない。キャディーの発話をくちよっとの間だけでもあの子に会う(see)ことができるようにしてくれたら、五十ドル出すわ>と訳出し、ジェイソンの発話をくしてやると言ったことはおれは全部したじゃないか。あの子をくちよっとの間見る(see)と言っただろ? どうだい、姉さん、ちゃんと見ただろ? >とでも訳出せざるをえないかもしれない。²²

(vi 単数・複数 / vii 加算名詞・不可算名詞)

加算名詞が使われるさいの4つの基本形、<a+単数形>、<the+単数形>、<複数形>、<the+複数形>については、<meal> を例に取り上げてすでに触れた。(中、31) 翻訳書では、この基本形の違いがかならずしもきちんと認識されていないのではないと思われるような事例が非常に多い。具体例を列挙することはあえてしないが、ほんの少しだけ示せば、翻訳書で“*He loved the car.*” (Puzo, 102) を「彼は車が好きだった。」(上、153) と訳出してあったり、“*... Juana had need of a man[.]*” (Steinbeck, 60) を「フアナはその男を必要とした」(66) と訳出してあったりする。それぞれ、<彼はその車がとても好きであった。>、<フアナは一人の男を必要としていた>とでも訳出すべきであろう。「彼は車が好きだった。」に相当するのは、<He loved cars.> であろうし、「フアナはその男を必要とした」に相当するのは、<Juana had need of the man.> であろう。また、翻訳書で“*our happy trip to Pontchartrain . . . where the picture was taken*” (Capote, 151) の“*where*” 以下を「あそこでは写真と撮った」(174) と訳出してあるが、それでは原文で定冠詞が使われていることを無視していることになろう。問題の写真は、ランドルフ、ドローレス、ペペ・アルバレス、そして主人公の父と一緒に映っている重要な写真で、何度も言及されているものであり、この箇所は、本来なら、<そこでその写真と撮った>とでも訳出すべきである。

(viii 物の名前)

分離複合語を単に2つの単語の組み合わせだと誤解する傾向があることはすでに触れたとおりだが(中、32-34)、“*a wise guy*” (Salinger, 60) を「かしこい男」(88) と訳出してあるのも、<wise guy> が分離複合語で

あることに翻訳者が気づかなかったせいであろう。この場合は<横柄な男>ぐらいの意味で使われている。²³

すでに指摘したとおり(中、72-73、注7)、英語では<hand>が<arm>の一部を構成すると考えられることはあっても、手首から腕の付け根までの部分も含めて<hand>と呼ぶことはないが、日本語では、<hand>に相当する部分を<手>と呼ぶと同時に、手首から腕の付け根までの部分も含めて<手>と呼ぶことがある。そのせいであろうが、<arm>を<手>と訳出してあることが多い。たとえば、翻訳書では、“the king’s arm”(Bellow, *Henderson the Rain King*, 222)を「王の手」(311)と訳出してある。これは誤りであると言い切れないにせよ、直前の“his hand”(222)も「王の手」(311)と訳出してあることもあって、読者に不親切な訳出の仕方と言っても間違いはなからう。

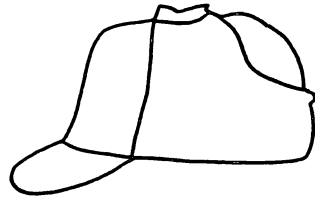
これもすでに指摘したことだが(中、72-73、注7)、英語では<foot>が<leg>の一部を構成すると考えられることはあっても、くるぶしから股までの部分も含めて<foot>と呼ぶことはないのに対して、日本語では<foot>に相当する部分を<足>と呼ぶと同時に、くるぶしから股までの部分も含めて<足>と呼ぶことがある。そのせいであろうが、<foot>を<脚>と誤って訳出してある事例が目立つ。たとえば、“the bricks on which Ellen’s and Judith’s feet rested”(Faulkner, *Absalom, Absalom!*, 82)の“Ellen’s and Judith’s feet”は、翻訳書では「エレンとジューディスの脚」(91)と訳出されている。この“bricks”というのは、馬車で旅するとき、数マイル進むごとに暖めては足の下において、足の冷えるのを避けるために用いられたものであるが、翻訳書のように「エレンとジューディスの脚」とすると、読者は、エレンとジューディスがれんがの上に脚を伸ばして乗せていたと受け取るであろう。

(ix 外来語の原語)

外来語の<ヒップ>の原語である<hip>は、むしろ<腰>に相当することに触れた際に、<hip>と<腰>は必ずしも同義ではないことも指摘しておいた。(中、41)。再度引用することになるが、*Longman Dictionary of Contemporary English*, Third Editionの<hip>の定義、“one of

the two parts on each side of your body between the top of your leg and your waist”からも明らかのように、<hip> は<腰>といっても身体の側面の部分だけを指すわけである。ところで、“the small of her back” (Steinbeck, 1) は翻訳書では「背中の一部」(5)と訳出してあるが、この <the small of one's back> は、同辞典の定義によれば、“the lower part of [one's] back where it curves” ということになる。つまり、これが<腰>の、身体の背面の部分に当たると考えられるのである。したがって、先程の“the small of her back” は<腰>と訳出しておくほうが原意により近いと言えよう。

The Catcher in the Rye では主人公が赤い“hunting hat” (17)をしばしばかぶるが、翻訳書ではこれは「ハンチング」(30)と訳出されている。しかし、<hunting hat> と<ハンチング> は相当違っている。作品の別の箇所にあ



るように、これは、ふつうは“hunting cap” (61)と呼ばれるが、文字通り狩猟用の帽子で、“earlaps” (53, 88)がついている。日本語で<ハンチング>と言え、平たくて丸みをおびた帽子のことであるが、この<hunting hat> はむしろ上に図示したような帽子のことである。問題の赤い“hunting hat”は、この小説における最も重要な<小道具>と言ってもよいもので、やはりきちんと<狩猟帽>と訳出しておくべきであろう。

ところで、外来語の原語と外来語のずれについて述べた際に、外来語の原語が指すものが外来語が指すものとは異なる場合について触れたが(中、38-46)、物の名前にこだわったために、形容詞を扱うのをすっかり忘れてしまっていたので、ここで2つ事例を論じておく。最初のものはまず翻訳書からの引用を読んでもらいたい。

「でも、きみどうするつもり？いつかは家へ帰らなきゃならないだろ」
とジョエルが訊いた。

彼女は鼻をこすり、ひどく大きな、訴えるような目で彼を見つめた

——これがアイダベル以外の相手だったならば、ジョエルは言い寄られていると思ったかもしれない。「かもしれないし、そうでないかもしれないわ。そのことで会いにきたの」それで急に事務的な態度になると、彼女は犬を膝から乱暴に押しつけ、ジョエルの両肩を同志だと言わんばかりに、しっかりと掴んだ——「どう、いっしょに逃げない？」(199-200)

アイダベルがジョエルに「どう、いっしょに逃げない？」と言って説得しようとしている際に、「急に事務的な態度になると、彼女は……」というのは奇妙である。原文では、問題の箇所は、“Abruptly businesslike, she...” (Capote, 174) となっている。おそらく、翻訳者は“businesslike”をいったん<ビジネスライク>と受け取り、それを「事務的な」に置き換えたうえで、上記のように訳出したものであろう。ところが、外来語の<ビジネスライク>は、<事務的に処理するときのような>という、否定的なニュアンスを伴った意味で使われるのが普通であるが、英語の<businesslike>にはそのようなニュアンスは付随しない。すでに述べたように(上、50)、形容詞の語感をつかむにはシソーラスが便利であるが、*The Random House Thesaurus*で<businesslike>の類義語を調べると、“efficient,” “methodical,” “orderly,” “organized,” “practical,” “systematic”などが示されており、状況次第で、<能率的な>、<手際よい>、<てきぱきとした>などのような、むしろプラスのニュアンスを伴う訳語を充てるべきであることが分かる。*The Random House Thesaurus*には<serious>という類義語も示されているが、上の引用箇所の場合には、こちらの意味であると考えるのが妥当であろう。つまり、「急に事務的な態度になると、彼女は……」のところは、<急にまじめになると、彼女は……>とでも訳出しておけばよい。

国語辞典では、外来語の<ローカル>に対して<地方の>という語義が示されているのが普通だが、この<地方の>という表現が<田舎の>という意味に受け取られるためか、<ローカル>の原語の<local>が<田舎の>という意味をもつと誤解される場合がある。たとえば、翻訳書では、“I knew

there was something very local about the name.” (Updike, 125) という発話を「そういえば、ああいう名前がとても田舎っぽいのは確かですね」(上、182)と訳出してある。英語の <local> は元来<ある特定の場所の>という意味をもち、この発話では、<ある特定の地方の>という意味で使われている。つまり、この発話は、<この地方特有の感じが強い名前だとは分かっていました。>とでも訳出すべきものなのである。²⁴

外来語の原語が外来語の意味とは違う意味をもつとき、うっかり外来語の意味で使われているのだと思い込んでしまうケースについてもすでに触れたが(中、46-50)、1つだけ事例を追加しておきたい。*The Catcher in the Rye* の翻訳書では、弟のアーリーが本人の「バイク」(58)に腰かけているのを見かけたことを主人公が思い出す箇所が出てくるが、当時アーリーは10歳前後のはずなので、ちょっと信じがたい。原文は以下のようになっている。

I remember once, the summer I was around twelve, teeing off and all, and having a hunch that if I turned around all of a sudden, I'd see Allie. So I did, and sure enough, he was sitting on his bike outside the fence. . . . (Salinger, 38)

原文でも確かに“bike”となっているわけだが、この場合は、<自転車>の意味である。²⁵

(x 職業、役割、続柄、制度などの名称)

制度に関する名称としては、大学関係のものが誤訳される例が多いことをすでに指摘しておいたが(中、54)、似通ったものを1つ追加しておきたい。厳密には、これは、大学ではなく、おおむね日本の高等学校に近いレベルのアメリカの学校に関して使われた表現であるが、翻訳書で“around midterms” (Salinger, 4)を「学期の中頃には」(10)と訳出してある。これは当然<中間試験の頃に>と訳出すべきものである。<中期>という意味なら、<midterm> は不可算名詞で複数形では使われないはずであるが、そんなことよりも、学校教育からんでアメリカで <midterms> あるいは <midterm exam(ination)s> と言えば、高等学校であれ、大学であれ、

<中間試験>という意味であることは常識的な事柄のはずである。

(xi 固有名詞)

The Catcher in the Rye 中のニューヨーク市を舞台とする部分で、主人公がいくつかの建造物に詳しく言及したり、あるいはそれらを訪れたりするが、そのうちのひとつ、“the Museum of Natural History” (Salinger, 119) は、翻訳書では「自然科学博物館」(168)と訳出されている。しかし、“Natural History”を「自然科学」と訳出するのは変であり、全体は<自然史博物館>と訳出しておくべきであったろう。また、“the Museum of [A]rt” (Salinger, 200) は、翻訳書では「美術博物館」(280)と訳出されているが、「美術博物館」というのはあまり一般的な用語とはいえないであろう。ふつう、<museum of art>、あるいは <art museum> と言えば<美術館>のことであり、問題の箇所も<美術館>と訳出しておけばよかったのである。ところで、翻訳者がこれらの建造物を架空のものと思った可能性があるが、作品中のさまざまなデータから判断して、どちらも実在のものと考えほうが妥当である。前者は、正式には<American Museum of Natural History>と呼ばれるもので、日本では<アメリカ自然史博物館>という名で知られているものであろうし、後者は、正式には“Metropolitan Museum of Art”と呼ばれ、日本では<メトロポリタン美術館>という名で広く知られているものであろう。

同じく *The Catcher in the Rye* に出てくるホテルのひとつ、“the Seton Hotel” (Salinger, 141) は、翻訳書では「セートン・ホテル」(198)となっている。このホテルの名前は、[sí:tn]と発音される“Seton”という人名に由来すると考えられるので、<シートン・ホテル>と訳出すべきであろう。これは、作品の解釈にはなんらの影響を与えることのない瑣末な事柄とも言えようが、日本では『動物記』の作者であるErnest Thompson Seton は<シートン>として広く知られているわけであり、彼と同じ名前に由来するホテル名をわざわざ「セートン・ホテル」と表記する理由はないであろう。

Go Down, Moses に出てくる、北ミシシッピでのマッキヤスリン家の始祖にあたる“Carothers McCaslin” (Faulkner, *Go Down, Moses*,

37) の名前は、翻訳書では、「キャロザーズ・マッキヤスリン」(41) と表記されているが、この人物のファースト・ネームは<カラザーズ>と表記するほうがよいと思われる。*Webster's New Biographical Dictionary* には、Wallace Hume Carothers というアメリカの化学者の項目があり、この人物のラスト・ネームについては、IPA での表記に直して示せば、[kərlðərz] という発音を示されている。²⁶

As I Lay Dying の登場人物の一人のラスト・ネーム、“Gillespie” の発音は [giléspi] のはずで、片仮名での表記は<ギレスピ>あるいは<ギレスピー>とすべきであろう点を指摘し、根拠として2つの固有名詞発音辞典を挙げておいた。(中、59) *Webster's New Biographical Dictionary* には、<Gillespie> というラスト・ネームの人物が3名採録されているが、このラスト・ネームに対して、IPA での表記に直して示せば、[giléspi] という発音がやはり示されている。²⁷

(xii 言い換え)

代名詞からんで、別々のものを同一視してしまう事例については、短編の“Barn Burning”の翻訳書に見られるものをひとつすでに検討したが(中、64)、この翻訳書では同様の誤りが何度か繰り返されている。2つだけ事例を追加しておきたい。

“Get back in the wagon,” his father said. He got in too, over the tail-gate. His father mounted to the seat where the older brother already sat and struck the gaunt mules two savage blows with the peeled willow, but without heat. (Faulkner, “Barn Burning,” 6)

「馬車の中に戻っていろ」と言って、父もステップに足をかけて乗った。すでに兄が座っている馭者台に乗って、やせた騾馬たちに皮をはいだ柳の枝の鞭を荒く二度当てたが激したものはなかった。(231)

翻訳者は、2番目の文の“He”が先行する“his father”を言い換えたも

のだと思ったのであろうが、この代名詞は主人公の少年を指しているのである。彼の父親は、彼の母親に向かって“Get back in the wagon[.]”と言ったのであり、具体的に描写されてはいないが、彼女はその指図に従って馬車に再び乗り込んだわけである。2番目の文は、それに続く少年の動作を伝えているもので、<少年も尾板越しに馬車に乗り込んだ。>、あるいは、<少年も尾板をまたいで馬車に乗り込んだ。>とも訳出するのが妥当であろう。3番目の文の訳文も変更する必要があることは言うまでもない。

次の事例は、ある夜、主人公の少年とその父親が、地主のド・スペイン少佐に汚れを落とすように命じられた敷物を彼の家の玄関先まで届けたあと、二人でラバに乗って家に帰ろうとする場面に関するものである。これについては、先に翻訳書からの引用を検討する。

家の中に一つ、灯りがついて、少年は驟馬に乗ったまま緊張し、むらなく静かに、ほんの少しだけ早くなった呼吸をつづけたが、あの足音は速度を増すことがなく、いま段を降りている。いま少年の目にも父が見える。

「今度は乗らない？」と少年はささやく——「今度は二人でいっしょに乗って行けるよ」いま家の中の灯りのぐあいが変わり、ぱっと明るくなってから暗くなる。いま段を降りて来るところだ と少年は思った。すでに驟馬を乗馬台のところに導いて来てあった。まもなく父が彼のうしろに乗り、手綱を二重にし、驟馬の首を横ざまに打ったが、驟馬が[速歩で駆けはじめることができる]前に固い、やせた腕がうしろから伸びて、その固い、ごつごつした手が驟馬の手綱を引いて並み足に戻した。(240-241)

この引用箇所からは、「手綱を二重にし、驟馬の首を横ざまに打った」のは父親であると読み取れるが、その父親が、すぐさま「驟馬の手綱を引いて並み足に戻した」とあるので、翻訳書の読者は、それではいったい何のために父親が、「手綱を二重にし、驟馬の首を横ざまに打った」のか疑問に思うであろう。原文は次のようになっている。

[A] light came on in the house and the boy sat, tense, breathing steadily and quietly and just a little fast, though the foot itself did not increase its beat at all, descending the steps now; now the boy could see him.

“Don’t you want to ride now?” he whispered. “We kin both ride now,” the light within the house altering now, flaring up and sinking. *He’s coming down the stairs now*, he thought. He had already ridden the mule up beside the horse block; presently his father was up behind him and he doubled the reins over and slashed the mule across the neck, but before the animal could begin to trot the hard, thin arm came round him, the hard, knotted hand jerking the mule back to a walk. (Faulkner, “Barn Burning,” 15)

翻訳者がしているように、9行目の“he”が先行する“his father”を言い換えたものであると読み取るならば、11行目の“him”も同一人物を指すと理解するのが自然であろう。ところが、そうすると、父親の後ろにまた誰か別の人物が乗っていることになり、つじつまが合わない。つまり、9行目の“he”は、“his father”を言い換えたものではなくて、この文の冒頭の“He”と同じく、主人公の少年を指すのである。

ところで、原文からの引用の7行目の“*the stairs*”が、翻訳書からの引用では「段」となっていることから判断すると、翻訳者はこれを原文からの引用の3行目の“*the steps*”の言い換えであると考えたのであろう。同時に、“*He’s coming down the stairs now[.]*”の“He”が父親を指すものと考えたのであろう。しかし、“*He’s coming down the stairs now[.]*”というのは、少年が、ド・スペイン少佐が灯りを手にして家の中の<階段>を降りてくるところを想像している箇所である。原文からの引用の4行目に“*now the boy could see him*”とあるのは、父親がド・スペイン少佐の家の前の段を降りきって、少年が乗っている驃馬のところまで

近づいてきたのでその姿が少年に見えるようになったことを示しているわけであり、その後でまた「[父さんは]いま段を降りて来るところだ」と少年が思ったというのでは、まったくつじつまが合わない。

必ずしも同一視したとは断定できないにしても、翻訳書で別々のものに不用意に同一の訳語を充ててあるために原文の意図からそれてしまったと言える事例についてもここで触れておきたい。

.....そのとき彼は、サムが鍛冶屋の店よりも屋敷のほうに近よるのを、生まれてから今まで一度も見たためしかなかったことを思いだした。彼が食べることさえもやめてその場に座っていると、彼といとこの耳に、食器室のドアの向こうから人声が聞こえ、やがてドアがあいたかと思うと、サムが、帽子は手にもっていながら、下僕以外の者なら屋敷のなかのほかのだれもがするはずのノックもしないで入ってきた..... (194)

説明を簡略化するためにコンテキストはとりあえず無視するが、この引用箇所を読んで、「屋敷」に住んではいけないはずのサムが「下僕以外の者なら屋敷のなかのほかのだれもがするはずのノックもしないで入ってきた」ことについて、なぜ語り手がこだわっているのか、理解できる人は皆無であろう。原文は以下のようなものである。

. . . he remembered then that never in his life before had he seen Sam nearer the house than the blacksmith-shop. He stopped eating even: he sat there and he and his cousin both heard the voices from beyond the pantry door, then the door opened and Sam entered, carrying his hat in his hand but without knocking as anyone else on the place except a house servant would have done[.] (Faulkner, *Go Down, Moses*, 166)

つまり、翻訳書では、原文の2行目の“the house”と6行目の“the place”をどちらも「屋敷」と訳出してあるために分かりにくくなっている

のである。この場合の“the place”は<農園>という意味であり、「屋敷」と訳出したのでは、誤解を招く。この“the place”というのは、この作品の主たる舞台となる、カラザーズ・マッキヤスリンが築き上げた農園である。この農園が、やがて、“the Edmonds place” (35)、つまり<エドモンズ農園>と呼ばれるようになるいきさつについては広く知られているところである。この翻訳書では、この農園が“on my place” (121)、“this place” (264)などと表現されるたびに「私の屋敷」(143)、「この屋敷」(310)のように訳出され、同時に、歴代の農園主の住む館も、“the house” (47)、“the very house” (97)などと言及されるたびに「屋敷」(53)、「屋敷そのもの」(114)のように訳出されているために、無用の混乱を引き起こす結果となっている。とりわけ、かつて奴隷であったころから解放後にいたるまで黒人たちが居住してきた農園内の小屋と農園主の館の位置関係などが読者にはきわめて分かりにくくなってしまっている。²⁸ (完)

注

1 翻訳書のページは、引用箇所の上に(巻と)数字のみで示す。

2 似通ったイディオムとして <scare the (living) daylight out of someone> があるが、こちらは、<誰かを気を失うほどおびえさせる> という意味であり、<scare> の代わりに <frighten> が使われる場合もある。

3 このイディオムでは、<wrap> の代わりに <turn>, <twist>, <wind> が使われることもあるが、<twist> がもっとも一般的である。実際、*NTC'S American Idioms Dictionary* では、<twist someone around one's little finger> の形で採録されている。

4 ここでは小説本体の中の“Charles Etienne Saint-Valery Bon” (155, 166) という表記にしたがったが、巻末の GENEALOGY では、当初は“CHARLES ETIENNE DE SAINT-VELERY BON”となっており、今回使用している訂正版では、“CHARLES ETIENNE DE SAINT VALERY BON”に変更してある。

なお、“Saint-Valery”の片仮名での表記については、慣行に従っただけで、<セイント=ヴァレリー>よりも<サン=ヴァレリー>のほうが適切であるのかどうかという点については、定見をもたない。

5 「頭のとっぺんから足の爪先まで」にあたるイディオムとしては、<from head to toe>のみならず、<from head to foot>, <from head to heel> も使われる。また、「頭のとっぺんから足の爪先まで」でも、全身を意味するのだから、<完全に>という意味になるとも考えられるが、<head over heels> というイディオムの<完全に>という意味は、元の<真っ逆さまに>という意味から派生している。(そのことは、<head over heels> と同じ意味の <heels over head> というイディオムの元の意味を考えたほうがもっとよく分かる。)つまり、<head over heels> というイディオムは、<一時的に正常な判断力を失って>というニュアンスを伴っているので、ここではやはり、<ぞっこん惚れ込む>といった、冷静さをやや欠いているというニュアンスが伝わるような訳文にしたほうがよいであろう。

6 英和辞典の中には、<何かに専念する>という意味の <apply oneself to something> という形のみを採録しているために、<apply oneself> が単独で使われることがないかのような印象を与えるものがあるが、*Longman Dictionary of Contemporary English, Third Edition* は、<apply yourself> の形でイディオム扱いしたうえで、“Stephen would do very well if only he applied himself.” という例文を載せている。なお、元の小説で、<apply oneself> およびその応用形が別のところで計3回出てくるが、これらはいずれも<勉強する>という意味に訳出している。

7 翻訳書では、<Eccles> という姓は、“Jack Eccles” (Updike, 100) の名前が「ジャック・エクレス」(144) と訳出されたあと、一貫して「エクレス」と表記されているが、*English Pronouncing Dictionary of Proper Names* によれば、[ékɪlz] と発音されるとなっているので、ここでは<エクルズ>と表記しておく。ちなみに、『ランダムハウス英和大辞典』(第2版)には、Sir John Carew Eccles という名のオーストラリア

の生理学者の項があり、ラスト・ネームについては [ékɫz] という同じ発音表記と <エックルズ> という片仮名での表記が示されている。この片仮名での表記がどの程度一般性をもつのかは知らない。

Pronouncing Dictionary of Proper Names には、Sir John Carew Eccles のラスト・ネームについて、通常の表記に直して示せば、[ékɫz] という発音が記されており、また、*Webster's New Biographical Dictionary* には、Marriner Stoddard Eccles というアメリカの銀行家が載っており、そのラスト・ネームについては、通常の表記に直せば、[ékɫz] という発音が記されている。

このように、辞典によって微妙な違いがあるが、片仮名表記としては、<Eccles> を <エクルズ> と表記しておいて妥当だと思われる。

8 ついでに <in one's stockings> というイディオムが、<靴下を履いて>ではなく、<靴下を履いただけで>、つまり、<靴を脱いで>という意味で使われることも確認しておくといよい。このイディオムは、<in one's stocking feet>、<in one's stockinged feet> の形で使われることもある。

9 “I'll have a look at them first!” は、コンテキストを考慮しなければ、<おれが一番先にそれらを見る！> という意味もちうる。この場合は、スタンリーとスタンリー以外の人間の間の順番が問題にされていることになるわけである。順番を示す <first> や <next> などの単語を含む文は、基本的に多義的であるので、常に注意が必要である。たとえば、本文ですでに検討した “I would be drawn asunder by wild horses first.” の場合でも、コンテキストによっては、<(何か別のことをされる前に)荒馬に引っ張られて体を真っぶたつに裂かれる> という 3 つ目の意味もちうるのである。

10 もちろん、“the little (grinders and slicers and holders)” の形でまとまっていると考えることもできる。どちらの解釈が正しいかについては、この場合、決め手を欠く。

11 “along him” は訂正版で付け加えられた語句で、翻訳者が利用したはずの旧版にはなかったものである。

12 競漕種目のうち、日本でスウィープ種目と呼ばれているものの中には、英語で <coxless pair> と呼ばれる、舵手なしで、2人の漕手がそれぞれ1本のオールで、つまり一對のオールで漕ぐ競技もあるが、この競技用のためのボートをジェラルドが1人で漕ぐことは考えられない。

13 識別の項で扱った(上、37-38)、*Absalom, Absalom!* の翻訳書に見られる“mortality”(232)と<morality>との識別を誤った事例は、「正義は金に随伴する」(201)という非論理的な解釈を前提としており、本来は、ここで取り上げるべきものであった。

14 ただし、<bureau> は、*Random House Webster's College Dictionary* に“a chest of drawers, often with a mirror at the top”と定義されていることから分かるように、<ミラーチェスト>を指す場合もある。また、<dresser> は、*Webster's New World Dictionary* に“a chest of drawers, usually with a mirror”と定義されていることから分かるように、鏡の付いていない<(ロー)チェスト>を指す場合もある。

15 翻訳書のように、ただ『ステッペンウォルフ』と訳出したのでは分かりにくい。<『荒野の狼』>、あるいは<ヘッセの『荒野の狼』>とするか、それともなんらかの訳注を付すべきであろう。

16 英語では、<かかとがすり減っている。>と言うときの<かかと>を<heel>と呼ぶのに対して、<かかとを踏まないようにして靴を履きなさい。>と言うときの<かかと>は<counter>と呼ぶ。(日本語でも、靴の製造、販売、修理などに携わる人たちは、<カウンター>と呼ぶことが多いようである。)この<counter>については、*What's What: A Visual Glossary of the Physical World* の<Woman's Shoe>の項の図解が分かりやすい。

Longman Dictionary of American English の<bedroom>の項の図解では、<slipper>に対して<スリッパ>としか呼べないような、<counter>の無い履物が示されているが、何らかの混乱が起きているのかも知れない。(外来語の<スリッパ>が指すものは、アメリカでは<mule(s)>、あるいは、<scuff(s)>と呼ばれる。

17 せめて、“the Dismal Swamp”を<ディズマル湿地(帯)>ときちんと訳出してあれば、ランド・マクナリー社の *Road Atlas*などを参照して、サウサンプトン郡との位置関係を読者が独自に確認することも可能であったろう。

本文で触れた、ストウの *Dred: A Tale of the Great Dismal Swamp* は、ナット・ターナーの反乱にヒントを得て書かれた作品であるが、スタイロン自身の *The Confessions of Nat Turner* もそうであることは言うまでもない。この *The Confessions of Nat Turner* にも、ナット・ターナーが “a safe flight into the bosom of the Dismal Swamp” (99) を計画することについての言及があるが、このように、ディズマル湿地(帯)、サウサンプトン郡、ナット・ターナーの反乱、スティンゴ、そしてスタイロンは、それぞれ密接に絡みあっているわけである。

18 この <SVO into doing something> という動詞型でよく使われる動詞の数は結構多いが、<shame>, <talk> 以外にも、<blackmail>, <bully>, <cajole>, <coerce>, <deceive>, <dupe>, <fool>, <frighten>, <intimidate>, <nag>, <persuade>, <provoke>, <scare>, <seduce>, <shock>, <tempt>, <trick> あたりは常に念頭に置いておく必要があるろう。

19 ボンがヘンリーを観察している場面を想像しながら、“... [Bon] stood looking at the innocent face of the youth almost ten years his junior[.]” (Faulkner, *Absalom, Absalom!*, 251) とシュリーヴが語る箇所があるが、ヘンリーがボンより<10歳近く年下である>とするシュリーヴの認識は、“CHRONOLOGY”の内容と合致している。

20 この事例は、本来なら、複合的なものの項で〔数詞+構文〕の見出しのもとに扱うべきものであった。なぜなら、翻訳者は、“It stood . . . better than thirty inches at the shoulders. . . .”という表現で、<stand> という動詞がSVCの動詞型で使われていることに気づかなかったようだからである。*Longman Dictionary of Contemporary English*, Second Edition の “He stands 5 feet 10 inches.” という例文はすでに引用したが(上、58、注2)、こういった例文になじんでおれば、“It

stood . . . better than thirty inches. . . .” が<高さは30インチ以上あった>という意味をもち、“at the shoulders” が<肩のところで>という意味であることを理解しやすかったことであろう。

21 *Sanctuary* に登場するルビー・ラマーについては単数・複数の項ですでに一度触れたが(中、29-30)、彼女の原名は“Ruby Lamar”(Faulkner, *Sanctuary*, 9)である。彼女のファースト・ネームが7月の誕生石である<ルビー>を連想させることは言うまでもなかろう。翻訳書では彼女の名前は「ルービー・ラマー」(13)となっている。“Ruby”の発音は[rú:bi]なので<ルビー>とするのが一番近いが、何度も繰り返したように、このような場合には<ルービー>と表記することも多いわけで、翻訳者はこのような慣行に従って「ルービー」と表記したものであろう。ただ、それだと、翻訳書の読者は彼女のファースト・ネームから宝石のルビーを連想することはないであろう。宝石の<ruby>の発音も[rú:bi]であり、こちらの方は<ルビー>という片仮名表記が定着しているわけだから、<Ruby>という女性名も<ルビー>と訳出するのがよいと思われる。(以前に触れたときには、翻訳書での表記にならって、<ルービー・ラマー>としておいたが、ここであらためて<ルビー・ラマー>に訂正しておきたい。)

The Great Gatsby の主要登場人物の一人である“Daisy [Buchanan]”(5)のファースト・ネームは、翻訳書では「デイズィ」(11)と表記されているが、これも、連想という点から言えば、不適切であろう。<デイジー>としておけば、読者は、作者が狙ったと思われるとおり、花のデイジーを連想するであろう。場合によれば、<純真無垢>などのデイジーの花言葉を思い起こし、作者の皮肉な意図を感じ取る読者もいるかも知れない。ところで、別の主要登場人物の一人である“Myrtle [Wilson]”(28)のファースト・ネームの場合にはやや事情が異なる。翻訳書では単に「マートル」(39)と訳出してあるが、この名前から<ギンバイカ>という常緑低木を連想する読者の数はきわめて限られているだろう。<ギンバイカ>が、その花、葉、果実のもつ芳香のために、ビーナスの神木とされていること、結婚式の花輪に用いられることなどを知っている人でも、この木が英語で“myrtle”と呼

ばれることは知らないかも知れない。ジェイ・ギャツビーのパーティーにやってくる客たちの名前のなかには、明らかに動植物などの名前に由来するものが多々あり、訳注が避けられないむねはすでに指摘したとおりだが（中、62-63）、“Myrtle [Wilson]”のファースト・ネームについても、訳注を付すべきであろう。＜ギンバイカ＞の花言葉は＜愛＞であるが、マートル・ウィルソンとトム・ブキャナンとの不倫関係を考えると、デイジー・ブキャナンの場合と同様、彼女の命名にも作者の皮肉な意図が込められていると感ぜられよう。

22 論理性の項で扱った、ある短編の翻訳書からの事例の1つに、動詞の多義性がからんだものがあったが、その多義性をうっかり見逃していたので、ここで論じておく。すでに1度引用したが（上、56）、翻訳書で、次のような場面が出てくる。

少年は父の前に立つと、判事に向かって叫んだ——「父さんがやったんじゃない！ 焼いたりなんか……」

「馬車に戻れ」と父が言った。

「焼いた？」と判事が言った——「問題のじゅうたんをその上に焼いたのかね」（243）

原文は以下のようなものである。

[He] stood against his father and cried at the Justice: “He ain’t done it! He ain’t burnt . . .”

“Go back to the wagon,” his father said.

“Burnt?” the Justice said. “Do I understand this rug was burned too?” (Faulkner, “Barn Burning,” 17-18)

少年は、父親がバーンに放火したために裁判にかけられていると思い込んでいたので、2行目にあるように“He ain’t burnt . . .”と言いかけたのだが、実際には、読者がよく承知しているとおり、父親は敷物を石でこすっ

たりして台無しにしたことの責任を問われていたわけである。一方、判事は、バーンに放火云々ということはまったく念頭になかったため、少年が当然敷物の話をしていると思って4行目の“Burnt?”という発話を行なったのである。したがって、この発話は<焦がした?>とでも訳出すべきことになる。次に続く発話も、<その敷物を焦がしもしたということかね?>とでも訳出すべきであろう。もし、父親が敷物を焼いてしまったのであれば、原告がそのことを判事に伝えなかったはずはない。また、そのような重大な情報を自分が原告から聞いていないという状況を判事が想定したとはとても考えられないからである。この場合も、判事の誤解を讀者にきちんと伝えることは非常に難しい。少年の“He ain’t burnt . . .”という発話を<燃やす(burn)なんて、そんなことは……>と訳出し、判事の“Burnt?”という発話を<焦がす(burn)なんてだと?>とでも訳出せざるをえないかもしれない。

23 ただし、別の箇所では“Wise guy.” (Salinger, 51) と使われたところでは、「キイタふうなことを言うな。」(75) と適切に訳出されている。

24 *The Random House Thesaurus* で <local> の反意語を見ると、<national> が示されているが、<national> が<全国的な>という意味をもつのに対して、<local> が<ある地方の>、<ある地域の>という意味をもつことから、これは当然のことと言えよう。ところで、*The Random House Thesaurus* には、<local> の反意語として、<international> も示されているが、<local> という単語が <national> の類義語としても使われると受け取れる記述を見て、奇異に感じる人がいるかもしれない。しかし、本文で述べたように、<local> という単語は元来<ある特定の場所の>という意味であるから、基準となる場所がある市であれば、当然<その市の>という意味になるのと同様、基準となる場所がある国であれば、当然<その国の>という意味になるのである。したがって、“the local along with the global habitat” (Zelinsky, 252) のように、<global> の反意語として、<national> の意味で <local> が使われることはなんら不思議ではないのである。また、基準となる場所がある<国>である場合、<a local product> が<国産品>という意味になることもある。つまり、

<local> が<国産の>という意味をもつわけであるが、それで、*The Random House Thesaurus* には、<local> の反意語として <foreign> が示されているわけである。また、<local anesthesia> が<局部麻酔>という意味になるのは、基準となる場所が体のある部位だからである。

25 ただし、別の箇所でありの “bike” (98, 99) が言及されるところでは、「自転車」(140, 141) と正しく訳出している。また、主人公自身が子供の頃に乗っていたという “bike” (154) も「自転車」(216) と正しく訳出している。したがって、翻訳者は <bike> という単語が<自転車>という意味でも使われることを知っていたわけであろう。すると、本文で問題にした箇所については、むしろ、翻訳者が状況判断を誤った結果、「バイク」と訳出してしまったものと考えられるべきかもしれない。

26 『ランダムハウス英和大辞典』には、同じ化学者の名前が記載されており、ラスト・ネームについては、[kərlðərz] という発音表記とともに、「カロザース」という片仮名での表記が示されている。この片仮名での表記がどの程度一般的に受け入れられている表記であるのかについては、未詳である。

English Pronouncing Dictionary of Proper Names には、<Carothers> に対して [kərlðəs] という発音が示されているが、[kərlðəz] とすべきものだったと考えられる。

27 『ランダムハウス英和大辞典』には、John Birks Gillespie というアメリカのジャズトランペット奏者の名前が記載されているが、同辞典には、ラスト・ネームについては、IPA による同じ発音表記とともに、「ガレスピー」という片仮名表記が示されている。この片仮名表記がどの程度一般に受け入れられている表記であるのかは未詳であるが、少なくとも翻訳書の「ジルスピー」という表記が不適切であると言って間違いはなさそうである。

28 参考までに別の小説に見られる同様の言い換えを記しておく。*Winesburg, Ohio* の “Godliness” という物語のなかでは、“the place” (66) が “the farm” (66) と言い換えられており、さらに、“the Bentley farm” (67) が “the place” (67) に一度言い換えられた後、さらに “the

farm” (68) と言い換えられている。これだけでも、<farm> と <place> の互換性がよく分かるが、“the Bentley farm” (77) が “the Bentley place” (77) に言い換えられているケースを見れば、一目瞭然というところであろう。

参照文献

辞典類

- American Slang*. New York: Harper & Row, 1987.
- Brewer's Dictionary of Phrase and Fable*, 14th edition. London: Cassell, 1989.
- Collins Cobuild English Dictionary*, New Edition. London: Harper Collins, 1995.
- Common American Phrases in Everyday Contexts: A Detailed Guide to Real-Life Conversation and Small Talk*. Lincolnwood, IL: National Textbook Company, 1992.
- Dictionary of Contemporary Idioms*, A. London: Macmillan Language House, 1983.
- Encyclopedia Americana, The*. International Edition. Danbury, CT: Grolier, 1993.
- English Pronouncing Dictionary of Proper Names* (固有名詞英語発音辞典). 東京:三省堂、1970.
- English Proverbs Explained*. London: Macmillan Language House, 1969.
- Longman Dictionary of American English*. New York: Longman, 1983.
- Longman Dictionary of Contemporary English*, Second Edition. Essex, England: Longman, 1987.
- Longman Dictionary of Contemporary English*, Third Edition. Essex, England: Longman, 1995.
- Longman Lexicon of Contemporary English*. Essex, England: Longman,

1981.

Longman Photo Dictionary [the American English edition]. New York: Longman, 1987.

Merriam-Webster's Collegiate Dictionary, Tenth Edition. Springfield, MA: Merriam-Webster, 1994.

NTC's American Idioms Dictionary. Lincolnwood, IL: National Textbook Company, 1988.

Pronouncing Dictionary of Proper Names. Detroit, MI: Omnigraphics, 1993.

Random House Dictionary of the English Language, The. New York: Random House, 1987.

『ランダムハウス英和大辞典』(第2版) 東京:小学館、1994.

Random House Thesaurus, The, College Edition. New York: Random House, 1984.

Random House Webster's College Dictionary. New York: Random House 1991.

Road Atlas. Skokie, IL: Rand McNally, 1996.

Webster's Biographical Dictionary. Springfield, MA: G. & C. Merriam, 1969.

Webster's New Biographical Dictionary. Springfield, MA: G. & C. Merriam, 1983.

Webster's New World Dictionary of American English, Third College Edition [Updated 1994 Edition]. New York: Webster's New World, 1994.

Webster's Third New International Dictionary of the English Language. Springfield, MA: G. and C. Merriam, 1968.

What's What: A Visual Glossary of the Physical World. New York: Ballantine, 1981.

Word by Word Picture Dictionary. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, 1994.

英語文献(翻訳者が底本として使った版とは内容が異なる版の場合もあるが、いちいち明記しない。)

Anderson, Sherwood. *Winesburg, Ohio*. New York: Viking, 1958.

Bellow, Saul. *Henderson the Rain King*. New York: Penguin, 1976.

———. *Seize the Day*. New York: Penguin, 1976.

Bowles, Paul. *The Sheltering Sky*. New York: Vintage, 1990.

Capote, Truman. *Other Voices, Other Rooms*. New York: Vintage, 1994.

Chesnutt, Charles W. "The Sheriff's Children." *The Signet Classic Book of Southern Short Stories*. Ed. Dorothy Abbott and Susan Koppelman. New York: Penguin, 1991.

Ellison, Ralph. *Invisible Man*. New York: Modern Library, 1992.

Faulkner, William. *Absalom, Absalom!* New York: Vintage, 1990.

———. *As I Lay Dying*. New York: Vintage, 1990.

———. "Barn Burning." *Collected Stories of William Faulkner*, 3-25.

———. *Collected Stories of William Faulkner*. New York: Random House, 1950.

———. *Go Down, Moses*. New York: Vintage, 1990.

———. *Light in August*. New York: Vintage, 1990.

———. *Mansion, The*. New York: Vintage, n. d..

———. "Red Leaves." *Collected Stories of William Faulkner*, 313-341.

———. *Sanctuary*. New York: Modern Library, 1958.

———. *Sound and the Fury, The*. New York: Vintage, 1990.

Fitzgerald, F. Scott. *The Great Gatsby*. New York: Charles Scribner's Sons, 1953.

Harris, Thomas. *The Silence of the Lambs*. New York: St. Martin's, 1989.

McCarthy, Mary. *The Group*. London: Penguin, 1964.

Melville, Herman. "Bartleby, the Scrivener: A Story of Wall-Street."

- The Piazza Tales and Other Prose Tales, 1839-1860.* Evanston, IL: Northwestern UP and the Newberry Library, 1987. 13-45.
- . *Confidence-Man: His Masquerade, The.* Ed. Hershel Parker. New York: Norton, 1971.
- O'Connor, Flannery. "Good Country People." *The Complete Stories.* New York: Farrar, Straus and Giroux, 1979. 271-291.
- Puzo, Mario. *The Godfather.* Greenwich, CT: Fawcett, 1969.
- Roth, Philip. *Goodbye, Columbus. Goodbye, Columbus and Five Short Stories.* Boston, MA: Houghton Mifflin, 1959.
- Rovin, Jeff. *1,000 More Great Jokes.* New York: New American Library, 1989.
- Salinger, J. D. *The Catcher in the Rye.* New York: Bantam, 1964.
- Steinbeck, John. *The Pearl. The Pearl/The Red Pony.* New York: Penguin, 1986.
- Styron, William. *Confessions of Nat Turner, The.* New York: Random House, 1967.
- . *Sophie's Choice.* New York: Bantam, 1980.
- Thoreau, Henry David. *Walden and Civil Disobedience.* Ed. Owen Thomas. New York: Norton, 1966.
- Twain, Mark. *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court.* Ed. Bernard L. Stein. Berkeley, CA: U of California P, 1984.
- Updike, John. *Rabbit, Run.* New York: Knopf, 1960.
- Walker, Alice. *Color Purple, The.* New York: Pocket Books, 1985.
- . *You Can't Keep a Good Woman Down.* San Diego, CA: Harcourt, 1981.
- Webb, Charles. *The Graduate.* New York: New American Library, 1963.
- Whitman, Walt. "Song of Myself." *Leaves of Grass.* Ed. Sculley Bradley and Harold W. Blodgett. New York: Norton, 1973.
- Williams, Tennessee. *A Streetcar Named Desire. A Streetcar Named*

Desire and Other Plays. Ed. E. Martin Browne. London: Penguin, 1962.

Zelinsky, Wilbur. *Nation into State: The Shifting Symbolic Foundation of American Nationalism*. Chapel Hill, NC: U of North Carolina P, 1988.

日本語文献(著者の原名、翻訳書のタイトルのアルファベット順)

ベロー、ソール。『雨の王ヘンダソン』 東京：中央公論社、1988。
(1967年の初版の中公文庫版)

—。『その日をつかめ』 東京：集英社、1978。(集英社文庫)

ボウルズ、ポール。『シェルタリング・スカイ』 東京：新潮社、1988。
(新潮文庫)

カポーティ、トルーマン。『遠い声 遠い部屋』 東京：新潮社、1971。
(新潮文庫)

エリソン、ラルフ。『見えない人間(I)』、『見えない人間(II)』 東京：
早川書房、1974。(ハヤカワ文庫)

フォークナー、ウィリアム。『アブサロム、アブサロム!』 東京：富山
房、1968。(フォークナー全集 12)

—。『八月の光』 東京：富山房、1968。(フォークナー全集 9)

—。『響きと怒り』 東京：富山房、1969。(フォークナー全集 5)

—。『行け、モーセ』 東京：富山房、1973。(フォークナー全集 16)

—。『これら十三篇』 東京：富山房、1968。(フォークナー全集 8)

—。「紅葉」 『これら十三篇』、111-148。

—。「納屋を焼く」 『短篇集(一)』、228-251頁。

—。『サンクチュアリ』 東京：富山房、1992。(フォークナー全集 7)

—。『死の床に横たわりて』 東京：富山房、1974。(フォークナー全
集 6)

—。『短篇集(一)』 東京：富山房、1981。(フォークナー全集 24)

—。『館』 東京：富山房、1967。(フォークナー全集 22)

フィッツジェラルド、F. スコット。『グレート・ギャツビー』 東京：

新潮社、1974。(新潮文庫)

ハリス、トマス。『羊たちの沈黙』 東京：新潮社、1989。(新潮文庫)
マッカーシー、メアリー。『グループ』 東京：早川書房、1972。(ハヤカワ文庫)

メルヴィル、ハーマン。『代書人バートルビー』 東京：国書刊行会、1988。(バベルの図書館 9)

——。『信用詐欺師』 東京：国書刊行会、1983。(メルヴィル全集第11巻)

オコナー、フラナリー。「善良な田舎者」^{いなかもの} 『オコナー短編集』 東京：新潮社、1974。107-143。(新潮文庫)

プーゾ、マリオ。『ゴッドファーザー [上]』、『ゴッドファーザー [下]』 東京：早川書房、1973。(ハヤカワ文庫)

ロス、フィリップ。『さようなら コロンバス』 東京：集英社、1977。(集英社文庫)

サリンジャー、J. D. 『ライ麦畑でつかまえて』 東京：白水社、1985。(1964年の初版を補正した新装版)

スタインベック、ジョン。『真珠』 東京：角川書店、1957。(角川文庫)
スタイロン、ウィリアム。『ソフィーの選択 [上]』、『ソフィーの選択 [下]』 東京：新潮社、1991。(新潮文庫版：1983年の初版の改訂版)

ソロー、ヘンリー・デイヴィッド。『森の生活(上)』 東京：岩波書店、1995。(岩波文庫：新訳)

トウェイン、マーク。『アーサー王宮廷のヤンキー』 東京：東京創元社、1976。(創元推理文庫)

アップダイク、ジョン。『走れウサギ [上]』、『走れウサギ [下]』 東京：白水社、1984。(白水uブックス版：1964年の初版を改訂した1975年の版をさらに改訂した版)

ウォーカー、アリス。『いい女をおさえつけることはできない——アリス・ウォーカー短篇集』 東京：集英社、1986。(集英社文庫)

——。『カラーパープル』 東京：集英社、1986。(集英社文庫)

ウェッブ、チャールズ。『卒業』 東京：早川書房、1974。(ハヤカワ文

庫)

ホイットマン、ウォールト。「ぼく自身の歌」 『草の葉(上)』 東京：
岩波書店、1969。(岩波文庫)

ウィリアムズ、テネシー。『欲望という名の電車』 東京：新潮社、1988。
(新潮文庫)

拙 論

村上陽介、「アメリカ小説の翻訳書に見られる問題点(上)」(『女子大文学』
外国文学篇47号 [1995]、pp. 27-65)

——。「アメリカ小説の翻訳書に見られる問題点(中)」(『女子大文学』
外国文学篇48号 [1996]、pp. 27-89)

